平成22年度 1級建築士 最終合格占有率
業界実績 No.1

1級建築士
最終合格者数 4,476人中
当学院生合格者数 2,243人
50.1% 合格者の2人に1人は、
日建学院の受講生です。

2011年
2級建築士も圧倒的な合格率！合格者数！

基礎建築科 合格率 98.2%
設計建築科 合格率 93.7%

合格実績 2011

全国の総合格者 7,039名中
2,919名が日建学院受講生です。

『日建学院生の使っている教材を見てみませんか？』
『日建式の学習指導（受講形態）を知っておきませんか？』
『高合格率のカリキュラムが気になりませんか？』

担当アドバイザーがしっかりと説明致します。
あなたの「目」で「耳」でちゃんと確認して下さい。きっと「合格」が見えて来ます！
最高の日建学院までお気軽にお連絡下さい！

全国47都道府県
170校！

日建学院 コールセンター 0120-243-229

建築士累計輩出数
27万人超！
確認申請は住宅性能評価センターへ
正確・迅速・丁寧な対応を、お約束します。

■建築確認：37都府県
業務区域：宮城県、福島県、茨城県、栃木県、群馬県、
埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、新潟県、富山県、
石川県、福井県、山梨県、長野県、岐阜県、静岡県、愛
知県、三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良
県、和歌山県、鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口
県、福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎
県、鹿児島県

■住宅性能評価
■【フラット35】適合証明
■住宅瑕疵担保責任保険検査
■長期優良住宅
■住宅版エコポイント
■住宅省エネラベリング
■認定省エネ住宅

○就職活動中の学生の皆さん！当社では、一級建築士はもちろん、建築基準適合判定資格も取得できます。
○一級建築士の方・建築基準適合判定資格者の方！当社で、審査者・検査者として活躍しませんか？
☎03-5367-8770（管理部・総務課）までご連絡ください。

株式会社住宅性能評価センター
www.seinouhyouka.co.jp
NICHE 2012 vol.35 目次

10 同窓会長あいさつ「大きな世界を仰ぎ見て」
加藤隆弘

特別企画
12 工学院大学の東日本大震災に係る復興支援プロジェクト
「立ち上がるための住まい展」を中心に

TOPICS
24 1 加藤直樹君（修士 1年）がコンペ連続受賞
26 2 藤本教授＋藤本研究室の作品が神戸ビエンナーレでグランプリを受賞
27 3 ミラノ工科大学にて研究・国際交流ワークショップ
28 4 後藤研究室が日本建築学会主催建築 デザイン発表会で受賞
29 5 3大学連携プロジェクト「防災・減災・ボランティアを
中心とした社会貢献教育の展開」
9 6 東京建築士会「住宅課題賞」審査
7 7 妙定院展と増上寺ミニツアー
30 8 第4回 高校生の建築プレゼン・アイディア・コンペ
32 9 2050 EARTH CATALOGUE Exhibition UIA 2011 TOKYO
10 10 DOCOMOMO Japan 150 _Future and Legacy 展の会場デザイン
33 11 工学院大学名誉教授荻原正三先生「叡興・亀寿のお祝いの会」開催
12 12 建築系大学院生・学部生に朗報！「総合資格学院奨学金」が設立
34 13 「NICHE」別冊「日本の近代建築を支えた建築家の系譜」
14 14 1級建築士の合格発表（全国大学別ランキングベスト20位）
35 15 建築系学科同窓会総会の報告

36 新刊書紹介

125周年特別企画
38 日本初の「都心型超高層キャンパス」誕生秘話
谷口京彦
50 工手学校卒業生と台湾総督府の土地調査事業
蔡 龍保

輝かしき先輩たち
56 第13回「河口庄一」
類洲 環

建築デザイン特論
62 狭小住宅についての考察「究極の条件からの住空間づくり」
川口通正
66 空間を変容させ、空間と人のかかわりあいを深めるスーパーラフィック
菊竹 雪
NICHE 2012 vol.35 Contents

10 — New Year, Brighter Future, More Pride
    KATO Takahiro

Special Edition

12 — Tohoku earthquake reconstruction support project
    “The recovering exhibition after Tohoku earthquake”

TOPICS

24 — 1 Undergraduates and Postgraduates Performed Well in Design Competitions
26 — 2 Team Led by Prof. Fujiaki Won Grand Prix in Kobe Biennale
27 — 3 Italo-Japanese Collaborative Research and Cultural Exchange in Politecnico di Milano
28 — 4 Research Presentations Highly Acclaimed in the AIJ Design Presentation 2011
      5 Three-university Collaborative Project -- "Social Contribution through Accident Prevention/Reduction and Volunteer Activities"
29 — 6 'Housing Design Award' by Tokyo Society of Architects & Building Engineers
     7 Mini-tour -- Myojin Temple Exhibition and Zojo-ji Temple
30 — 8 4th "High School Student Fresh Idea Competition for Architecture"
32 — 9 2050 EARTH CATALOGUE Exhibition UIA 2011 TOKYO
     10 DOCOMOMO Japan 150 _Future and Legacy Exhibition
33 — 11 Celebration for Mr. Shozo Hagihara, Emeritus Professor, Kogakuin University
     12 New Scholarship Available by Courtesy of Sogo Shikaku Gakuin
34 — 13 'Architects Contributing to the Development of Modern Architecture in Japan"
     14 Result of 1st-Class Architect Examination 2011
35 — 15 2011 General Meeting of Alumni Association

36 — New Books

The 125th Anniversary Edition

38 — A Story behind The Birth of "Japan's First Urban Skyscraper University Campus/Building" — TANIGUCHI Munehiko
50 — The land research project by a graduate of the Kosyugakko and Governor-General of Taiwan — TSAI Lung-pao

Our Great Seniors

56 — Shoichi Kawaguchi
    RUJSU Kan

Special Lectures on Architectural Design

62 — A Study on Small Houses in Crowded Environment
    KAWAGUCHI Michimasa
66 — Super Graphic: A Possible Measure for Special Changes and Improved Relationship between Space and Man — KIKUTAKE Yuki
NICHE 2012 vol.35 目次

NICHE Interview
70  東京駅ステーションギャラリーから有楽町ルミネへ、時代の先端を走る
鈴木 武

NICHE Passport
76  フランス歴史都市を巡る旅
小林 由理
78  米国のグリーンインフラストラクチャーを巡る旅
花井 建太
79  北欧4カ国〜自然とともににある建築と街中のデザイン・アートを巡る旅
田中 美佳
80  ドイツ 木組み家屋の街から学んだこと
松島 香織

NICHE Letter
82  伊東さんとの仕事を通して
横田 历男
86  デザインを伝える
新海 俊一
88  三姉妹の家
平井 充

大学近況、研究室を訪ねて
90  倉田研究室
92  鈴木研究室
94  吉部研究室

NICHE Gallery
96  ひおプロダクト
半田 雅俊
100  Forest bath
尾関勝之+萱沼宏記
104  重なりがつくる空間
小島 光晴+小林 亜
108  道の駅尾花沢 花笠の里「ねまる」
香川 浩

112  建築学部 新任教員の挨拶

114  2011年度 研究室の在籍者名簿
116  2010年度 卒業設計・卒業論文・修士論文・博士論文題目
NICHE Interview
A pioneer who built Tokyo Station Gallery and LUMINE
Yurakucho — SUZUKI Takeshi

NICHE Passport
Lyon, France — City of Illuminations
KOBAYASHI Yuri

Green Infrastructure in Seattle and Portland, USA
HANAI Kenta

Visiting The Scandinavian Capitals — Design Arts and
Architecture Living in Harmony with Nature — TANAKA Mika

A Lesson Taught by German Cities with Half-timbered Houses
MATSUSHIMA Kaori

NICHE Letter
Working with Mr. Toyo Ito
YOKOTA Leo

Communicating the Design
SHINKAI Shunichi

A House for Three Sisters
HIRAI Mitsuru

News of the laboratory
KURATA Lab
SUZUKI Lab
ABE Lab

NICHE Gallery
Bio Product
HANDA Masatoshi

Forest Bath
OZEKI Katsuyuki + HISHINUMA Hiroki

Space Creation by Layers
KOJIMA Mitsuharu + KOBAYASHI Wataru

Michi-no-Eki Obanazawa Hanagasa-no-Sato "Nemaru"
KAGAWA Hiroshi

Messages from Newly appointed Teachers

The members list in the year 2011
Diploma design, graduation thesis, master's thesis and doctoral thesis
in the year 2010
構造計算適合性判定のご指定は
株式会社 建築構造センターへ！！

信頼
過去1,836件の判定実績が信頼の証です。
※平成19年8月～平成22年12月までの判定件数

迅速
的確な審査業務により、判定日数短縮を図ります。

充実
15都県の判定が8事務所で行えます。
※鳥取県、長崎県は県在事務所または東京事務所での判定となります。

業務指定
青森県　秋田県　宮城県　山形県　福島県
群馬県　栃木県　埼玉県　東京都　神奈川県
鳥取県　島根県　長崎県　宮崎県　鹿児島県

新事務所を近日オープン予定です。
池袋事務所　千葉事務所
沖縄事務所　愛知事務所

平成22年2月から耐震診断等評価業務を開始しました。

業務区域　日本全国
事務局と連絡先　東北事務所
〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町2-10-28
カメイ仙台グリーンシティ4階
TEL：022-726-5885

指定構造計算適合性判定機関
株式会社 建築構造センター

本社　〒600-0022 東京都新宿区新宿2-1-2 白鳥ビル2階
TEL：03-5418-9777
http://www.kensaien.com

東北事務所　〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町2-10-28 カメイ仙台グリーンシティ4階
TEL：022-726-5885

福岡事務所　〒815-8533 福岡県福岡市博多区1-1-5 ヤマメビル1003号室
TEL：092-501-7777

指定構造計算適合性判定機関
株式会社 建築構造センター

代表取締役社長　田野邊 幸裕（建築学科 昭和44年卒）
常務取締役　加藤 隆弘（建築学科 昭和52年卒）
取締役　平野 久雄（建築学科 昭和41年卒）

山陰事務所　〒690-8874 島根県松江市中央町6番地
TEL：0852-82-9144

長崎事務所　〒850-0833 長崎県長崎市方舟町6-33 長崎エッジ501号室
TEL：095-829-9222

宮崎事務所　〒860-8866 宮崎県宮崎市宿泊町5-10 ミネックス川部8階
TEL：0985-75-9477

九州事務所　〒900-0024 福岡県福岡市中央区10-10 健康第一ビル4階
TEL：092-89-1205
PRの為にはトータルソリューションが大切です。

企業・製品プランニング
セールスプロモーション
広告デザイン制作
WEB サイト構築・運用
基幹系システム開発・運用
販促コンサルティング
IT コンサルティング

日本ジョイントソリューションズ 株式会社

www.jjss.co.jp

社名　日本ジョイントソリューションズ株式会社（JJS）Japan Joint Solutions Co.,Ltd.
所在地　〒107-0062 東京都港区南青山 5-6-6 Maison Blanche 14F
TEL：03-5464-0113（代） FAX：020-4663-9836 MAIL：contact@jjss.co.jp
設立　2004年3月
資本金　2,000万円
代表取締役社長　杉山敏美（山口ふるさと大使）
建築系専門学校の卒業生は、実用的なスキルを身につけ、建築分野で活躍することができる。
インテリアコーディネーター講座

未来のために「今」できることを考える!

皆さんは日々の知識の積み重ねに励み、アルバイトや仲間との交流を通じて、「今」しかできない、貴重な経験を重ねていくことを思います。

学生時代は、そうした貴重な経験や体験ができる場であると同時に、今を見据え、自分

進む路を方向づける場でもあります。

インテリアコーディネーターは、建築・不動産業界での仕事に活きる資格であるだけで

なく、資格をチャレンジする過程で得る知識は、実務に就いた時に必ず皆さんの助け

となるでしょう。また、就活に於いて有利な立場に立つことは言うまでもありません。

自分自身の未然のために、学生である「今」できることにチャレンジしませんか。

①就活に役立つ!

皆さんの人間性や個性を活かして企業側に伝えることはなかなか難しいです。なぜ、目

指す企業に就職するために、企業研究やオフ訪問をし、面接準備を進めるのが一般的な就

活対策ですが、その他に自身の能力や強みを分かりやすく企業側に伝えることができる

のが「資格」です。資格はそれ自体が価値のあるものですが、就活において資格の目標

に向けて努力をし、結果を出した人物」として評価されます。「住」に関する多くの業界で活

かせられている資格です。

TOPICS 若干回復も依然低い就職内定率

今春卒業予定の大学生の就職内定率は、昨年2月現在まで約79%と、過去2番目に低かったが、厚生労働省と文部

科学省の調べでわかるように、過去最も低かった前年同様によりポイント改訂がされ、依然として厳しい状況が続く。厚

生労働省は、円高の长期化や欧州の金融危機の影響もあり、今後も大きく改善するかは不明確だとしている。

この数値には、希望者の数でも徐々に増えており、求人条件が厳しくなっている。

②知識が生涯の財産に!

建築・住宅・インテリア関連の仕事に従事している方でも、インテリアを基礎からしっかり学

んだということは意外に多くありません。受験対策として得る知識は、必ず実務で役に立

ちます。しっかりとした知識・教養に裏打ちされたスキルは、生涯を通じて皆さんの大きな財

産となります。比較的時間に余裕のある「今」こそチャンスに最適なタイミングです。

TOPICS 若干回復も依然低い就職内定率

今春卒業予定の大学生の就職内定率は、昨年2月現在まで約79%と、過去2番目に低かったが、厚生労働省と文部

科学省の調べでわかるように、過去最も低かった前年同様によりポイント改訂がされ、依然として厳しい状況が続く。

昨年の経験を活かし、より受講しやすく、より理解しやすい講座へニューアル!

・試験前の準備期間が2ヶ月から4ヶ月へ

昨年度の反省から、8月初旬までには試験に必要な基本事項の理解を目指せ、ゆっくりとしたスケジュールに改良。早期から学習を始めることで、予習と復習の十分な時間が取れるため、試験対策以外にも、大学の講義や将来の実務で役立つ知識まで、より密度の高い学習方が可能となります。

・学内スケジュールに配慮した講座日程

より多くの方にスケジュールを活かして欲しいとの思いから、できるだけ通いやすい講座日程に調整を行いました。

■開講：6/3(日)
■場所：工学院大学 新宿キャンパス

受講料・連続受講割引

申し込みは、同窓会ホームページ（http://www.kogakuin.or.jp/kenchiku/）にて必要手続きが簡単にできます。

〈主催〉工学院大学 建築系学科 同窓会
大きな世界を仰ぎ見て

昨年の歩み

2011 年 3 月 11 日に、東北・三陸沖を震源とする巨大地震（東北地方太平洋沖地震）が発生しました。マグニチュード 9.0 という日本国内観測史上最大の地震はその後「東日本大震災」と命名され、その災害規模は 1995 年 1 月に発生した阪神淡路大震災を上回るものとなりました。

2011 年はなんと言っても、災害が多い年でした。

3 月 11 日の東日本大震災は未曾有の大地震でしたが、それに至る過程の噴火に始まり。

2 月 7 日は、南九州の火山帯が活動期に入ったのではないかと心配されるほどのがん炭などの噴火が続きました。一方、新燃岳からは、約 30 キロ離れた鹿児島桜島でも火山爆発が相次ぎました。

9 月 14 日は、台風 12 号が西日本を中心に大きな被害をもたらし、特に紀伊半島は記録的な豪雨に見舞われ、大きな傷跡を残しました。

続く 9 月 21 日には、台風 15 号が静岡県を直撃し、浜松市内では 20 万を超える人に避難勧告が出された。局所的に発生した津波は多くの建物の屋根を吹き飛ばしました。

ここに地震、津波、原発、台風などによるさまざまな災害にあわれた方々、関係者の方々に対し、謹んでお見舞いを申し上げます。

災害時大学では、新宿校舎 1 階のアトリウムを解放し、従来困難を一日で間に合わなかった事務所や、新築校舎から、約 30 キロ離れた鹿児島桜島でも火山爆発が相次ぎました。

9 月 14 日は、台風 12 号が西日本を中心に大きな被害をもたらし、特に紀伊半島は記録的な豪雨に見舞われ、大きな傷跡を残しました。

続く 9 月 21 日には、台風 15 号が静岡県を直撃し、浜松市内では 20 万を超える人に避難勧告が出された。局所的に発生した津波は多くの建物の屋根を吹き飛ばしました。

今年の思い

日本全土が至るところでダメージを受けた 2011 年でありましたが、学園や同窓会は、その時々に合わせ、持てる技術力や社会のために役立てた北元一年でもありました。その貴重な経験を生かし、私たち 2012 年に踏み出しました。

今年は学園創立 125 周年の記念すべき年です。今秋には盛大に記念式典も計画されています。是非ご参加ください。
また、この大きな事業のためにも募金をよろしくお願いします。

同窓会では、工学学部から工学院大学に至る伝統の系譜を繋ぐ了単行本「日本の近代建築を支えた建築家の系譜」と題
新年度、新しい風、誇り高揚

在去年的3月11日，强烈地震袭击了日本东北部海岸。作为高木大学的代表，我向所有受害者和失去亲人的家庭表示深切的同情。在这种巨大的生活和破坏的损失面前，我想表达我对你们的同情。

日本的社会是孤独的，人们不知道自己所处的状态。无论从哪里来，它都是一个创造的场所，即使在困难时期也能改变。大学也面临着同样的问题。它是一个学生在「誇り教育」中成长，学生们在挑战中学会独立和自立。

在学生中，「誇り教育」表现在对课程的认真，对工作的热情，对目标的追求。每个人都像一个挑战者，每个人都像一个挑战者，每个人都像一个挑战者。这种精神是工学院大学的精神。

让我们一起期待新年度的到来，让我们一起期待新年度的到来，让我们一起期待新年度的到来。
特別企画

2011年、東日本大震災に対する
工学院大学の様々なアクションを報告します。

災害から立ち上がるためには、休むべき住まいが必要とします。安心して居るできる住まいは、心身とも安定した暮らしと明日への活力の必要条件。像ができないような破壊的被害を受けた東日本大震災、津波、そして原発事故から早一年が過ぎつつあります。被災者への仮設住宅供給も一息つき、本当の復興のつえが届きはじめています。

本学の現在、被災地の被災状況の調査、仮設住宅での暮らしの提案、復興住宅の建設などさまざまな支援を教育活動の一環としておこなっております。125周年を迎えるにあたり、こうした復興支援、そして今後の仮設住宅、復興住宅への提案などをみなさまに見にいただく機会を企画いたしました。木造の仮設住宅の現物展示や、他大学の研究やさまざまな試みを新宿校舎アトリウムを使って、ダイナミックに展示しました。被災地の復興支援と今後のみなさまの防災計画の一助となればと考えています。

工学院大学副学長 長澤 泰

工学院大学の
東日本大震災に係る復興支援プロジェクト

「立ち上がるための住まい展」を中心に

「立ち上がるための住まい展」開催概要
会期 === 2011年9月26日（月）〜9月30日（金）
10時〜21時（最終日は13時まで）
会場 === 工学院大学 新宿キャンパス
1F アトリウム
3F アーバンテックホール（27日講演会）
主催 === 工学院大学 一般社団法人 住まいの学校
協力 === 岩手県住田町、筑波大学、新潟大学、
アルセッド建築事務所、熊谷産業、東京スタディオ
後援 === 東京都、新宿区
展示内容
石川市毎日住宅建設／工学院大学 後藤治研究室
木造建築物の被災調査／工学院大学 江原道人研究室
暮らしから考える仮設住宅／工学院大学 木下順子研究室
MONA Project／工学院大学 吉田清彦研究室
ダンボールシェルター／工学院大学 杉本敬彦研究室
震災復興まちづくり習慣　岩手県釜石市プロジェクト／工学院大学 佐藤新研究室
福島県いわき市木造仮設住宅／早稲田大学 先端都市研究所
地元の大工でつくり続ける／アルセッド建築研究所
仮設のトリセツ／新潟大学 仮住用部品研究室
震災への取り組み／東京都 新宿区
仮設住宅で暮らす被災者のために、家具を設計し寄付する「MOVA PROJECT」。
仮設住宅で住むために、被災者の方々は自分達で家具を用意する必要がある。
しかし、通常の家具だと室内が狭くなり、生活しづらくなる。そこで、仮設住宅での生活にあわせた可変性のある3つの家具、MOVA TABLE・MOVA CHAIR・MOVA SHELFを提案し、現地に400セットを寄贈しました。

The team took on "MOVA PROJECT" in which they designed and donated household furniture to those who were living in temporary housing. Helpless evacuees had to get furniture in place as they moved in the housing. However, regular furniture eats up too much space of the temporary house and thus makes evacuee's life difficult. That is why they suggested three pieces of furniture, "MOVA TABLE", "MOVA CHAIR" and "MOVA SHELF". Size of those pieces can be adjustable to actual need of evacuees' lives in the temporary housing. The team donated 400 sets of the subject furniture to the disaster-stricken areas.

MOVA TABLE

MOVA CHAIR
美しい村再生プロジェクト

「美しい木造の恒久住宅」を伝統構法で地域の工務店が安く早く建設するという提案。
今回の震災で多くの方が住居を失い、政府は大量の仮設住宅を建設した。しかし仮設住宅は居住性、美観に優れたものとは言えず、期間が限定された住まいいとなるためロスが生じる。さらに、建設のメリットである安さと速さは、今回は土地や資材の不足により、十分に機能しなかった。災害後の対策として、この恒久住宅の提案により従来の仮設住宅以外にも選択肢があり得たことを知っていただけると幸いだ。

A proposal on building fine-looking wooden permanent houses fast and economically by way of contracting work out to local firms that use traditional technique.

In the wake of the Tohoku Earthquake and Tsunami, many people lost their houses. The government then provided a large number of temporary housing. However, such temporary houses tend to make compromise on their habitability and aesthetics. Due to the inherent short duration of the usage, temporary housing is essentially wasteful. Furthermore, the economy and the short turnaround, the benefits of this particular makeshift housing construction were not quite recognized this time due to the shortage of available land and building materials. We would be happy if we could successfully hint some of you that the idea of permanent housing construction would have been viable option in addition to building conventional temporary housing as a post-disaster relief measure.

石巻市復興住宅建設
後藤治研究室  Goto Lab

Residence for the Recovery in Ishinomaki
震災直後、避難所の体育館等で活用してもらうために開発したダンボール・シェルターの提案。
体育館等の広くて視線が行き交う大きな空間に、人間のスケールにあった箱を提供する事でプライバシーの保護と安心できる環境を図立した。4枚の市販のダンボールをカットし組み合わせることで誰でも簡単に作成することができ、窓や扉を開けたり、側面に名前を書いたりと自由にカスタマイズすることができる。小中学生を対象としたダンボールシェルター作りのワークショップも開催した。

This laboratory proposed cardboard shelter designed for the use in gymnasium of schools.

The cardboard shelter is to be used in emergency after disaster. The shelter is made to fit to the physical size of human and it not only protects privacy but also provides sense of security where people are exposed to the stare of numerous strangers in gymnasium. Any one can make a cardboard shelter easily by cutting and putting 4 pieces of “off the shelf” cardboard together. You can design your shelter in your own way by adding windows and roofs as well as writing your name on the side of the cardboard. A workshop was set up for school children to learn how to assemble the cardboard shelter.

ダンボールシェルター
鈴木敏彦研究室  Suzuki Lab

Cardboard Shelter
震災復興まちづくり構想
／岩手県釜石市プロジェクト

遠藤新研究室 Endo Lab

釜石市震災復興支援プロジェクト。釜石市は、今回の地震による津波で壊滅的な被害を受けた。被災地域の復興計画策定にあたって、市民と参加して主体的に計画づくりに着手し、早期復興を果たすことを目的として「復興まちづくり集中ワークショップ」を開催された。総括コーディネーターである遠藤新教授、遠藤新研究室のメンバーもこのワークショップに参加し、多くの市民とともに釜石市の復興まちづくりについて議論を交わした。

釜石復興まちづくり集中ワークショップ
東日本大震災から岩手県釜石市の復興構想づくりを
4つのアプローチで考える。

A. 防災 B. 地域性 C. 流域 D. 居住

1. 釜石市の緑地・空地の分析と避難空間の分析

東部地区の分析図

2. 津波に対応した都市モデルの形態デザイン

津波が来たときに、すぐに撤退へ逃げられない人はどうするべきか。このとき一段と重要な場所として利用されるのが津波避難ビルである。このことも含めて釜石市震災ビルの配置、避難設備を取り入れた津波に強い市街地の形態のモデルを考えていく。

3. アメニティの復興

生活の中で競湯、飲み屋など元気が出る場所は大切である。今、被災地でこれからどのように復興していくのか。仮設住宅の魅力は何なのか。アメニティ（人を引きつけるもの）がどういったように復興していくのかを考える。

4. 先人からの言い伝え

昔から伝わる言い伝えや石碑により今回の大震災による被災から免れた人達がいる。そんな先人の教えはどんなものか調べてまちのつくり方の教訓として

They focused on the earthquake reconstruction assistance project for Kamaishi city. The city has suffered catastrophic damage caused by the great earthquake and tsunami. As part of recovery effort dedicated to disaster-stricken area, an intensive workshop of city rebuilding was organized with an aim to get the entire citizen engaged proactively in recovery plan development and speedy city restoration. Prof. Endo, a general coordinator of this project, together with the members of his Lab, participated in the workshop and discussed approaches toward the town rebuilding in Kamaishi city jointly with a number of citizens.
宫城県気仙沼市ボランティア活動
村上正浩研究室＋久田嘉章研究室
Murakami Lab + Hisada Lab

4月23日
○遠藤中学校体育館
ダンボールを用いて、プレイパークのための関注切り、様々な生活小物（テーブル、靴入れ、お皿など）や変換部屋の作製などを行った。

○小原木中学校体育館
スリッパ入れ、収納具、テーブルなどの生活用品を用意し、学生たちの基本的な生活の設置を行った。生活環境の確保として、本部スペース、授業スペース、子供の効能スペース、授業、食事スペースなどの関心作りによる環境改善のアドバイスも行った。

4月24日
○遠藤中学校体育館
23日に引き続き、ダンボールを用いた制作活動。
○松本公民館
子どもの遊び場や収納室として使用されるシェルターの設置や、テーブルなどの生活用品を制作。

4月16日
○気仙沼ゴルフクラブ
子ども遊び場プロジェクトとして、ちいき理科教室、子ども教室を行った。子どもは「ソラマサ」をつくろう、「オリジナルうちわ作り」「スマイルをつくる」、「お絵かき教室」、「スーパーボールをつくろう」「ヨーヨー作り」を実施。ほか、スポーツイベントの支援も行った。

7月16日
○気仙沼ゴルフクラブ
子どもは遊ばすプロジェクトとして、ちいき理科教室、子ども教室を行った。子どもたちは「ソラマサ」をつくろう、「オリジナルうちわ作り」「スマイルをつくる」、「お絵かき教室」、「スーパーボールをつくろう」「ヨーヨー作り」を実施。ほか、スポーツイベントの支援も行った。

4月23日
○遠藤中学校体育館
ダンボールを用いて、プレイパークのための関注切り、様々な生活小物（テーブル、靴入れ、お皿など）や変換部屋の作製などを行った。

They led volunteer activity twice, the first in April and the next in July. They conducted activity at the shelters in Kesennuma city under the full support from Kanagawa Citizen's Board. With regard to April activity, they provided help evacuees to improve living condition at the shelter using easy to handle cardboard box on the basis of their knowledge as volunteers who major in architecture.

In July, they took on the project referred to as “Let children play, Kesennuma!” which was intended to induce the children there to shout of joy and laugh.

○大谷公民館
大谷公民館では、子ども支援活動として理科教室「スライムをつくろう」を行った。

2班
○市立総合体育館
子ども遊び場、カフェコロハの支援、木製活動、環境整備の支援（シェルターなど）を行った。

○原木中学校体育館
前回のボランティア活動（4.22~4.25）の際にダンボール用具の製作などの支援活動を行った。今日は製作した道具を検査を行った。

3班
○松原福祉支援団体
地域社会福祉・介護福祉の活動、子どもと継続、理科教室のほか、スイカ割りや人形劇、参加果物配布などを行った。
大崎市・美里町における住宅などの倒壊例
震度7が記録された震災には、地震動の特性により被害は軽微だったとされる。とはいえ、地盤の悪い地域などにおいて、倒壊や大破などの被害が無かったわけではない。

陸前高田市の高台における津波被害
陸前高田市内でも高台に上がると残存する木造建築の数が増えている。

木造建築物の振動による被害
振動被害は比較的軽微とされるが、地盤の悪い地域を中心に、住宅、店舗などの倒壊、大破の被害があった。地震動に短周期成分が多く含まれるためか土壌の被害が目立つ。軟弱地盤や木材の劣化は被害拡大要因となった可能性がある。また、地盤変状に伴う建物の被害も見られた。

木造住宅の津波による被害
津波による被害状況は、津波外力の大きさによって大きく変わる。陸前高田市街地を襲ったような津波に対して、建物の倒壊の端末には限界がある。一方、高さ5m以下で流速もそれほど速くないと思われる津波に対しては、木造建築物で原型を保っている例も多く見られた。

東日本大震災の被害状況
河合直人研究室 Kawai Lab

Violent nature demolished houses and stripped us of otherwise quiet life in a single blow. Facing the harsh reality and documenting the data patiently on such disaster, is one of the crucial tasks we have to undertake now so that we can get better prepared for the future disaster prevention. We cannot afford to avert our eyes from the fact however painful it may be. We are truly thankful to all the people who so unselfishly offered us the help with our study amid post-disaster chaos.
Generally, the primary obligation of Temporary Disaster Housing is to get people into shelter as quickly as possible. While this is essential in the short term, we observe that the time frame of many temporary housing tends to be indeterminate and the time periods are significantly longer than their planners have imagined, sometimes stretching into several years.

With this in mind the studio has looked at conditions that meet the needs of the immediate, while acknowledging that there are critical community building devices that must be addressed both within the house to build family interaction and in its relationships to the external community. These conditions are essential to allowing the temporary to address longer time periods and rebuild the communities that have been ravaged by disasters both natural and man made.

**COMBIME HOUSE**
近藤星子 + 吉備尚志 + 萬吉健亮

**CONTAINER HOUSE**
井上良孝 + 秋山佳那

**Drawer HOUSE**
渡辺聖子 + 山下里裕美

---

暮らしから考える仮設住宅
木下庸子研究室  Kinoshita Lab
福島県応急仮設住宅
工学院大学名誉教授 南辺哲也 Minamiseko Tetsuya

建物を外から考えるか、内から考えるかによって、大きな違いがあることを今回マツマザと体験した。外からの考えとは、いかに大量の住戸数を簡速にかという住人的生活要望は想定されず、しかし予想した以外は否定できない。いかにして人間性豊かな生活を切り詰めて、どこまで住人が住むか、この最小の空間を作り出すことができるか、が課題であった。

とはいえ、予算制限も面積制限として20・30・40m² つまり6・9 12 坪の三種とその戸数13人13戸の割合でつくるとの条件であった。住戸126戸と談話室・集会場各1棟を郡山・会津・いわきに、どの都度となることになった。

基礎はR Cの板を造作安定させ、プレカット木組を張り、上下四面の6面に断熱材を貼り付け、県産の杉板で包み込んだ。開口部はスラガラス入りのアルミサッシで、南面の建物端いっぱいに「月見台」と呼ばれる曲げ線を敷きつめた。工期は最終段階では2週間で仕上げるほどのスピードアップが可能となった。

建物はその並べ方で大きく表情を変える。周辺の林地環境に適合させ、しかも駐車場も住戸内にあるだけ近づけることを考慮して、住人の日常生活に関わりを与える内外が考えたと思う。

詳細は「南辺研究室 O8 会ブログ」をご覧ください。http://blog.sekoken.com/

What is the most important challenge for the architect and his support team when designing and constructing temporary houses for evacuees from the catastrophic disaster caused by the Great East Japan Earthquake and its aftermaths?

Even under the strict financial limitations and the poor land availability, we were convinced that the architectural team in charge had to ensure, if possible, greater than the minimum level of quality of life and peace of mind for the evacuees, who had been exhausted due to the series of tragic incidents. From the beginning, our challenge lay in how we could provide comfortable atmosphere by minimizing the deterioration of living quality.

We were entrusted to the design and construction of 126 houses and one meeting space in each of the three locations in Fukushima Prefecture, namely Koriyama, Aizu and Iwaki.

They were built on the reinforced concrete basis, featuring the pre-cut wooden structure.

Considering wintery coldness of the region, all the walls, ceiling and floor were filled with a plenty of heat insulation materials. The double-glazed aluminum sashes were also used. As a measure to encourage communications among those living together in the area, the wooden veranda-like porches were attached to all through the south facade.

Thanks to everyone's efforts and dedication, the construction period were reduced to two weeks.
"TORISETSU" a Handling Manual for Temporary Housing
仮設のトリセツ

New University of Niwasa Research Laboratory

Kasedo no Torisetsu" denotes in Japanese a user’s manual for temporary housing. The manual instructs the users how to make the best use of the temporary housing. From 2004 through 2007, Niwasa prefecture was hit by three disasters in a row: flood damage, the Mid-Niigata Prefecture Earthquake and Chuetsu-oki earthquake (the earthquake off the coast of central Niigata Prefecture). Dealing with the aftermath of those three disasters, local public authority built 5,500 temporary houses in aggregate and they made a follow-up survey on the users of housing regarding the secrets that make the life in temporary housing tolerable. The university has learned a great deal from the survey and they compiled all the useful data in a "Kasedo no Torisetsu". They collected such data in the course of driving recovery project referred to as "Kasedo de Café" and they were really impressed by the people's wisdom of life in utter adversity.

仮であり、楽しい我が家へ

The Tokyo Decision —The Measure for Reducing Disasters—
東京の決断——減災への取り組み

The Metropolis of Tokyo

It is now a wide belief that there is around 70% chance of a big earthquake to happen in the next 30 years in the Metropolis of Tokyo. Therefore, we desperately need the measures to prevent or mitigate damage. Solid road network for emergency transportation purpose works just as large artery does for human's health because it undertakes such crucial missions like life-saving, fire fighting and goods transporting. Thus, we consider it imperative to keep roads open by all means without letting collapsed buildings obstruct free traffic. Such a task is crucial requirement for the protection of lives and properties of people in Tokyo as well as for Tokyo to maintain its functional capability as the nation's capital. For this purpose, particularly important roads are designated as "specific emergency transportation road". Buildings along these roads are obliged to have seismic diagnosis and are given subsidy for renovation if the diagnosis so requires. As such, potentially hazardous buildings along these roads are now being seismically reinforced. We are determined as our buzz word now reads, "Let not a single building collapse! It won’t go down and we won’t let it go down!"
Wooden Temporary Houses in Iwaki Fukushima

The university proposed a wooden temporary housing built under the so-called, “Itakura construction method”. The method makes it feasible to build a wooden house that excels in earthquake-proofing and fire-proofing by using Japanese cedar planks that have excellent features of durability, heat insulation and humidity resistance. This proposal focuses not only on supplying temporary housing but also on the creation of town that provides its inhabitants study, yet calm and peaceful landscape and structure composed of wooden housing. We pursue a goal of creating a stock of social capital in the form of local housing infrastructure that lasts 100 years. At the same time, we are trying to reactivate the whole community by utilizing local natural resources and employing local craftsmen.

Collaboration with Local Carpenters for the Recovery

ALSEd (Architectural Laboratory for Systems Environment Development)

They submitted a proposal of temporary housing for an intermountain area of Yamakoshi district of Nagaoka city, Niigata Prefecture. The area was hit by the Mid-Niigata Prefecture Earthquake on Oct.23, 2004 and people in the region suffered extensive damage; 328 houses of the 747 houses were totally destroyed, 59 houses were half destroyed and 123 houses were partially destroyed. Virtually no house remained intact. Nagaoka city organized a committee so that the largest possible number of victims could return to their residential area at the soonest possible timing and rebuild their houses by themselves. The committee developed a temporary housing model for the use in intermountain area featuring snow-proof and other properties fitting to the life style in the area at the cost of about 10 million yen as a result of its endeavor.
MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 2011
空間デザイン「大賞」を受賞

2011年春の全国の大学院・学部全ての卒業作の優秀作296作品が応募され、第一次審査通過は45作が選出された。10名の審査員による厳正な審査により加藤直樹君の卒業設計作品が見事「大賞」を受賞し好評として100万円を獲得した。なお、古窪尚志君（修士1年；木下研究室）も一次審査を通過し、同部門で本学からは2作品が入選したことは誠に喜ばしい。

〈審査員見談〉モノを建てるという世界を20世紀的な発想を遊びまわし、解体するプロセスを視野に入れた建築を提案する作品は、それからの建築のあり方を示唆する21世紀的な新しいコンセプトを持つものとして審査員に衝撃を与えました。他の作品とは、発想のダイナミックなレベルという点で一線を画しています。自らの考えを、西新宿の高層ビルを対象に表現した建築模型は、完成度の高さに加え圧倒的なまでのインパクトをもって、経済効率のみを追求した高層ビルの乱立する都市や現代建築が抱える問題点を訴えかけ、21世紀後半のランドスケープとしていくはずです。

展示・表彰式体験会場＝東京国際フォーラム
展示日時＝2011年10月26日（水）～10月29日（土）
11：00～19：00

UNIVERSAL HOME デザインコンペ 2011 優秀賞

このコンペは、「家族を守る家 O〇を守る家」テーマが与えられ、自由で〇〇を考え、住宅を設計するというものである。審査員は東京工業大学准教授の桝本由晴氏、加藤君ら3人は、〇〇の中に「風土」というキーワードを入れて住宅を提案している。これは住宅が家族を守ることと、建築されることで社会に開かれた場所になるという矛盾を建築空間で、解決しようとしたことが高く評価され「優秀賞」を受賞した。

表彰式＝2011年7月12日（火）
主催＝株式会社ユニバーサルホーム
第7回「新・木造の家」設計コンペ 最優秀賞 （実施設計決定）

本コンペは、健全な森林づくりの一環としてNPO「森林（もり）をつくろう」が主催となり、日本の木造建築の素晴らしさの浸透と、将来活用する優秀な木造建築の設計者育成を目的とした二段階競技設計で選ばれた。学部生2名との協同作品である。この「サンドイッチハウス」は、生活空間の内部と外部の接点として機能する通り広空間を住宅内に交互に配置し、戸の開閉によって外部空間と内部空間の変換が可能となるユニークなアイデア。東西方向に家族相互、南北方向には地域とのつながりを尊重。新しい地域コミュニティ形成も図った計画。また地域の材料を使った地方材料住宅を提案することで、地域経済の活性化にもつながっていく優れた計画である。今後、佐賀県においてこの案を採用希望するクリアントが決まり次第、実施される。

プレゼンテーション・表彰式＝2011年10月29日（土）
場所＝LIXIL 福岡総合ショールーム

共同設計者

鈴木明
神奈川県立上満高等学校 2008年卒
工学院大学建築デザイン学科 4年
福岡実習室 2013年卒業見込み

根本大輔
私立城北高等学校 2007年卒
工学院大学建築学科 4年
藤本研究室 2012年3月卒業見込み

第5回 長谷工デザインコンペ 2011佳作

このコンペは長谷工コーポレーション主催の集合住宅のアイデアコンペ。今年は過去最高の501件の応募があった。谷口研究室ではゼミの一課として2チームが応募し、これらの作品が上位10位に入り「佳作」を受賞した。この業界は物理的見解での豊かな「モノ社会」において、「モノ」を共有させる新しいライフスタイルを提案している。新しいコミュニティ住宅として成長していく発想が高く評価された。審査員は辰野義・乾久美子・藤本壮介・池上一夫。

表彰式＝2011年12月14日
主催＝（株）長谷工コーポレーション

Undergraduates and Postgraduates Performed Well in Design Competitions

During the academic year of 2011 (starting from April 2011), the undergraduates and postgraduates studying in Kogakuin University showed their ability and potentials in the leading design competitions organized by private companies.

Three teams won the highest prizes in the respective competitions and other two groups also received minor awards. (f.b.y.)
藤木教授＋藤木研究室の作品が
神戸ビエンナーレでグランプリを受賞

「神戸ビエンナーレ」は、2年に1度
神戸で開催される芸術祭で、ほぼ全ての
展示作品がコンペで選ばれるのが特徴で
す。このうち、メインとなる「アートイ
ンコンテナ国際コンペティション」部
門において、応募総数289案の中から、
わたしたち（藤木隆明＋工学院大学藤木
研究室※）の作品《人工地形》が、審査員
委員会の選定し、神戸ビエンナーレ大
賞に選出されました。

《人工地形》と名付けたこの作品は、
コンテナの中をいわばくり抜いたような
形で不定形な洞窟状の空間をつくり出し
たものです。柔らかいプラスチック素材
を等高線形状に切り出して約1000枚積
層しました。それ自体がひとつの大きな
家具のような空間で、訪れた人は思い思い
に自分の体にフィットする場所を見つ
けて、座ったり寝転んだりしてくつろぐ
ことができます。3Dモデリングによっ
てデザインした後は、手作業で完成
り、部材の切り出しから積層まで全て手
作業で行いました。その作業後は膨大で
したが、学生達の頑張りによって大きな
賞の受賞という形で結実したことを本当
に嬉しく思います。イタリアの著名な雑
誌「DOMUS」をはじめとして、海外の
数多くのメディアで紹介されました。

※制作を担当した学生……川村健介／福芳
樹／下谷紀／藤澤まく／桜田信貴／羽鳥
敏彦／上村有史／深谷義人／石神勇樹

“Artificial Topography” designed by
Ryumel Fujihi and Fujiki Studio of Kogakuin
University won the Grand Prize of Art in
Container International Competition in Kobe
Biennial 2011 in Japan. The idea is to hollow
out the volume inside a container in order
to build amorphous space like a cave. About
1000 sheets of the soft plastic material of
10-mm thickness were cut down in contour
line form, and were laminated like a stratum.

This is not only art work but also one big
furniture. Because all the portions are soft
like a sofa, and person who enter into this
space can relax by finding the place suitable
for the form of its own body.
ミラノ工科大学にて研究・国際交流ワークショップ

工学院大学はミラノ工科大学と2010年に国際協定を結んでいます。2011年5月10日～12日にイタリアにて共同研究・交流ワークショップを行い、10月26日に来日したマルコ・インペラドリ先生の記念講演を本学にて行いました。

5月10日レクチャーとワークショップ
工学院大学はミラノ工科大学と2010年に国際協定を結んでいます。2011年5月10日～12日にイタリアにて共同研究・交流ワークショップを行いました。工学院大学建築学科の鈴木敏彦教授研究室を中心とする学部・院生13名と、マルコ・インペラドリ教授の建築専攻の大学院生16名がチームを組み、国際設計コンペ「プレミオ・コンバッソ・ポランテ」の課題に着手しました。

5月11日ミラノ建築デザインツアーレコ2等賞「BEM ESTAR」
Veronica Cogliati, Vincenzo De Gregorio, Mattia Andrea Río
建築学専攻修士2年
長谷川敬志
建築学科3年
山本 昌平

レコ2等賞「BEM ESTAR」

10月7日
ミラノ工科大学のレコ校舎にて12チームのプレゼンと審査が行われました。卒業生で建築家の橋本のぶさんもトリノから駆けつけ、審査員として持続可能性の高いスペ施工を選定しました。パレルモ大学（イタリア）、リスクポ工科大学（ポルトガル）、シンガポール工科大学を抑えて、本学のチームが入賞しました。

10月13日
ポルトガルのヴィラヴィーゾーダで開催された「ストーンプロジェクト第1回国際ビエンナーレ ACES」では、本学2チームが3等賞と佳作を受賞しました。

10月26日
ミラノ工科大学のマルコ・インペラドリ教授が来日し、「シックス・アンド・ザ・シティ」と題して、ご自身の設計事務所のポリシーである「エネルギー効率の良い6つのデザイン原則」について講演しました。また、インペラドリ先生はコンペの結果について、「コンペでは負けることが多く、大事なのはアイディアと創造力を発揮し、それを他の人と共有し論議しながら、どのように発展させていくか。全力で挑戦すれば、切磋琢磨することが出来る」とコメントしました。5ヶ月に渡る国際交流を経て、実り多い成果を得ることができました。

Kogakuin University tied the international agreement with Politecnico di Milano in 2010. The selected students visited the university in the Italian commercial capital between May 10 and 12, 2011 to conduct the collaborative research and cultural exchange workshop. In return to the visit, we welcomed Professor Marco Imperadori on October 26. He delivered the lecture at Kogakuin and talked about his "six principles for energy-efficient design". (f.b.y.)
後藤研究室が日本建築学会主催建筑デザイン発表会で受賞

大学院建築学専攻修士卒の高山山人（後藤研究室卒）、修士２年の中島裕衣子さん（後藤研究室在籍）、修士１年の落合智人（後藤研究室在籍）が、2011年度日本建築学会大会建築デザイン発表会にて発表した研究題目「農村集落における新たな保存基準の選定」という研究が、評価され、後藤研究室として賞をいただきました。

「建築の再生あるいは再利用のための改修」において優秀とされ、後藤研究室として賞をいただきました。

発表者の2人が20組のダメージが改修され、講評者の誤評を再評価され、講評者からの質問など、意見交換が行われました。

建築デザイン学会テーマ部門では、講評者の与える各テーマへの発表の質が求められ、発表者の2人が優秀とされた発表者2組が賞を与えられます。今回の後藤研究室からの発表は3組ありましたが、それぞれが優秀と判断され、後藤研究室として一つの賞をいただけることとなりました。

Goto's workshop were highly acclaimed in the AI (Architectural Institute of Japan) Design Presentation 2011. The three works, relating to one another, dealt with the solution for "effective renovation and reuse of architecture".

With the achievements, the workshop received the special award by the judges.

( presses )

3大学連携プロジェクト
「防災・減災・ボランティアを中心とした社会貢献教育の展開」

平成21年度よりTKK（東北福祉大学: T, 神戸学院大学: K, 工学院大学: K）3大学連携プロジェクトを推進している（http://www.kobegakuin.ac.jp/~tkk/）。本プロジェクトでは、防災・減災や環境およびボランティアに関する高度かつ実践性的教育のために大学間連携、3大学共同の専門教育講義「学び合い」、3大学連携の課外活動「分かち合い」、3大学連携による災害時に備えた円滑な大学運営のための大学間バッキングシステムと学生主体の実践訓練「助け合い」を展開することで学生の学士力向上、及び各大学の適性化、危機管理力向上を目指している。東日本大震災では、直後から被災した東北福祉大学を支援するとともに、被災地の復興に向けて3大学それぞれの特色を活かした支援活動を継続して行っている。

"TKK" - Tohoku Fukushi University, Kobe Gakuin University and Kogakuin University -- worked in collaboration since 2009. 3 universities consolidate their social contribution through the improved potential of the students, revitalization of academic activities and upgraded crisis management.

( presses )
東京建築士会「住宅課題賞」審査

住宅課題賞（東京建築士会主催）は、東京圏内の大学の建築系学科における設計校業の中から、住宅課題の優秀作品を推薦し一同に展示するものです。今年は35大学44学科44作が集まりました。昨年10月29日の公開審査では、審査員（植田実、下吹越武人、髙橋朋子、福島加津也、松下幸男、敬称略）による4時間超の議論の末、当大学3年の藏永むつみさんが審査員賞（福島賞）を受賞しました。家族という親しい関係に住じる（連接）と（分断）、それを繰り返しぶつ独立した個人が日常生活を営み続ける様を基礎のバランスによって距離感を保つ磁石のよう」と捉え、空間の関係性に置き換えたADJUSTABLEな住まいの提案です。

妙定院展と増上寺ミニツアー

妙定院展・2011」と、「国立近代文化財 妙定院熊野堂・上土蔵公開」が、11月3日から5日まで、東京文化財ウィーク公開事業として催されました。妙定院は芝増上寺の別院として徳川家康の菩提のために建立され、創立250年を迎えるお寺です。

熊野堂と上土蔵とは、隔年で内部を特別公開し、今回は熊野堂に指定されている妙見大菩薩などの仏教彫刻群が開館されました。私は、この建物の調査と保存修理工事設計監理者として、建物の当大解説や展覧会の企画などを担当していまします。

この妙定院展は、土蔵内にあったことで戦災焼失を免れた妙定院の仏宝物を順次特別公開するもので、当時は法然800年大講念を記念し、「法然上人伝絵詞」（浄土宗宗教／港区指定文化財）等の著名な仏教美術が公開されました。会期中は特別企画として、地図を片手に増上寺境内地（戦災焼失エリア）の江戸の記憶を発見する「ミニツアー」のご案内もいたしました。35名の参加をいただき盛況でした。

Between November 3 and 5, 2011, 'Miojin Temple Exhibition' was held along with the special public viewing of ‘Earth-made Warehouse and Kumano-do’. I have been the supervisor of the investigation, preservation and restoration of Kumano-do and warehouse. I personally had a good time to be a guide of the mini-tour, which 35 enthusiastic amateur art/architecture connoisseurs joined.
テーマ『未来のくらし』

あなたが社会の主役として活躍するここ、人ほどで
どのように暮らしているでしょうか？

暮らしの中心は自宅や職場にはないかもしれません。
24時間の休みが定まっているかもしれません。

食事のこともエネルギー的に自己主導が当たり前かも
しれません。

建築技術の進化が更なる新たな家高層ビルを可能にする
かもしれませんが。

大規模地下に暮らしが広がっているかもしれません。

しかし、人が住む場所ではないかもしれません。

未来社会は現代社会の延長ないしあくが、現状から予
測できるものだけ未来ではありません。問題とする
未来社会を考えるとき、それを実現するために必要な技
術を開発に全力を尽くす我々人間は持て、そうやっ
て新しい社会や暮らしを切り開いていきました。

このコンペを通じて、わくわくする未来を夢見てみま
しょう。

あなたの想像する未来の暮らし方を、紙や図面、文
章で表現して提出してみて下さい。

募集情報

第4回となる本コンペは、給の部門へは35点、文の
部門へは15点の応募を頂きました。応募して頂いた
皆さんどうもありがとうございました。受賞者の皆様お
めでとうございます。給の部門では年を越える力作
が多数出され、文の部門では持続的なものからスペ
セクションに入賞したもののまでパワフルに集まった
作品が集まり、審査の場が大いに盛り上がりました。

非とともに多くの方々にご覧頂くこと、ここに受賞
作品をご紹介させて頂きます。

工学院大学建築学科
コンペ審査委員会

「文の部門」

審査委員長
後藤 薫（建築史／工学建築デザイン学科教授）

審査員
藤本健（建築史／工学建築デザイン学科教授）
野村重子（建築環境設備／工学建築学科教授）
藤原健（建築環境設備／工学建築学科教授）
吉田和雄（文学／文学基礎・教育教育学科教授）
遠藤 茂（都市計画／まちづくり学科准教授）

優秀賞「私がおかあさんになった顷～やるば～」と手
月美雪（私立千駄学園女子高等学校 2年）

最優秀賞「sonomama」
佐藤浩子（東京工業大学高等学校 2年）

優秀賞「親と笑うの未来」
大橋里奈（静岡県立技術高等学院 1年）

審査員特別賞「Moving House」
田代雄太（静岡県立技術高等学院 2年）

審査員特別賞「陽陽ドーム」
長谷部邦彦（京都市立伏見工業高等学校 3年）
「絵の部門」
審査委員長
木下 勇子 [建築家／本学建築デザイン学科教授]
審査員
飯島 喜樹 [建築家／本学建築デザイン学科教授]
鈴木 昭彦 [建築家／本学建築学科教授]
富永 智子 [建築家／本学建築デザイン学科教授]
服部 信明 [建築家／本学建築デザイン学科教授]
西森 信雄 [建築家／本学建築デザイン学科教授]

最優秀賞「Clad In Field」
牧田 光 [静岡県立科学技術高等学校 3年]

優秀賞「ウカブイエ」
鬼塚 朱美 [島根県立豊山工業高等学校 3年]

優秀賞「自然と建築 これからの建築の在り方」
佐藤 優也 [大阪市立大分工業高等学校 2年]

審査員特別賞・飯島 喜樹賞
「ミライノサガヤ：人と人をつなぐ集合住宅」
伊野 宏生 [松本県立学都工業高等学校 2年]

審査員特別賞・西森 信雄賞
「トオリ テ ヒキダス クラシ」
山本 耕悟 [秋田県立横手高等学校高等学校 3年]

審査員特別賞・服部 信明賞
「家族を守る家」
石川 祐弘 [名城県立白石工業高等学校 2年]

審査員特別賞・鈴木 昭彦賞
「Life in the universe — 宇宙のくらし～」
浅沼 英 [静岡県立科学技術高等学校 3年]

審査員特別賞・木下 勇子賞
「空に浮かぶ雲」
藤野 謙 [新潟県立上越総合技術高等学校 3年]
2050 EARTH CATALOGUE Exhibition
UIA 2011 TOKYO

2050年を展望し、しなやかな社会を豊かに創り出す英知とヒント

UIA2011 東京大会 は DESIGN 2050-Beyond Disasters, Through Solidarity, Toward Sustainability のテーマのもと、世界11カ国から5100人余の建築関係者が参加した国際会議です。2050 EARTH CATALOGUE 徹底では123の出展者による160の作品展示と16のテーマのトークセッションを行い、「2050年を展望し、しなやかな社会を豊かに創り出す英知とヒント」を探りました。

2050 EARTH CATALOGUE 展実行委員会委員長である中村勉先生（建築家、工学院大学特別教授）は以下の通り宣言しました。

「3.11の東日本大震災を経験した私たちは、「デザイン2050」というテーマの下に、「災害を超え、一丸となって、新しい未来へ」という、災害に立ち向かう知恵とチャレンジを新たなテーマに加え、決意を示したいと思っています。2050年の社会を考えることは現在社会への文明批判でもあります。原子力だけに頼らない社会、自然を崇拝し、災害を予測し、災害を恐れず、忍耐強くしなやかな社会を求められています。」

これらの英知を結集して2050年の社会を描こうと思います」

また、会場の什器設計、空間構成およびビジュアルコミュニケーションは鈴木敏彦（工学院大学建築学部教授）が担当しました。環境の持続可能性を重視した展示会のため、15mm厚の強化ダンボールを素材に用いてレセプション、パンフレット置き場、情報の灯台、ストール、壁ブラス床展示台等を作成しました。ストールは会場で販売を行い、収益を東日本大震災に寄付しました。展示後にダンボール什器を工学院大学で引き取り、他の展示の際に引き続き用いる予定です。

The UIA 2011 Tokyo received more than 5,100 participants from 100 countries and territories all over the world. One of the major topics of the meeting was 'how to cope with the unprecedented challenges of recovering from the catastrophe and creating a bright future'.

9月26日（月）〜9月28日（水）
東京国際フォーラムホールAロビー
9月23日（祝）〜10月2日（水）
東京ビル TOKYO 1階ガレリア

主催ottie 2050 EARTH CATALOGUE 展実行委員会

展覧会総括＝中村勉（工学院大学 教授）
什器設計、空間構成・ビジュアルコミュニケーション＝鈴木敏彦

照明デザイン＝TOMITA LIGHTING DESIGN OFFICE INC.

撮影＝満藤さだむ

Professor Toshihiko Suzuki of our university took responsibility for designing fixture and furniture, special configuration and visual communications. Some of the furniture was sold at the venue, others were taken to Kogakuin University for the exhibition. (F.B.Y.)

DOCOMOMO Japan 150

_Future and Legacy_ 展の会場デザイン

2011年9月25日から10月3日まで、UIA大会の関連事業として開催されたこの展覧会は、東京駅から皇居へ向かう行幸通り地下ギャラリーリーで行われました。

国内外から訪れる多くの人々へ向けて、日本のモダニズム建築を地理的な関わりとともに、理解を深める展示内容でした。平井光（89頁参照）がこの展示の会場デザインを担当しました。会場の長さは150m、長手方向の両側に展示スペースがあるため、延べ300mという距離をまとめていました。作品パネルのほか、建築のこともっている臨場感を誘われた史料のなかで伝えるため、模型や家具、当時の雑誌という建築とともに時を超えてきた物も併せて展示されました。

※ DOCOMOMOとはDocumentation and Conservation of buildings, site and neighbourhoods of the Modern Movement（モダンニューヴェメントにかかわる建築と環境形成の記録調査および保存のための国際組織）の略。

The special exhibition on the Japanese modernism architecture was held in the underground gallery. The gallery featured a 150-meter-long exhibition wall on one side. (F.B.Y.)
工学院大学名誉教授荻原正三先生
「叙勲・傘寿のお祝いの会」開催

萩原先生が昨年の秋、長年の教育と研究の功績に対して瑞宝中受章を授与され、昨年80歳のお祝いを兼ねて、平成24年1月7日、新宿王星ホテル最上階で萩原研卒業生主催による「叙勲・傘寿」を祝う会を開催しました。

お正月ロスから帰国していたお婆さんの顔子さんご夫妻とお孫さんのトスカーナちゃん、退職後、研究を続けられました今和次郎研究会のメンバーや、おとなの末友23名のご来賓と卒業生57名が参加し、順番に祝賀会が行われました。

先生は、以前と変わらずお元気な様子、大学図書館に保管した今和次郎資料の整理、研究でほぼ毎日、図書館に通い、1月14日から2カ月に及ぶパナソニック汐留ミュージアムでの「今和次郎採集編義展」の開催準備に向けて精力的に取り組んでいます。

文責
望月 穂央
工学院大学附属高等学校卒業
昭和40年 工学院大学卒業
萩原研OB会会長

On January 7, 2011, the celebration party was held at the top floor of Keio Plaza Hotel to commemorate his 80th birthday and the honor of conferment of decoration. The party was organized by the old boys, who studied under Mr. Hagiwara. He was still fresh, energetic and enthusiastic. At the time of the party, Mr. Hagiwara was busy with the preparation for an exhibition starting in a week. (f.b.y.)

建築系大学院生・学部生に朗報！
「総合資格学院奨学金」が設立

工学院大学には、様々な奨学金が用意されていますが、2011年度から建築系同窓会の呼びかけに応じて（株）総合資格のご寄付により、本学建築系学生に限定された奨学金ができました。

なお、昨年度から在学中に資格取得可能な「インテリアコーディネーター」の講習会も同窓の協力で、今後毎年実施されるようになりました。9頁参照。

New Scholarship Available
by Courtesy of Sogo Shikaku Gakuen

The students of Kogakuin University are entitled to receive a wide variety of public/private scholarships. In addition, those studying in the School of Architecture are privileged to have a new opportunity by courtesy of Sogo Shikaku Gakuen School that responded to the request from the Alumni Association.

■選考方法：対象条件を備え、かつ大学が推薦する者を選定する。
■提出書類：大学から推薦された学部生・院生は、所定の推薦書・成績証明書に加え、小論文課題が求められる。課題：「将来有資格者（技術者）となって自分が貢献したいこと」約800字〜1200字。留学生にあっては、在留資格証明書の写し。
※詳細は新宿学生課へお問い合わせ下さい。
電話03-3340-0153

According to the guidelines for application, four students are to be selected (two would be students from foreign countries in principle) to receive the monthly scholarship of JPY20,000. (f.b.y.)
本書は、工学院大学創立125周年と、日本初の「建築学部」創設を記念して、建築系学科同窓会が発刊したものである。同窓会誌「NICHE」に連載した戦前を中心としたOB建築家の作品とその活躍ぶりを紹介している。

第1章では、本学の前身となる工手学館の教育が、創立当時から急成長した教授陣によってなされたか。近代建築史家でありユニークな建築家として活躍する藤森照信教授が語る。また工手学館の研究者である山田建築家が、建築学科（建築学科）の学生の生活環境について、その時代背景と共に生き生きと描く。第2章は、工学OBでもある建築ジャーナリストの鰊洲隆氏による、13年間の連載記事「輝かしく先輩達」を基盤として、その全国に広がるOB達の作品を訪ねて人材の活躍ぶりを紹介する。第3章は、本学以外の外部研究者の研究による新築完成の研究を紹介し、工手学館OB工学院大学建築学部にかつて、日本の近代建築の隠れた系譜に追ってい

13

Topics

NICHE」別冊「日本の近代建築を支えた建築家の系譜」

'Architects Contributing to the Development of Modern Architecture in Japan' -- Supplementary Volume of 'NICHE'

To commemorate the 125th university anniversary and the inauguration of the

Japan's first School of Architecture, the Alumni Association issued an over-200-page special book featuring the achievements of the architects graduated from Kogakuin University. (f.b.y.)

14

Topics

1級建築士の合格発表

（全国大学別ランキングベスト20位）

2011年12月15日、財団法人建築技術教育普及センターより2011年度の一級建築士の合格発表がありました。大学別合格者数ランキングでは、工学院大学の合格者数は80名です。本年度度は5位になりました。別途、工学院大学専門学校が11名です。工学院大学学園では91名になります。

Result of 1st-Class Architect Examination 2011

The top 20 universities with the successful ratio of the 1st-Class Architect Examination was disclosed on December 15, 2011. Kogakuin University was ranked 5th with 80 successful candidates. (f.b.y.)
建学系学科同窓会総会の報告

台風2号が接近中で大雨警報の中、新宿キャンパスにて総会が開かれた。開会前の直前時間に、顧問の宮沢哲也先生、北沢一幸さんとから近況報告があった。

定刻になり、楠岡幹事が議長となり開会、加藤尾弘会長の挨拶に続いて、事業計画及び決算（案）報告の審議に入った。同窓会誌（NICHE）の発刊、ホームページの充実、交流・支援事業、125周年事業の推進などについて担当者から説明があり、議案2では、第46期（2011年度）事業計画及び予算（案）の審議、議案1の内容とともに、125周年記念事業として「懸かし先輩たち」をもって、単行本を出版する企画案の議題。記念事業資金活動について討議され、承認された。

議案3では、東日本大震災寄付金募金呼びかけ、鈴木敬明先生デザインの段ボールショップなどが、震災緊急サポートの説明が行われた。議案4では同窓会名義変更について「建学学部同窓会」への変更について提案された。最後に一括して議案1、第45期（2010）の事業結果報告（2010年度収支決算額・収入8,449,996円、支出6,698,031円、次期繰越収支差額1,801,965円）続いて監査報告があった。議案2、次年度の第46期（2011）事業計画の説明（2010年度予算額：収入11,921,965円、支出6,130,000円、次期繰越収支差額5,791,965円）の説明があり、久しぶりに会費収入が充実になり収入が好転したことが報告された。最後に全ての議案及び「建学学部同窓会」への名称変更が、全員の拍手をもって承認された。

（取材/NICHE編集部）

——
2011年5月29日（日曜日）午前10時30分～11時30分
工学院大学新宿キャンパス20階第6会議室
出席者28名

Agenda #1 included the upgrade plans of "NICHE" and official website, other supporting programs. Agenda #2 was the publication of the book on the achievements of graduates from the School of Architecture. Agenda #3 was the effort to promote donations for the damage caused by the Great East Japan Earthquake. Agenda #4 was the report of the annual profits and losses. Then the official name of the association to the "Alumni Association, School of Architecture, Kogakuin University" was unanimously approved. (f.b.y.)

2012年度工学院大学建築系学科同窓会運営委員会名簿

● 建築系学科同窓会役員
（2012年3月1日現在）
(第45期役員 / 任期2010年4月1日～2013年3月3日総3年間)

顧問…北沢一幸、南迫哲也、高木雅行、田野哲幸裕、金尾武彦—計5人
会長…加藤隆弘
副会長…[会長補佐…谷口宗彦（校友会担当）]
会長補佐…谷口宗彦
[出版事業担当…大場光博]
[メディア担当…大橋誠]
[125周年事業担当…楠岡幹事]
[交流・支援事業担当…浅野賢一—計6人]
幹事…橘朝一、澤崎宏—計2人
会計監査…宮澤健二、南雲正博—計2人

会計…柴田卓次、佐々木秀史—計2人
運営委員…柴谷真一、田中正裕、鈴木敬明、橘朝一、菊池一雄、齋藤敏博、高橋昭彦、菅家幹、伊藤真人、三好薰、高城文一、神崎隆、佐藤隆光、望月宣夫、板谷信、平井充、渡部啓明、望月宣夫、小林将、西川豊、橋田寛子—計21人

● 工学院大学校友会役職者・評議員
（2012年3月1日現在）
監事…橘朝一
副会長…谷口宗彦
組織・事業部…谷政美（常任理事）
組織・事業部…加藤隆弘
総務部…谷川真一
財務部…田中正裕

企画・広報部…理事…鈴木敬明、大場光博
学園運営部…理事…齋藤敏博
評議員…理事補欠…賀田一雄、理事補欠…谷政美、理事補欠…橘朝一、理事補欠…菅家幹
評議員…北沢一幸、高木雅行、田野哲幸裕、浅野賢一、橘朝一、橘朝一、澤崎宏、宮澤健二、南雲正博、柴田卓次、佐々木秀史、小野里宏一、伊藤真人、三好薰、高城文一、神崎隆、佐藤隆光、望月宣夫、板谷信、平井充
評議員（補欠）…大橋誠

● 学校法人工学院大学
評議員…理事…加藤隆弘

NICHE 2012 vol.35 35
新刊書紹介

世界で一番美しい建築デザインの教科書
鈴木敏彦＋松下希和＋中山信信

本書に登場する7人の巨匠は、都市から建築、そして家具・プロダクトデザインの領域を横断して活躍した建築家達です。1967年に生まれたフランク・ロイド・ライトを第一世代と定義する、20年連れして登場するミース、コルビュジエ、リートフェルトを第二世代、さらに10年後に登場するアルト、ブルーヴェ、ヤコブソンを第三世代にあたります。彼らが手がけた著名な作品を、カラー写真とイラストでわかりやすく解説しています。新しい建築学科の学生にひさしぶり一冊と言えるでしょう。

NA建築家シリーズ04藤森照信
編者 日本アーキテクチャー

藤森照信は歴史的な（小山田正、建築「美しい」小山田正との共同生産者、完全版を収録。ライバル・石山修治との初のロング対談。漫画で読む、故郷・茅野市での少年時代。石器からイスラム・ロココまで、藤森研20年。藤森研で主導の7人が本書に登場。建築家デビュー以来の主要16作品を収録。著名建築家矢野雅彦（1991）、タスマンハウス（1995）、ニッタハウス（1997）、木村の木こもる美術館（2006）、焼杉ハウス（2007）、豊栄ふるさと（2010）他...）

日経BP社
03-5696-1111
B5判 296頁 3,000円（税込）
2011年6月27日

日本の照明はまぶしそうる
東海林弘陽（工学大学大学院修士課程修了）

光を観察する6大ポイント。本当に必要な明るさとは？①ハードな仕事、受験勉強を乗り切る照明。②大阪を考える Manualsと照明、③森における四季の光のシーン、④新旧で実験でできる「光のダイジェスト」。⑤心地よく眠りにつくための照明、⑥女性を「笑い」にする照明術など。『限定版』（裏絵）

発行所 株式会社角川書店
03-3238-8521
新書判 184頁 724円（税込）
2011年8月10日

建築家の名言
Softunion著
中山信信、大塚篤、松下希和、細谷功他

日本や世界を代表する近代の建築家を中心に、彼らが世に投げかけた言葉をピックアップ。仕事、生活、哲学、思考、笑い、喜び、hoffの10のテーマに分類して解説を加えています。建築家達の思想や人生観が視えるよう、時代や社会背景を超えて現代の建築を考えるきっかけになる一冊。営業のチョイスと解説の付属には、中山信信書評特別寄稿（2011－10）を中心に、寄稿者、作家、活動家、出版社、ユーモア、多くの日本関係者に参加しています。

株式会社エクスナレッジ
03-3404-1321
B6判 295ページ 1,785円（税込）
2011年3月
藤森信信著本
企画・編集 二川幸夫

最後は名前。建築家、藤森信信。大地から生まれた優れた建築物。その美しさに多くの人々が注目している。信信は、研究においては、ヨーロッパ建築史主義から19世紀まで行って、別作においてはまたの時代に異なるようなものでしょう。（寄付より抜粋）

農業のある安全快適都市 日本
東正則（工学院大学建築学学科教授 1968～2011）

このままでは、都市から農業が見えてしまう！日本の都市は農業を抱えていること、安全と快適さを保つことに、なぜ都市から農業が見えてこないのか、これがどうして見えてこないのか、ポスト都市化時代の都市の現状…その目次：第1章 なぜ農業を抱えなければならないのか、第2章 なぜ都市と農業が反対しているのか、第3章 都市と農業が必要か、第5章 なぜ農業が必要か、第6章 誰が本当に都市で農業を必要としているのか（第6～10章は省略）

農林水産出版株式会社
03-3511-0058
86号 192頁 1,900円＋税
2011年11月30日

110のキーワードで学ぶ 29世界で一番やさしいエコ住宅
Softunion著
髙橋敏三・中山英信・大塚義松・永田拝和・細谷功他

エコロジーをめざした建築の計画という、とくに設備的側面に注力をした内容を想定しつつある。しかし本書では環境に配慮した視点から、建築のプランニングをはじめ、内外のしつらえや、材料、構法など、住宅構築にあたる多くのトピックがトータルに網羅され、意匠設計の役割として最も重要となる。執筆は本学OB髙橋敏三を中心に、多くの工学的な関係者が各自の得意分野を担当し、各々の議論を展開している。

株式会社エクステラッジ
03-3404-1321
B6号 242頁 3,150円（税込）
2011年3月

建築とは何か 藤森信信の言葉
藤森信信（工学院大学教授）

建築を知る為の最高の入門書。第1章は建築論と、奇数頁に高志隆（茶室）のできるまで（全66頁）、第2章は、フローティング、建築を理解するための17の質問（案内図）、石井洋、伊東豊雄、井上明子、高橋敏、内藤博之、中川克之、熊澤和義、西田正道、林正、原敬、藤本壮介、野村好之、森川喜一郎。

株式会社エクステラッジ
03-3404-1321
B6号 272頁 1,800円＋税
2011年1月31日
日本初の「都心型超高層キャンパス」誕生秘話

谷口宗彦 TANIGUCHI Munehiko

いまから25年前の1997（昭和62）年4月、本学は老朽化した新宿校舎「大学高層棟」の再開発事業、第1期工事に着手した。これがあわが国初の「都心型超高層大学」建築のチャレンジであった。事業は大手生命保険会社二社と工学院大学による共同再開発プロジェクトとして発足した。しかも本学にとっては建設費の負担一切なしで校舎が新築出来るという夢のような話で、この発案推進者が伊藤鄭爾元学長であった。空中階層度と優れた土地の借地権設定で、大手生命保険会社二社から290億円という巨額の建設資金を着工前に受け取ったのだから仰天に快挙であった。この約束に基づき第3期工事が終了するまでの9年間にわたる街並再開発事業の流れができあがり、今日の工学院大学の礎が築かれたのである。しかし、この計画内容については様々な問題を含んだ事態が持ち上がって、苦労の出発であった。

創立125周年にあたる本年。当時、建築学科教授として再開発実施計画の見直しに関わった唯一の証人である谷口宗彦教授に、当時の状況について聴かせ秘話をお話しすることをお願いした。

（NICHE編集部）

はじめに

2010年1月末、工学院大学元理事長・学長であった伊藤鄭爾先生が逝去されました。同2月11日、第11回ホームを得賞の「第11回ホームキャミングデー」が開催され、その席上で大勢の学部生を前に、私は伊藤先生に挨拶していると「超高层キャンパス・再開発計画」について講演を行った。

超高层キャンパス誕生までの経緯は、その最終的な修正計画に建築学科教授として唯一関わりと言える点から、大橋秀雄前理事長と三浦宏文前学長から、当時の私のお役に立つこと、今後の計画にはどこまで今後の計画までに、計画の重要性・問題点を、歴史的に評価し、計画としての重要性であることを、私には求められていた。「超高层キャンパスは日本初の」「超高層キャンパス」として生まれ変わった。

1973（昭和48）年には「学園移転問題」に端を発した再開発議論は、実に20数年の年月を要し、着工以来9年、街並の建設工事費500億円を超え、1996（平成8）年、栄えある竣工を見たのである。

再開発に至る経緯

1980（昭和55）年、役員、評議委員、教職員など全学構成員による「学園将来計画委員会」が開かれた。伊藤鄭爾学長の主導で計画立案を審議した。その時の条件は「新宿校地という資産は、処分（売却）しない条件で再開発計画を進める。ただし、地上鉄道導入は bisa でない」であった。十年後の1990年代に再開発計画は、再検討され、新宿校舎現在地改革が、特に「地元住民の維持」が優先され、その後も検討が続けられた。1997年（平成9）年には「学園再開発計画」が発表され、計画が進められる方針が採択された。
この年に再開発計画を進めるために、東大名誉教授で日本の都市計画の権威である高橋栄一氏が理事長として招かれ、この高橋理事長と伊藤学長のもとで「都心型大学」という新しいイメージを持った「学園将来計画大観」が提示された。その骨子は、都心における新しい学園の基本目標と役割を定めるとともに、「新宿校本部を動かさず施設・設備は大学の専有とし現状どおり、1・2 年生は八王子、3・4 年生と大学院は新宿校舎とし学生は動かさない」というものであった。このレポートは、後に文部省から「都心におけるひとりの実験校」として新宿校地再開発事業の許可を得る呼び水の役割を果たしている。

しかし当時の本学には、越えなければならない大きな障害が三つあった。一つは大学設置基準による「私立大学の校地面積は、校合面積の 6 倍を必要」とすること、しかし新宿校舎では大きく不足していた。二つ目は借金の返済、三つ目は、借金に伴う新宿校地の根抵当権の解消であった。第一の障害については、伊藤学長等の各省庁との働きにより 1985（昭和 60）年工場等構制法の見直しと大学設置基準の問題の一部が改正された。三つ目の借金については、利息返済を含めて 14 億円の払上、それにレンタの抵当権の解消については、厳しい財政抑制策で 1987（昭和 62）年の借入金の完済をこぎつけて解決した。これらの打開により、再開発計画の障害をクリアすることとなった。但し、昭和 33 年以来複雑な増改築を繰り返し老朽化した新世校舎を解体し、再開発に踏み切るという発想に至るには、授業の継続、建設資金の調達など、想像を絶する困難が山積していた。

この間、理事会は極秘で大学組合理事局に「工学院大学八王子キャンパス、新宿校舎計画の作成」の提案を依頼し、工学院大学単独開発案の検討を開始していた。

都心型大学と KDN 委員会

「学園将来計画大観」の決定後、理事会は国としては新たな学園将来計画委員会が組織され、「学園将来計画要観」の作成に入り行った。これは新宿校地活用および八王子校舎整備を含み、特に 18 歳人口の急増期に備えるだけでなく、今後、本学の開発に向け、社会との密接な関係についての課題に対して詳細に言及している。この時期に本学の再開発計画を策定した新宿校地に隣接する生命保険会社三社のオーナーから、街区一括計画参加の申し入れがあった。1985（昭和 60）年、三社の申し入れを受けけて発足した街区の 3 地権者による KDN 委員会（K:工学院大学、D:第一生命、N: 日本生命の略）は基本計画を締めると同時に経済条件（容積率制度の併用）に次のように決定した。

本学が法的有しに所有できる容積約 70,587m<sup>2</sup>のうち、約 14,755m<sup>2</sup>を生保に売却する。これらにかかわる「空中権」、つまり敷地の未利用容積を他の土地に移転させる権利の譲渡および借地権の設定。オフィス棟（現 STEC ビル）建設に関し生保二社が所有する土地は手狭なため、学園所有地の一部（210 坪、約 690m<sup>2</sup>）をオフィス棟建築のための貸与する。このような条件が合意に達し合計 290 億円の費用を本学に支払うことで、土地の権利関係を円滑に解決した。

そして、特定地区として開発を開始する再開発手法について協議し、将来的にも決定した。これらの交渉は円滑に推移したおかげで、ラッキーともいうべき借り入れなしで学費収入の流用もなく、再開発事業への着手が実現したのである。しかし、高騰化による維持管理費増大を考慮、オフィス棟の内に収容権を残すことも考慮できた。だが校友会を中心に評議員会では、この 290 億円という価格が実現したって正当な評価に値するか否か賛否両論が渦巻いた。当時地価は 1 坪 1 億円とされ、空中権譲渡を土地の補価に換算すると、約 4000 万円程度の評価となり、「安過ぎる！」と指摘する意見も出された。それに加えて「貸しビルと学園との一体計画であるため、区分所有の権利のあり方や問題あり……」といった意見も出された。これも竣工後長々と引きこもったになったが、相手あっての交渉結果なのでこの議論はペンディングとなった。現在もこの問題は完全に解決されているとは言えない。※空中権 (air right)
超高层キャンパスに対する
各紙マスコミの反応

新宿再開発本部が発足し、その構想段階からマスコミ各紙はこの経緯を踏まえた情報として取り上げた。

「超高层の校舎を計画工学院大学」
（朝日新聞 1984年1月31日）
地方に新キャンパスを設ける都立大学が目立つ中で、東京・新宿市の工学院大学は、1992年度までに校舎を現在の8階から30階層の超高层ビルに建て替える計画を進めている。実現すれば日本一のノッポ校舎を持つ都心型大学となる。

「大学も超高层仲間」
（毎日新聞 1986年5月14日）
工学院大学が新宿に計画1992年完成、総工費500億円。

「一昨年300億円倹えた。工学院大学の打ち出しの小僧」
（週刊サンケイ 1987年4月2日）
空気を含めて（加湿設備）高層の建設資金をひっくり返し、前例の経済の超高层ビルを建設する。

新構想プランの発表と最初の疑問

1986（昭和61）年7月21日。旧校舎再開発の校舎東223号室にて、伊藤原敬建設担当常務理事（当時北陸薬学会が学長）が全教職員を集めて、初めて「本学新校舎の超高层キャンパスとしての再開発事業」についての説明会を開き、その構想をOHPを使い説明しに発表した。

そこで街区全体の敷地約9240㎡（2800坪）に対し、「特定街区」と当時開発に慣れない都市計画法を手用して、全体の建築の配置計画・ゾーニングと建設順序のアウトラインが示された。まさに30階建ての世界初の超高层キャンパスが誕生するのだ。母校の新しい大規模な再開発計画に心を躍らせた。

しかし、私は真っ先にそのソーニングに疑問を感じた。特に公開空地の有効な面積が北側にあることに「超高层ビル街にあって冬の日照条件が得られず問題ではないか。……大学の広場などの貸ビルのための広場にみえるが……」と質問をした。しかし伊藤原敬理事は「建設過程からこうなる……」という返答だけで、明快な回答はなかった。さらに後に示された大学高層階の面積を詳細に見ると、ほぼ現在と同様の基準階面積約1000㎡、貸ビル（STECビルという呼び名はまだ当時なかった）は約1500㎡で5割増しとなっている。両棟共に両側コアの構造・プランとなっており、非常用エレベータが片方コアだけにある。非常用エレベータが1台ですむ基準階面積の最大床面積は、1500㎡未満という法規の制約から考えると、貸ビルであるSTECビルの計画の方が能率良いということになる。これは貸ビルの有効利用面積の効率をみるレタブル比と比較してみても、本学高層階が60%であるのに対し、STECビルは75%で大きく差があることから、さらに私の疑問は広がった。

旧校舎より総床面積が減少する

これによって大学全体の延床面積は、旧校舎の約28,000㎡（有効面積約80%、使用可能面積22,000㎡）であったも
のが、一期工事の高層棟地上階だけで30,000㎡を超えるにも関わらず有効率60%以上18,000㎡に減少してしまう。二期工事の専門学校舎有効面積3000㎡面積を含めても、全体の面積増加が見込めない重大な問題点が浮上してきた。

当時、私は建築学科の幹事をしていっていた。学科主任の今泉武吉先生に（図1）をせて非効率な問題点を相談すると、即座に「谷口さんがこの資料を100枚印刷して、教授総会で全員に配って説明しなさい」と言われた。しかし私は講師になってまだ間がなく、教授総会の席一人で説明するには相当の度胸が要求された。

1986（昭和61）年9月13日の教授総会で私は意を決して公開された面積表に加筆したものを示して説明した。図1（大学高層棟がせてオフィス棟
（STECビル）と同じ5割増し基準階面積と同じ仮定すると、大学棟は約9層階階数が減少する計算になる。その分有効面積が低く見込めても2,000㎡以上増加することを説明した。しかし建築学科の教員ははじめほとんどの教員は無反応であった。これは全体規模が大きくスケール感がつまみ難いこともあるが、大学組織事務所が計画しているのであるから、これを講座の私が懸かることがむしろ理解できなかったようで、非常に悩むに至った。今その思いが心に残って残っている。

その後、若手の教授総会メンバーで「再開発議員委員会」という名称の自由的な検討会を、我々仲間7人で立ち上げ、通称「7人委員会」と呼んでいるが、再開発問題の議論を続けていた。なぜこのような非効率な計画になったか？再三学長を通じて開発状況を出したが、そのたびに再開発本部長である高山主任教授を代行して組織事務所からスタッフが来て説明した。だが彼らの言い方からは冷心を得た回答が得られず、暖簾に要望の筆記連絡を終え、結局主体となるクラウドマインが開発本部長である主任教授であり、その意志であることが解明した。

大切なのは街区再開発の順序と広場の関係
考えられる理由は、世界初の「超高層大学」が同時に計画する貸しビルよりも低くなることを想定して、1階でも高額計画したいという思いが強く働いたことや、大学の邸宅に対する影響がある。これは我々との同じ気持ちであり、ぜひこれを解決する方法策として、大学の教では、出場高3メートル以上という文体規定を生かし、大学棟は階戸数を高くし、せめて賃貸ビルの高さと外観デザインを図った計画に出来なかったかと考えていた。

それに加え、この計画案の問題点は、既に設けた1/4解体後に着工する1期工事開始の段階、及び1期から2期への移

大工場等条限法という法律に縛られ、一都市庁に届け出済みの大学面積を減らすと、元に戻せないという圧力に引っかかることができる重要な課題であった。このことを考えると、思い切って1期工事で、現在大学高層棟の位置に貸しビルを先行させ建設することで、全過程が解決することに気がついた。
幻のオフィス棟先行案

1986（昭和61）年10月、私は建築同窓会の先輩である大手組合事務所、ゼネコン設計部勤務の方々に相談し、図（2）に示す「オフィス棟先行案」をまとめて北郷学長に直接渡し説明した。学長に説明した内容は、建設過程に入れる者で、大学・専門学校など建設過程で建設面積不足の事態が生じない、（実態は専門学校の北英駅前にビル1棟を借り、その期間中仮校舎として移転した。この経費も数億円かかっている）

①大学棟とホール棟（現在のアーバンテックホールに相当）がL型を構成し、南側にオープン空地（広場）を得る。広場は大学の所有なので現在のようにSTECビルのためではなく、大学の専用広場として有効に生かせる。全体のイメージは1街区全て大学の施設に見える。

②基準階面積を基本的に2棟揃える（各棟1490㎡）。大学棟は各階高を高く取り、二棟のスカイラインのデザインを考慮して描えることが出来、つまり1街区1棟型に見えるべきであるとする東京都の指導に従うデザインとなる。

③Ⅱ期工事の大学高層棟建設中は、生保二社のビルを解体せずに残せるので、大学・専門学校など建設過程で不足面積不足の事態が生じない。（実態は専門学校の北英駅前にビル1棟を借り、その期間中仮校舎として移転した。この経費も数億円かかっている）

④オフィスビルの先行によって、収益が早くから上がることを経営的に有利である。

北郷学長からの回答

北郷学長から直接の文書で返事を戴いた。先生らしい封筒とされた文字で、A4の便箋1枚にひっしき書かれたものだった。

「この谷口先生ご指摘の案は、大変有意な問題を含み理事会で議論しましたが大変もめました。オフィス棟を先行して建てると、先行に収益を上げていくので、特に両生保は大いに賛成でしよう。Ⅱ期工事期間中に生じる不足面積、専門学校のための仮校舎を、他に求めることも解決できるかもしれません。有効面積の増えるセンターコア案への変更は、実質的には再申請が申請取引下げると考えます。中心（中央）……老朽化した新宿校舎を一日も早く建て替え、イメージを一新して18才人口の減込期に備えることが、今の段階での理事会判断という結論に至りました。」

当初の案（現完成案は着工後の修正案）
に理事会が務める理由は他にありません。これに再発見をもたらす町並み対策は、「特定地区」という都市計画に基づき、この街区だけの法律をつくって適用させるもので、東京都との協議、集中地域処分条例（DHC）導入を建設省・通産省からの指導もあり、協議の積み上げで決まった。

したがって、新教の提案した「4項目」の指摘の修正は出来ない、ということが理解できた。とは言うものの、発想の出発点を誤り、検討に参加者に指示することも幅広い評価の観点を欠くことであり、予測もできない危険性ははらんだ結果を出しかねないことだと痛感した。

その建設過程における仮設仮舎などもどのような計画案があるのか？ 北区学長を通じて質問したが、その段階では設計事務所は全くシミュレーションしてないことが分かって、大いにあやされた。後に私が自ら提案することとなった。

基準階面積の大きさと、有効に使用可能な面積

第1期工事における高層（大学）棟の1棟（地上階のみ）だけでなく、延床面積30,000m²以上になり、対応する新学舎よりもはるかに面積増となる。しかし、基準階面積が約1,000m²（11階以下は4層所の隔離階段を含めた約1,800m²で、それ以上の階は約1,000m²以下）（図6）と小さいビルのため、コア面積が4割も占めてしまう。両端コアの構成はその中央部で構造体としての柱はなく、3.2mのモジュールに沿っておれば、自由に部屋の配置変更が可能であることが確かにある。しかし、高層・低層EVが両端コアに位置し、非常用EVとトイレ・設備機械室が両側コアであるため、必ず中央部分に屋上駅を必要とする。したがって、その隔間面積を除く2面有効面積は半分以下と狭くなくなってしまう。ここのことが各学科の専有面積に対する不満となってあらわれた。特に計画上の問題点は、教室を3階から11階までこの超高層の中に入れたため、この間は地震上の避難階段4層所も設ける防災設計指導があり、大変効率の悪い案となっている。これらの、旧学舎の解体面積が「工場等制限法」に倣われ、当時の教室面積255m²（授業を繰り越していたため必要面積でもある）をいったん減らすと、その面積を変え再計画できない条件が今ある。したがって、新教育内容で仮設仮舎を目的に設計し、その面積を維持できるぎりぎりの解体面積の中で計画しようとし、と説明を受けたが、その仮設仮舎をどこにどのように計算した

125周年特別企画
結果、この基準線にせざるを得なかったのか？質問しても回答が無く、その計算はされていないという実態が解った。しかし、何よりも理事会の高崎慧大学を作りたいという意思が先行していたことが、最大の理由であったと私は信じている。

その後、仮設教室の建設可能な場所と面積を私から計算し（図3）、それを学長に申し上げた。この記録に沿って仮設教室は建替えられることとなった。それは私が発案有労に単独で見直しをすることになる17ヶ月前の話しである。

「評議員会」「教授総会」での激論

学校法人の財産処分に相当する再開発の進行は、全て最高議決機関である「評議員会」の承認事項である。校長20名を含む評議員50名は、予算・計画内容・学園の将来の権利関係に至るまで、実に真剣に議論している。評議員会及びその下にある検計委員会の進捗は、毎回全教職員の注視するところで、頻繁に開催される8階会議室の間は、その行く末を心配する教職員で溢れていた。議論が伸ばす発言の声が廊下にも流れ聞き、壮絶な論争がたびたびなされたのを覚えていた。教授総会は、主に教育中心に議論がなされるが、評議員会での議題にも及んだ。新しい校舎の空間、デザインの話と蛏子の問題ではない、面積不足問題が各学科間で深刻な実態として議論が集中した。王で・新宿の授業を拓き払うとして、教授総会も開かれた。私は教授総会メンバーであったのでその会議の内容、経過は明日のように覚えている。緊迫した会議の一部で「工学院大学学園百年史」から時系列で説明し要点を補足する。

1986年10月28日

評議員会3地権者の「基本協定」の身について建設・予算合同委員会を12回開かれた、「特定街区」という都市計画手法上一体構造されることで、権利上後々問題が起きないか懸念。

1986年（昭和61年）10月28日

臨時教授総会（新宿・八王子共学館臨時休講。於第1会議室） 高山理事長が初めて教授総会に出席、開会に伴う研官庁手続きを進行し進行し、11月の都市計画審議会の議案を取上げた場合は、再審査は事実上不可能となる。恐らくとも取れる説明が全教員は反対。旅への申請は、既にこの夏、8月18日「都計審」に提出されていた。教授総会はこれには納得せず、以下の要望書を提出。

①本設計は一時凍結。都計審提出の壁面線の中で考慮上の変更を行い、教室・研究室・実験室等の面積を確保すること。

②新宿・八王子体制の見直しに基づき、八王子校地にさらに必要施設を建設

NICHE 2012 vol.35
③再開発は建築優先の原則を置き、建設費の墨絨防止、再開発管理体制を抜本的に改め、組織強化せよ
1986（昭和61）年11月4日
評議員会「基本規定」に関する、地権契約・共用床使用期限は60年に改め、総額強化せよ

1986（昭和61）年11月7日
教授総会3地権者と基本規定調印、実質的手続き完了。11月10日「調査書」作成用と

本学倒産の危機感が走る
1987（昭和62）年1月、工事契約しないまま、理事会はJVに旧館北側一部
の解体工事を指示した。だが3月2日教授総会において、この計画にに対する
は多くの問題があるから、再開発を進めるか否かを専務会長と実施者を
の提案を理事会に提出し投票結果、約章付で再開発に踏み切ることを決断した。

松浦本部長との出会いと
決死の見直し作業の開始
1988（昭和63）年2月、評議員会
の議決で松浦隼雄先生が開発本部長に就
任した。
問題点を指摘して悩む私に、一人のにこやかな老先生を紹介してくれた。東京オリンピックに備えた国家プロジェクトとも言う、代々木のNHK放送センターを、若き40代で総指揮した煉殻の士と聞いた。私はこの再開発の様々な問題点を一気呵成に説明し意見を求めた。先生は聞き終わると最後に、「ここのことなら（……私も谷口先生の言う通りだと思うよ……しかし、いま私はこの計画と関係ある立場ではない……でもしっかり頑張りなさいよ！）」と他人事のように言って分かった。その先生こそ松浦先生だった。

はからずも1年後に松浦先生とコンビを組むことになったが、再会した私の第一声が「先生！この度は大変な役、誠にごお世話さまで……」と申し上げ、二人为苦労しながらも、緊張のコンビのスタートとなった。

松浦開発本部長の就任演説は、今も鮮明に覚えている。旧館の大教室に数職員会員を集める、しかも学内放送で全館放送された。「（……今回私の立場は、400人乗りの日航ジャンボ機が、尾翼をもぎ取られ、ダッチロールを回り返し、いつも壊落してもおかしくない最中に突然機長代表を命ぜられたようなものである……）これは先生の決定の覚悟であり、約400名の専任教職員を抱える本学が、異常な緊張状態にあったことを表していた。

新開発本部事務局は、茅原健部長・総括主査、柴田卓治係員（現設施経営）他事務方。生協の技術者はそのまま継続し残り、松浦開発本部長主導による計画の見直しがスタートした。

松浦本部長は「新宿特区再開発事業の展望」という施政方針を発表した。その主旨は学園内外にみちている不信感を一掃し、学長、法人、校友を問わず、この再開発事業を契機として、改革革新の旋風を起こし「全ての基本は人である」との認識を堅持することを強調した。そして都心地実験校としての実をあげ、誇りある施設を完成することが急務であると訴えた。

I期工事費減額交渉とゾーニング改善、有効面積を生み出す

減額検討・交渉は、それまでの経過を知る生協の技術担当者達が中心となってJVと検討し交渉してくれた。各科の希望条件の詰めや、内装システムに大変な空間ゾーニングの見直し検討も平行して図を重ねた。本部長の指示で年度内の3月、大きく遅れていた工事契約（Ⅰ期工事）に踏みつけた。工事総額は約50億円計額の141億6600万円となった。意匠計画・設計図面の詳細については、最後に検討することまで一歩踏み出すことが出来た。旧館の解体工事の工事、既に15ヶ月が経過していた。高層棟の基礎工事で、深さ40mもの巨大な穴が既に開いていた。その作業時間との戦いの中での厳しい交渉であった。私は、学内内の面積の不足をいかにカバーするかの検討に臨み、4月以降継続してⅡ期・Ⅲ期工事の計画、ゾーニングの見直しに集中した。そして各科代表者からなる学栄委員会に増床案と全体ゾーニングの改善方針を提案していた。委員会は北野学長を中心に、建築学科の波多多健夫教授がWG座長を務めて、私も柴田係員が準備する資料に沿って学科間の面積配分、システム家具導入など精力的に学内調整していただいた。
アトリウム・ファルクディクラブの
新設と、学生食堂・ラウンジ環境
の改善

私の改善プラン・スケッチや、面積計算
など、実務作業を補佐してくれたのは、教員の一人である柴田卓次氏が設
当職員（現設施担当部長）唯一人であった。松浦本部長の最初の断絶は、都心に
ある高層大学として、大規模な面積を生
み出すためにも、危険な直装備の原子実験室を八王子校舎に移設し、防災評価へ
の連絡を対応、高度情報化校舎としての
再検討等、次々とコンセプトを決定、指
示したが、その指導力は嘘まじめなもの
があった。

私はこれまでの単なる学内の批判分子
として一転して、クライアントの立場に変
わった。組織事務所に対して最初に要求
したことは、教室間を通じる狭層楼レ
ベータを地下出入り口からスタートさせ
る変更であった。なぜならば当時大量に
移動する学生の動線を考えずに無理とし
か言いようのない計画になっていたから
である。そもそも当時組織事務所の面
では、地下階から1階玄関にオープン階
段があったが、面積不足が判断すると突
然その吹き抜けは図面から消え地下実験
室（後に学生ラウンジに変更）とするな
ど、学内からの要望で、容易な面積増加
が求められた結果であった。だがこの改
善は認められなかった。なぜならば地下
に抱えるDHGプラントの機能・構造が
根本的に成り立たないということだった
ので、断念せざるを得なかった。

今でも毎日出入りする度に懐かしい思い
を味わっている。

都心型大学として相応しい玄関は何か
を考えた。私の頭にはキャンパスに変わ
るものとして入学式や・卒業式・イベント
会場となるアトリウムのイメージであ
った。これまでのプランでは面積不
足から広い玄関ホールは無く、いさり
教務や法人事務室がある何の魅力もない
計画となっていた。この改善がなされな
かったら、現在の大学のイメージはな
かったであろうと思う。キャンパスに代
わる自然光の差し込むアトリウムを創り
たい！という思いから、構造担当者へ大
幅の撤去と大空間の構造変更を進言し
た。私の描いた玄関ホール・アトリウム
のイメージ（図 5）は実現した。改めて
クライアントの立場の強さと、松浦先生
の後ろ盾に畏敬と力の大きさを感じた。
（改善による主な修正項目）を挙げる

図 4 第1期工事：高層棟1層を現しはじめた 1980年11月25日

と。

●八王子と新宿校舎の役割の明確化と
八王子同时整備。パクテの回転等設置と総
合工学棟整備。

●巨大空気浄化装置を必要とした化学
実験室の八王子移転で、21階の機械室
階のインテリア化で有効利用。

●全8ヶ所の学部院内部硬階段の2ヶ所を
外部階段に変更、容積対象面積から除外。
床面積の増床・効率化などで、各科に追
加面積約200㎡を配分。

●6階建てであった中層棟を7階・8
階建てとする。ファルクディクラブを新
建。特に食堂は、教務階の中央階7階に
移すことで昼食の移動が大きく改善。

●研究室の合理的システムウォー
ル・統一家具の導入で、人事交代時の再
利用・無駄の排除。

●研究室はなるべく最少単位の部屋と
し、研究室階の中央に学生ゾーンを共用

NICHE 2012 vol.35 | 47
改善命令書の重みと
重責からの開放

1988（昭和63）年7月26日 午前9時30分

松浦先生は旧校舎理事長室に、組織事務所の社長を一人を呼んだ。クライアント
である大学側は、松浦先生と私二人で、
学内調整済み改善項目の文書を渡した。

地下工事が進む環境であった。II・
III期 見直しを含む学内ゾーニングの決
定方針に沿って、私がまとめた設計変更
に関する百数十項目を、松浦本部長自ら
直立不動で読み上げていった。この「改
善項目」を読み終えた先生は、あらため
て「○○社長！ これは全て工学院大学
の意志です。全て変更・改善して下さい
……」と、力を込めて手渡した。

この瞬間、私は見直し作業の重責から
解放された。2月に開発本部に技らせ
られ、張りつめたこの6ヶ月間の学内
調整と打合せの日々が終わった。毎日緊張
感と心の疲労で熱睡できず、平均睡眠
時間は毎日2～3時間であった。体調
不良を耐え続けてきた私は、改善命令書
を手渡した直後、新宿セントラルビルの
クリニックで初診と診療を受けた。そして
翌朝、会議中に突然突然菊部長が居間に
飛び込んで、「血液検査値が異常だ…病院か
院へ連絡あったでした。」といった患者
の言葉を聞き、感動の涙が止まなくて息を伝
った。この後にも肝機能数値はさらに上昇
し、1600/3200 という高度肝炎で肝硬
変か？と目を心配させたが、奇跡的に
を測定45日間の入院と自宅療養の
後平成値にに戻り生きた。

はからずも入院した7月27日は、私
の42才の誕生日。正に厄年となったそ
の日であった。

工学院大学の大恩人

II期高層棟が完成した1989年9月。

13階の新しい研究室に、松浦先生
は快適にした私を呼んだ。その頃には緊迫
した問題はそれ程なくなっており、いつも
様な経験の教訓を受けた。

しかし、今後の工事費高騰と資金目途、
生きるための実務関係の詳細については、毎
日件数に敷かれて心配で心配であった。

駐車場制度の課題、将来の大学経営・メ
インテナス費用の見通し、所有権関係
の未解決問題…等々であった。それより
も私を驚かせたのは、先取りした「290
億円の運用金利だけで、その時点で30
億円を超える収益となっている」と聞
られた。単純計算で考えても、290億
円が、地下権利の価値などで、計約
400億円の資金を使用この再開発事業を進
めている内実であった。

その後、幸運にも第3期工事にはいり
パブロは始業、工事費の高騰は抑えられ
た。松浦先生の心配した給付工事費は、誠
に大きな余裕を自由に残す結果とな
り、今日のゆるやかな無償供給が可能
となったのである。大きな建築の改築と、
経済的見通しを付された1992年7月。II
期工事完成に因って、松浦先生は親園
がんに逝き、大事業の完成を見ること
なく逝去された。私と同様過労が原因で
あったと思われる。

伊藤都督先生の新宿再開発計画発案と
松浦先生の将来に対する洞察力・決断力
があったからこそ、現在の工学院大学が
存在する。長く厳しい選択を乗り切って
再開発に着手し、大混乱の最終仕上げを
まとめられたこの3年間は大学にとって
の大恩人であると考えている。我々は決
計画合意の進め方とその教訓

私はいつも学生に次のように話してい
る。「建築は具体物の模倣を二つ三つも造って、実際に使ってみて、住んでみて比較検討出来ない宿命をもっている。問題のある建物でも完成してしまえば、存在するのはそれ一つだけである。素人は目新しい形と、新しいベンチの座いと、計画がうまくなくてもその開発に慣れると良いか悪いのかの判断は出来なくなる。それだけに最初の設計主旨、その企画・設計過程と合意の進め方が大切である...」

今回、回顧して思うことは、組織事務所の秘密で計画相談を受けたため、客観的観察に基づいた、新宿・八王子学舎を含む各種の適正配置など、ハードだけではない組織改善を含むプログラム条件を提案することができなかった。従って、総合的な見直しをすることなく、理事会希望の条件と、新宿学舎の当時の機能をそのまま高層キャンパスに詰め込むスタイルを切った。そのことが不祥の始まりであった。計画段階で様々な可能性の研究と、内部組織の見直しを含めた、合意形成の過程に問題があったと考えている。工学芸術の歴史となる「混乱した再開発の経験」は、本学の今後の発展に必ず生かされることを願ってやまない。

それにとっても1965（昭和40）年に工学芸術大学に入学し、卒業後助教として採用されて以来20年、古びた旧学舎で育った私は、設計・計画が専門である自分に、いつかきっと再開発の日が来る、その時何らかの役割が果たせたなら...活動のために役立つことがあるならば、希望に燃えながら強い夢を抱いていた。計画が開発されたスタート地点から様々な問題点を指摘して、むしろ計画に反対していたに間違わらず、着工後、工事の遅滞を妨げずに、全体の見直しをする立場になった。我ながら実に皮肉な運命を感じ、同時に自分が描いてきた夢が実現したことへの感謝と満足感が、沸騰した喜びとなって体中を激震させた。それが昭和40年20歳の歳月が流れた。この領土をまた当時を振り返ると、若く元気であった自分がいとおしく思える。工学芸術大学で今日まで過ごすことが出来る幸せを一人独りしめる。そして私の行動は少しでも本学のために役立ったのだろうかと自問自答する。

毎日の往復で学校の扉を開くたびに、人生の喜怒哀楽が静かに体の中を流れてゆく。早いもので、25年の月日が経過し、本学の工学芸術大学は創立125周年を迎える。

ここに謳で、今は亡き伊藤師範先生、松浦准教授先生をはじめ、この大事業にご尽力戴いた方々のご冥福をお祈り申し上げる次第です。合掌
工手学校卒業生と
台湾総督府の土地調査事業

国立台北大学歴史学系助教授
蔡 龍保 TSAI Lung-pao

一、はじめに

明治維新以降、日本では全国的な「地租改正」を通じて、明治政府の財政基盤の確立と土地制度の近代化が進められた。日本の台湾領有からほどなく、台湾総督府は台湾の植民地統治の基礎調査事業のひとつとして、1898（明治31）年9月、臨時台湾土地調査局を設立し、地租改正の準備事業として、土地調査を開始した。土地調査事業は、田賦改革・大租権処分などと同時に進められ、田賦の増収による台湾財政の独立を達成するとともに、台湾における近代的土地所有制度を確立するものとなった。

1898年9月に設立された土地調査局は、1905（明治38）年3月31日までの一間、調査事業のために、延べ147万1534人を動員し、520万円に上る事業経費を投入した。極めて大規模なものとなった台湾の土地調査事業の実施に際しての困難はいうまでもない。本稿では、台湾総督府による土地調査事業の遂行に際し、いかにして短期間に膨大な人を動員し、調査に投入したのか、工手学校（工学院大学の前身）卒業生はどのような役割を果たしたのか、植民地と本国の間で、人材がいかなる関係関係によって動員され、移動したのか、あるいは動員の方法や人材の供給源がどのようなものであったのかなど、近代的技術者の植民地統治における重要性を紹介することにしたい。

二、組織編制と技手の役割

1898年9月、勅令第201号「臨時台湾土地調査局官制」により、職員構成が規定された。局長は総督府民政長官後藤新平が担当し、事務官尋任2名、技師専任2名、委員50名、技手専任40名が置かれた。調査局には、土地調査・
三、日本国内における人員募集

1. 陸地測量部の協力

土地調査局は、台湾島内の人員確保には限界があり、1899年度からの事業の展開に伴う判任官300名のうちの技手を台湾で確保することは不可能であるとして、日本本国における人員募集を行うこととしたのである。測量部は土地調査局との間で測量方式に関する合意を取り付けたのち、総督府の要求に従い、技術者養成への支援を開始した。1899年12月、図面測量人員養成のため、総督府は7名の陸軍の人員を嘱託として受け入れた。測量部班長陸軍歩兵大尉部田府が図面測量業務を担当し、測量部班員兼修教授官陸地測量師岩永義晴、久保祥範、菊池晴久の3名が図面測量教官を、測量部班員陸地測量手仲野秀太郎、白川久太郎、津村浩光の3名が図面測量助手を担当することとなった。

1899年10月には「図面測量志願者心得」が制定され、同年11月には東京で測量技術者の募集が行われた。土地調査局事務官中村吉之は測量部山口事務官は全所へ推奨と「図面測量志願採用者」の提供を依頼した。推奨された「志願採用者」は、学力・品行・体格などが検査されたのち、雇員の身分で土地調査局測量生として着任前に7か月の修習訓練を受けることとなった。

同年12月、土地調査局は、倉持寿吉など25名を雇員として、土地調査局図面測量生に採用した。彼らの学歴を見る
と、工手学校出身者が最も多く8名を数える。次いで攻玉社、数学専修義塾がそれぞれ2名、そのほか、数理あるいは測量に関連する学校の出身者が多い。工手学校は当時中国技術者「工手」（技師・職工としての技能を備えた人員）を養成する重要な教育機関であり、測量部の選定の対象とされたのも当然であろう。さらに測量部に応募した人員の出身教育機関は多くが軍との深い関係をもつ機関であった。台湾派遣が近づいてくると、測量部は図面測量関連技術の訓練をさらに強化し、修習が完了したものはに台湾測量局から職業書が発給され、1901年6月の卒業後すぐ台湾測量局技手に任命された。（図2）

2. 技術見習生と技手の育成と募集

（1）技術見習生の育成

土地調査局は、測量課に必要な測量員の短期間での確保は、測量部の支援からりに直面する難しい問題を理解していた。1901年の土地調査事件の対策を拡大を前に、技術者を大きく増員する必要があった。そのため、土地調査局は技術人員を技術見習生と技手のふたつに分けて、自ら日本で募集を行うようになったのである。

1901年1月12日、土地調査局長後藤新平は、見習日の設置による事務員と測量員の拡張を総督児玉原太郎に上書した。しかし、人員募集は急を要していたため、後藤は児玉への上書以前（1900年12月）に技術見習生、技手原田信次、東京大学助手で山口・広島・岡山に出張し、技術見習生の募集を行っていた。後藤もまた、山口・広島・岡山の県知事に対応を推奨するよう依頼していた。学科試験は読書、数学、図画作、作文、数学、物理学があった。学科試験の水準は尋常中学卒業程度であり、尋常中学の卒業証書を持つ者は試験を免除された。

岡山・広島・山口での募集は各地方官庁に知らせられ、地方官庁が募集告知を行うなど、募集方法の説明を行うたため、参加者は非常に多く募集の3倍に応募した。しかし、実際には学科試験を通じたものは極めて少なく、土地調査局は福岡・熊本・佐賀でも募集を行い、30名の定員に達する人数を確保できた。一般の中学校以外に数学・物理・測量・木材・鉄道などの専門技術学校出身の人員が多かった。工手学校・佐賀工業学校・東京物理学校・鹿児島測量技校・京都第三高等学校大学予科三部土木学科・攻玉社・東京私立数学会・鉄道学校・数学専門研数学館などで、多くは私立学校であった。

見習生は1902年6月2日から台北府後街（現在の館前街）の商工学校で訓練を開始した。測量科は土地調査局監督官呂啓ᶜｉｎｏｈｕｙｏｎを観察しており、大水科では土木局土木課技師浜野弥四郎・清水一德・山路義太郎が、鉄道科では鉄道部技師張守らが教官を担当した。講習終了後、見習生たちは横浜付近にかかって、実際にフィールドで測量の実地練習を行った。実習における成績のよいものはすぐに土地調査局に技手として採用された。実地測量練習終了後、総督府に卒業証書が行われ、試験終了後、任務に与えられた。

（2）技手の召募

土地調査局の主要な人員募集の対象は、東京の工手学校・攻玉社・順天大学の三つの教育機関の学生および、各官庁の在職技手のうち一般測量術に関連する知識を有する者であった。工手学校は、福井藩兵渡邊洪基によって設立された。波は当時、工業関連の学校が少ないこ
とを憂慮していた。技術者養成は、一二
の公立学校でのみ上層の技術者養成さ
るのみで、高等技術者と職工・工手・助
工の範囲の中級技術（技手・職工長）の能
力を資格を持つものに関しては、攻玉社
土木科で養成されるのみで不足していた
のである。1887（明治20）年10月31
日に工房学校が設立されると、土木・機
械・電工・造家・造船・採鉱・冶金・製
造等（化学）などの8つの学科が置か
れ、中級技術者が育成されるようになっ
た。

攻玉社は、明治時代の六大教育家の一
人と称される鳥羽藩士近藤真琴が1863
年に創設した蘭学塾で、当初は攻玉塾と
呼ばれ、明治前期には慶応義塾・同人社
とならぶ「三大学」のひとつであった。
初期には蘭学・数学・航海術の三科が
設置されたが、のちに1875年には航海
測量練習所（1880年に商船共と改称さ
れ、1893年に廃止された）が開設され、
1880年には陸地測量練習所が開設され
た（1884年に陸地機と改称され、1888
年には再び土木科に改称。1901年には
工学校と改称された）。攻玉社は測量技
術者養成で知られ、海軍兵学校の予備校
として認識されていた。（図3）

順天寿学校は日本で最も古い測量技
術者養成学校で、1834（天保5）年、福
田理軒が大坂に算盤塾として順天堂塾
を創立した。1871（明治4）年に東京へ
移り、順天寿学校と改称し、「測量算数
学校」として発展していった。1888年、
東工工業学校予備科が設置され、入学者
が増加し、東京有数の名門となっていた。
1894（明治27）年の日清戦争、1904（明
治37)年の日露戦争においては多くの学生が短期緊急講習を受けたのち、実戦へ赴き臨時調査手として活動した。順天求合校は陸軍参謀局調査課との関係が深く、予備学校として認識されていた。

明治20年代において、これらの三校は日本で数少ない中級測量・土木技術者養成を行う重要な教育機関であった。1900年（明治33）12月17日、土地調査局は工科学校校長三好晋六郎および攻玉社社長藤田清・王嘉で適当の技術者を提供するために求めた。これに対し、三好と藤田は1901年1月21日に支援を表明し、学生に応募を勧め、人材に協力することを返答した。

上記三校の卒業生者および、すでに民間に就職していた卒業生の採用は単純で、直接採用するのみであった。一方、両校の校長から紹介された官庁に就職した卒業生の採用に関しては、土地調査局がそれぞれ東京市・東京電話交換局・衆議院内務省土木局・警視庁第一部・陸上陸軍建築部・鉄道作業局運輸部・水路部など日本国内の官庁へ文書を送り、同意を取り付けたのち土地調査局へ転任することとなっていた。（図4）

1901（明治34）年6月、土地調査局測量課長徳見常雄が再び工科学校と攻玉社工学校を訪れ、以前、測量部に属した人材養成を要請したと同様に、「養成委託」方式で卒業前の卒業生の学生を採用することを許可するよう依頼した。1902年3月の測量課長徳見常雄の人事計画により、さらに測量員132名（技手62名、技術見習生70名）の採用が必要となり、それらは官庁の在職者、休職者及び工科学校・攻玉社会順天求合校と測量術を教えている学校の関係者から人員を確保することとなった。（図5、6）

四、おわりに

土地調査事業の推進のため、土地調査局は台湾と日本の官庁・学校・民間企業から人材を確保しようとした。事業の拡大を受け、人員確保は続いて行った。その結果、1898年9月から1903年9月までの5年間で、一つの膨大な技術官僚集団が生まれることとなった。

膨大な技手集団全員の歴史を見ると、369名のうち卒業生が確認できるものは298名だが、そのうち66名（22.1%）が工科学校出身である。続いて攻玉社の43名（14.4%）、順天求合校と陸軍教育団（工兵科・歩兵科・機械科・砲兵科）がそれぞれ17名（5.7%）である。工科学校出身の技術者たちは、土地調査事業で一番重要な役割を果たしたといっても過言ではない。

規模のきわめて大きかった台湾の土地調査事業の遂行から見られるのは、「近代的技術」は日本の台湾植民地統治のツールの一つであり、官庁の技術官僚や民間の技術者などを含む近代的技術をもつ人々が植民地統治のなかで重要な役割をはたしていた。工科学校卒業生の台湾での活躍もその一助になる。
The land survey in Taiwan is one of the important fundamental surveys in the Japanese-ruled period. The scale of the land survey is very big and the land survey should be completed in the short term. Therefore, the recruitment of personnel is quite difficult. Although assistant engineers are not high-grade technocrats, they play the most important roles in the field. In the process of recruiting assistant engineers, we can find that Kosyukakko can be seen as the talent bank of The Extraordinary Taiwan Land Survey Bureau. We can see the important role which the group of assistant engineers played in the colonial rule, the reciprocal connections between schools training technocrats and the colonial authorities, and the deep meaning of the talent's mobilization in the Japanese Empire in the colonial rule period.

引用文献
『台湾土地調査史読本』
『台湾総督府公文関係』
『台湾田価改革事業之研究』（江丙坤／台湾銀行経済研究所／1972）。
『日治初期台湾総督府の技術力之招募—以土地調査事業為例』（常鎧傑／『政治大学歷史学報』第35期／2011年）。
『日本統治時代台湾総督府の土木警備員—土地調査を例として—』（嘉織隆／三木重慶編著『民進党員の団体と社会』／日本経済評論社／2011年）。

さいりゅうこ
1998年 国立台湾師範大学歴史学系卒業
2001年 国立台湾師範大学歴史学系修士
2006年 国立台湾師範大学歴史学系博士

経歴
東京大学文学部国際文化研究科
工学院大学国際文化研究科
立教大学外国人研究員
一橋大学外国人研究員
専門
領民地時代の台湾交通史、土木史
e-mail = henrytsa8@hotmail.com
輝かしき先輩たち

第13回

こんな摩訶不思議な建築、観たことない！

河口 庄一

KAWAGUCHI Shoichi

類洲 環 RUISU Kan

犬郎堂の全景…四季四十五番札所は八十八ヶ所のなかで難所の一つに数えられているが、毎日、お巡礼さんが絶えない
四十五番札所「海縁山岩屋寺」は、確かに「奇観」であった。屹立する磐岩峰に、挿まれるというより、やはりのめり込みで堂宇が建っている。また、そこに通じてつながる「修行」だった。急勾配の三段の坂道を登ること十五分、そこから266段の石段が待っていた。「どこが海岸山だ」とボヤきながらも、ここへ引き返しては取材にならない。汗だくになり、疲労困憊して通じていて、一瞬にして、今までの三分の苦行が吹き飛んだ。「大師堂」だ。奇観こそ、大師堂だった。

1. ここまで好き放題にやった建築家は誰だ？

建築を言葉で伝えるほど、難しく、難しいものはない。「百聞は一見にしかず」は建築に与えられた箴言だ。特に「大師堂」の「奇想を奇想」の真髄をどこまで伝えられるか自信がないが、とにかく頑張るしかない。

「大師堂」だから、お寺の施設なわけでも、もちろん和風である。確かに、全体のバランス……間口や高さなどは伝統の木組で収められているのだが、外へいけばいくほど、和風から切り離していくのだ。

まず、向拝柱。二本組の角柱には極くエンタッシが付いている。下部にはフーティングが施され、柱頭部には何と植林の花束が彫刻されている。もう完全にギリシャ神殿のモチーフだ。植林の花束から飛び出す獅子の組み合わせなど、思わず笑ってしまう。

植林の花束だけではない。手挟みの花びらを巻く花模様、木鼻の4層に凹凸する花巻、模様、花束、大動の翼をセットする花模様……などの彫刻は、やはりどこか従来の寺院建築のそれとは違う。

内陣の柱頭部では、4本のリングが相輪状になっている。地垂木、飛樋垂木の先端部は鋭い三角が刻まれている。跡が
口を開けて並んでいるようだ。屋根の宝珠相輪は八角形で、何と回廊が巡っている……これらなどは、他の寺院では絶対に見ない。そして、裏側や内陣の手摺を支えるたたら束は、もう完全にモダン・デザインだ。

建立された1920（大正9）年と考えると、何という新しさ、何というキッチュさ。言葉が悪いが、ここまで好き放題にやって建築家は誰だ。

2. 建築科の優秀な生徒は大蔵省に誘われた

海岸山岩屋寺・大師堂を設計した建築家、名前を河口庄二という。もちろん、わが工学院大学建築学部の先輩である。

庄二は1877（明治10）年5月、愛媛県温泉郡余土村に生まれた。生家は建築家であった。

1907（明治40）年、工学校建築科を卒業する。と、一気に30歳まで飛んだが、庄二のこまでの経歴が半端ではない。

17歳にして、建築実務の道に進む。2年後の1895（明治28）年、「普通寺第十一堂団兵舎」を設計する。この施設がどんなものだったのか、インターネットで検索しても判らないと無くして申し訳ないが、この時の「兵舎」との出会いが、庄二の様式建築への「覚醒」と資料は伝える。

1888（明治31）年、蓬華寺鐘楼堂（伊予国温訓郡潮見村／現存）、高知県神社横門（伊予国伊予郡／現存）などを設計し、工事監督も務めている。庄二、21歳であった。

そして、この年に、岩屋寺の本堂および大師堂の設計を依頼されるのである。だから、庄二にとって、岩屋寺の大師堂は20年を経ての再建となったのである。今で言うモチベーションは相当に高かったに違いない。

1901（明治34）年、愛媛県の建築係に招かれ、県下の学校施設群の設計に携わる。3年間の奉公で9校ほどに関わる。どんな建築だったのか観てみたいのが、残念ながら全て現存していない。写真もない、図面も残っていない。5年前に初めて接した「普通寺第十一堂団兵舎」の様式建築への思いが沸々と燃えていたのでだろうか。

この愛媛県職員時代に、庄二は建築学会に入会する。紹介したのは、辰野金吾
輝かしき先輩たち

1904（明治37）年、庄一は東京市役所に書類を提出し、そこで仮職務となった。しかしながら、大藏省では、1911（明治44）年に、大蔵省事務部参事となる。前段で触れた竹田米吉が、書いている。

工部省に就任した庄一は、警視庁建築事務局を経て、1911（明治44）年に、大蔵省事務局参事となる。前段で触れた竹田米吉が、書いている。

大蔵省の建築課（後の同籍管理局）は、大蔵省の建築家の雨を大いに要求した。そんな関係から、同僚の技師で、東大出の若手である太田先生が、大蔵省の建築家に選ばれた。同僚の優秀な生徒が大蔵省建築を担当され、通学中のボツボツと大蔵省に勤務する人が増えていった。（『職人』／竹田米吉／工作社／1958年）

その大蔵省に勤務するのだから、庄一是“優秀な生徒”だったに違いない。では、なぜ大蔵省は“建築家の雨を大いに要求”していたのか。当時、大蔵省では、1886（明治19）年に設置された大蔵省建築局から試行錯誤されてきた一大プロジェクトが、東京に現実味を帯びてきているのである。そう、「国会議事堂」である。

庄一は、国会議事堂設計スタッフとして招かれた。はずであった。

不思議なのは、国会議事堂の設計に忙殺されていた最中の1913（大正2）年に、庄一は「大本山総持寺鐘楼建築設計懸賞募集」に応募し、図面を設計していている。ということは、設計には入れがたいが意匠の奇抜又は優秀なもの、これを捨てずに良いとも思わない」とは、審査員の一人の伊東忠太の言葉である。

“奇抜”……そうか、それは庄一のキャ
ラクターであったのだ。しかし、 “建築を芸術として捉えた初期の建築家” である伊東のこの言葉に、庄一は大いに自信を持つようである。この静待寺鐘楼の奇抜さが、そのまま岩屋寺に継承されている。

3. 大師堂の工事

国会議事堂の設計の最中なのだ

岩屋寺・大師堂の起工は 1915（大正 4）年、竣工は 1920（大正 9）年。勤務先が一丸となって一大プロジェクトに取り組んでいる最中に、本当に、こんな早い話が“アルバイト” をやっているか、いや、許されていただけなかったらなか。

工期の 5 年間、庄一は “現場” を訪れたのだろうか。東京から、あの愛媛の山中まで、行くだけで 3 日〜4 日はかかる。岩屋寺とは 20 年前に知っていったので、“風土” は熟知していたろう。その風土に適応する建築は図面では描ける。では、その図面で描いたデザインが、実際の形態になることに気掛かりなかったのだろうか。庄一は、竣工した自作を観ているのだろうか。

大師堂が竣工して 10 年後の 1930（昭和 5）年、庄一は永眠する。享年 53 歳であった。庄一が大師堂を観ていたかどうか不明だが、国会議事堂の竣工（1936）年は間違いない観ていない。大師堂は 2007 年（平成 19）年に、国の重要文化財建造物に指定された。

—

海岸山岩屋寺・大師堂を見極める。本当に “奇観” だ。風呂の身体に、洋風の装い。では、洋風風かつてとう、そうではない。装いがこれだけ自己主張しているのに、建築は素然だ。決して派手ではないのだ。それが生来に、取材した午後1時〜6時まで、およそ 300 人は超えるであろうお通路さんの方が訪れたが、誰一人、大師堂の奇観を眼に丸くした人はいない。

小雨の降るなか、あの狭い参道を降りながら、大師堂の背後に国会議事堂が眺れた。見事に重なったとは言い難いが、思えば国会議事堂も “奇観” である。

※取材にあたり、海岸山岩屋寺の住職・大西文彦氏に境内の自由散策の依頼をいただいた。

また、愛媛県伊予市塩屋町で建築設計事務所を営む和田耕一さんには、大師堂および河口庄一についてのエクチャーを受け、さらには自家用車で岩屋寺まで送迎して下さった。これを受けたバスと徒歩で行っていたら 3 日分かかっていたろう。和田さん、本日も、市内の歴史的建造物の調査・研究をされており、特に大師堂の調査には、それを従えて互いに訪れて成立された。大師堂の前の重要文化財指定には、和田さんの尽力なくしては成立しない。お二方には、お話を聞き、改めてお礼を申し上げる次第です。ありがとうございました。
A Masterpiece of Eccentricity or A Simple Mess of Decorative Over-dose? – Taishi Do Edifice and Shoichi Kawaguchi

Volume 13 of ‘Our Great Seniors’ features a unique temple edifice located at the center of Shikoku Island, the architect in charge. To tell the truth, my hard work began before reaching the temple. I had to walk upward in a steep inclination for 15 minutes and then 266 stone steps awaited me. Overall, it was like a 30-min sadhana (or ascetic practice) experience.

‘Taishi Do’ edifice is, to say the least, quite eccentric. The basic design seems to be faithful to the authentic temple design. I was so curious who was in charge of the design. The architect responsible for ‘Taishi Do’ design was Shoichi Kawaguchi, a graduate of Department of Architecture (currently Faculty of Architecture), Kogakuin University.

Shoichi was born in Ehime Prefecture, Shikoku Island in May, 1877. He graduated from the Polytechnic (latter-day Kogakuin University) in 1907. Before the graduation, he determined to follow the professional career in the architectural/construction segment at the age of 17 when he observed an army barrack. In 1898, when he was 21, Shoichi designed two temples and was in charge of the field superintendent. At the same period of time, he was appointed to design ‘Taishi Do’ edifice, of which construction work commenced more than 15 years later.

‘Taishi Do’ was completed in 1920. It seemed that Shoichi must have been fully involved in the Diet Building project. Was he able to control the edifice project? How many times he visited the site?

The fact stimulated my imaginations. In any case, our great senior passed away in 1930 at the age of 53, six years before the completion of the Diet Building. ‘Taishi Do’ was listed in the national important cultural properties. (f.b.y.)
狭小住宅についての考察
「究極の条件からの住空間づくり」

2011年10月5日、谷口志彦先生担当の大学院科目「建築デザイン特論」の中で、私が実践している、都市環境の厳しい条件下での、住宅設計についての研究成果を「究極の条件からの住空間づくり」というテーマで講義をさせていただきました。その時の講義内容と住宅、特に「狭小住宅」を設計する時に、設計者として、忘れてはならないことを、書かせていただきます。

私は住宅の設計が大好きです。特に都市における巨大な建築物の陰にひっそりと建つ、小さな住宅、あるいは住宅を併設する小さな店舗（みせ）など、丁寧な暮らしをしている人々を支えている住宅を設計するのが好きです。そのような住宅を、これまで多く設計してきました。大きな箱物マンションが林立する、そのすぐ横で、何世代にもわたって、暮らしを丁寧に行なってきている家族の建築こそが、本来、街を活性化し、街を歩く人々の心に楽しげや、わくわくする期待感、そして未来への夢を、育むことが出来るのではないかと考えています。ヨーロッパの都市では、教会堂や議事堂、学校、病院、オペラハウスなどの建物とも、同じ質で人々の住宅がつくれてきました。かつての、日本の庶民の住宅も温熱環境等、性能面では、技術的に問題があったとしても、精神面での心地良さ
は、現代住宅と比べ物にならないほど、優れたもので、気持ちの良いものでした。
世界各地も訪れるレベルであったと思いま
す。多くの腕の良い大工の棟板をはじめと
する、職人集団に支えられた、住宅の
質を守るシステムがあったと思います。
それにより大きな住宅も小さな住宅も快
達性と、耐久性の質をキープすることが
できました。住宅を建てたい人に、気持ち
の落ち着く、良い家を建てられたと思
います。そのような、ささやかな住宅た
ちが、実は街の風景（景観）の主役だと
私は考えています。

そのようなことから私は、設計をはじ
める時、敷地周辺の環境調査として、建
物、その他の既存物を全て、スタッフと共
に実測します。これを行うことによっ
て、現実の環境が如実に理解できます。
敷地の周辺を実測し、正確な写真として撮
影します。その上で新しい住宅が建つ、
周辺環境を読み始めることになります。

周辺建物と屋根のかたち、扉、門扉、
樹木、電柱と電線、その引き込み位置、
街路灯、道路標識、一方通行、ガードレー
ル、マンホール、側溝、物干し、エアコン
室外機、給湯器、ゴミ収集場などにつ
いて、細かく高さ、幅、奥行きを測って、
周辺における、それらの位置を特定し、
100 分の 1 で図面化します。高低差があ
る場合には、その高さを実測して図面に
入れます。そして、全てのデータを入力
して図面化した後、100 分の 1 でリアル
な模型を手作業でつくります。この模型
は、細部にわたり周辺状況を含み込ん
で、実際と同じ詳細な環境模型にします。

設計の初期から、クライアントの意見
及び注文をよく聞き、話し合います。都
市における実際の条件の中、家族が住む
ために、存在する住宅の意味と環境対応
力と普適性を住宅に加えていくことを、
伝えることにしています。環境が、どん
なに悪化しても、生き残る住宅をつくり
たいと思っていますので、ここでは時間
を掛けて実測データと図面、環境を再現
します。これは私が、長年にわたってきた
設計の手法です。隣接する周辺の人々に
対して、新しい住宅による日影の悪影響
やプライバシーの悪化、これから通り抜
けていた風を、止めてしまわないように
することができます。周辺の木や草花を
枯らすことなく、バランスをとること
が可能となります。新しい住宅は、周辺
環境との調和と未来への力を得られま
す。これからの時代は、全ての建築が、
ささやかな人々の暮らしごと、都市の自然
を保全した上で、新築を実行しなければ
ならないと思います。

現代は住宅にとって、自由な時代だと
いえます。「構造からの離脱（軽量化に
よる構造軽減）、素材からの離脱（工業
化建材の使用）機能性からの離脱（ワン
ルーム化あるいは均質化）、ついに、
暮らしのスタイルの多様化（デザインの

NICHE 2012 vol.35 | 63
百花繚乱と無国境化）など、住宅を縫う
付けることの少ない、自由さの極致が到
来したと思われています。しかし一方で、
50年後に現代の建築（住宅）ストック
として、どのような建築が残せるのかと
いうことについては、きわめて不安な状
態です。日本経済の行方も不透明で、建
築にとっても、重要な問題が見えません。
私は、そのような中で、普通の人々の暮
らしを包み込むための小さな住宅の優れ
たものを残したいと考えています。

第40年～60年の古い木造家屋を解
体し、その家族のためか、次の家族のた
めに新しい住宅を建ててきました。その
手法は、周辺建物データを基本に、まず、
隣接地の家との窓の対面は出来るだけ避
けること、射し込む光を、ひとつ残らず
新しい住宅に採り込むこと、季節によっ
て方向を変えながら、吹き抜ける風を、
できるだけ多く採り込むこと、どこか遠
くが見える景色を設けることと、周囲の自
然を借景すること、職人の手わざを使っ
て、自然素材でつくること。その結果、
建築家事のような半分が、メーカーではない、
職人にわたり、次世代が、また職人にな
る可能性が見ること、できるだけ中庭
（坪庭）を計画し、そこに自然をつくり
込む工夫をし、都市にビンポイントでも
緑が増えすることを考えること。プライバ
シーを護りながら、自然と共存できるこ
と、そして背を切り取ること。また日
本人は家財道具が多いので、それをでき
るだけ収納するとともに、美しく設（し
つら）えること。

以上のことから、私が考えて実践してき
た、究極の条件から、気持ちの良い美し
い住空間を設計するエッセンスです。こ
れからも、そのようなことを研究し、良
い社会的ストックになる、住宅を設計し
ていくと考えています。

A Study on Small Houses in Crowded Environment

I love to design small houses, especially those in the shades of large buildings. I always begin my design project by carry out the fieldwork, or the actual measurement of the site and surroundings. Then, we attempt to read and interpret the architectural contents to create a 1/100-scale precise drawing which is a basis for a realistic 1/100-scale model.

My approach includes: 1) The new house should feature windows that command a fine distant view, 2) The house should be built with craftsmanship and using natural materials. 3) The house should, if possible, a courtyard with greens. 4) All the household items, including furniture, should be neatly integrated into the housing design. (f.b.y.)
かわぐちみちまさ
1952年兵庫県生まれ
独学で建築を学ぶ
1983年 川口正建築研究会設立
2006年～ 早稲田大学非常勤講師
2008～2010年 NPO法人筑りの会代表理事
1992年「東京風」でLID 貫都市設計部門賞受賞
1999年「土家」川口都市デザイン賞受賞
まちかどスポット賞賞受賞
e-mail: kawag@hkg.odn.ne.jp
主な著書
「狭い敷地での間取り」(共著) 新聞社 1996年
「日本の住宅をデザインする方法」(共著) エクスタレッジ 2011年
空間を変容させ、
空間と人とのかかわりあいを深める
スーパーグラフィック

スーパーグラフィックを、壁面に描かれた巨大な壁画とする向きがあるが、私は、グラフィックやデジタルグラフィックを、都市や建築のスケールで展開し、‘空間を変容（Transform）させ、空間と人とのかかわりあいを深める’環境コミュニケーションデザインであると考えている。

はかりしれない影響力をもつデザインであることを実証するかのように、いま、公共空間、建築の内外空間、建設現場などから、車両、電車、飛行機などの交通機関にいたるまで、都市のあらゆる場所にスーパーグラフィックが広く浸透している。たとえば、鉄道通りを歩くと、ブランドショップのファサードがグラフィックな表現を使い、夜になるとファサード全体を使ったデジタルグラフィックが出現する。そこを通るチャンスは広告でラッシングされ、工事現場の板張りは、ひとつの媒体として機能している。

スーパーグラフィックは、1. プロモーションとしてだけでなく、2. CI（Corporate Identity）の一環として、3. サイン（Wayfinding）やインフォメーションとして、4. パブリックアートとして、都市のなかで生き生きと存在しているのだ。

空間の変容

パリの象徴的な建造物である「凱旋門」。1986年修復工事のため、青・白・赤のフランス国旗をイメージさせる幕で覆われた。トリコロールカラーの幕で全く違う姿になった凱旋門は、変容することで人を惹きつけ、同時に凱旋門がシャンゼリゼ通りの正面により象徴性を増したかたちで見えてくる。まさに、スーパーグラフィックの真骨頂を発揮していた。パリの市民にも好評だったのだろう。工事終了後、小片に切り分けた幕を貼付したポストカードが販売され、大人
気だったという後日談がある。
さて、私自身が取り組んだ駅の再開発にかかわるスーパーラファイックを紹介させて頂きたい。
北海道・JR 札幌駅、ホーム全体にかけられた大屋根に、排煙のための排気塔屋根が設けられている。上方から見ると、トップライトを設けた、折版屋根が整然と並んで見える。その排気塔屋根10数枚をキャンパスとして、鉄道の駅にふさわしく、高層ビル内のホテルや商業施設など、上方からの眺望を強く意識してデザインを計画した。矢印と英語表記の地名を各屋根に設置し、全体で札幌とその近郊の場所や方向を示す、建築的なスケールのサイネージデザインとなっている。冬、屋根に雪が積もると、文字がレリーフのように浮き上がって見える。季節によっても変容するスーパーラファイックとなった。
ランドマークとなって40年経て、変わることなく愛されているスーパーラファイックがある。1971年、アメリカ・ボストンガスの依頼で、コローナ・ケンタ氏がデザインした高さ43mのLNGガス貯蔵タンク（Rainbow Swash）。今に至るまで、タンクそのものが解体・移設され、会社が買収・統合を繰り返したが、その度にオリジナルデザインが受け継がれてきた。虹の7色を大胆にデザインしたスーパーラファイックによって、近寄りがたい存在のタンクが、ボストン近郊工場地帯のランドマークとなって生き続けている。

材料や技術の革新
1960年代後半、スーパーラファイックは「シーラウンジ共同住宅」で見られたようなペイントによるシンプルな方法から始まった。ところが、それ以降まに至る技術の革新によって、スーパーラ
フィックを可能にする領域が飛躍的に広がっている。変化は常に、材料や技術の革新によっておこってくる。たとえば、ファサード、ガラス、床や舗道などから、車両・電車・飛行機まで、下地を塗ればすぐに貼付できるシートが開発された。この耐久性のあるシートには自由なデザインを実に鮮やかな色彩でプリントできる。他にも、新しい箔素材、建築素材そのもののエッティングなど。またLEDを使ったデジタル技術によって、ライティングにとどまらず、光のグラフィックやMoving Imageをあらゆる場所で再现することも可能になっている。

スーパーグラフィックの社会的責任

限りなく不可能なことはない技術が存在する今、スーパーグラフィックを考える上で、表現の場が大きくなければならず、はつ性があればあるほど、デザインが負う社会的責任は大きい。社会性、公共性、文化性への見解がデザインの根拠にあってこそ、スーパーグラフィックが景観をつくる魅力の一部になり、ランドマークとなり、長く人に愛されることになる。

海外では、高層ビルのファサード全体を占めた広告の大きさと表現が景観にあわないと訴訟問題に発展した例もある。日本では昨今、地方公共団体の公的財産を有効に活用し、財源を安定的に確保しようとする、あらゆるものを媒体化する動きが甚だしい。社会的責任を考えない媒体化には、警戒を鸣らす必要がある。

景観に寄与するスーパーグラフィックのあり方が、都市の文化度をはかるパラメーターになるのかもしれない。
Super Grafic: A Possible Measure for Spacial Changes and Improved Relationship between Space and Man

The super graphic is lively existing in the urban environment as: 1) promotion method, 2) corporate identification, 3) wayfinding signs and other information means, and 4) public art.

I made a super graphic design on the JR Hokkaido terminal station in Sapporo, Hokkaido. Considering that the roof is over the platforms of the railway station, I put a dozen of the signs on top of it. I am convinced that my work was a large-scale signage design. The image of the signs changes like phantasmagoria along with the change in the seasons. In particular, the signs come up as relief on a white canvas in winter when the roof is fully covered with fresh snow.

The super graphic began in the late 1960s. The early examples were quite primitive -- just applying paints on the walls. Thanks to the development of technology, the super graphic can be used a dramatically wider range of the areas. One typical example of the technological innovation lies in an adhesive sheet material, which is applicable to building facades/sidewalls, glasses, floors, road surfaces, trains and airplanes.

We designers should realize the increased social responsibility of the super graphic. The larger the "canvas" is, and the longer it lasts, the greater responsibility the super graphic must take. (f.b.y.)
2011年10月に新しくオープンした「ルミネ有楽町店」は、駅以外への初の出店として、大いに話題になった。
ルミネのおしゃれな雰囲気は、この不況の中でF1層の女性や30代の男女を魅了し続け、11期連続して売り上げを伸ばした。国鉄時代からJR東日本鉄道への変革の中で、多様な建築実務経験を生かした営業理念と戦略を開く。

東京駅ステーションギャラリーから
有楽町ルミネへ、時代の先端を走る

鈴木 武  SUZUKI Takeshi
株式会社ルミネ 常務取締役
工学院大学建築学科 1969年卒業

すすきだたけし
1945年5月生まれ
1964年 東京工業大学大学院建筑学研究科修了
1969年 工学院大学建築学科卒業
1989年 地産団の鉄ビルやホテルの開発企画・設計・工事監理に従事。
2000年 株式会社ルミネに入社、施設管理部長
2002年 株式会社ルミネ常務取締役
2008年 株式会社ルミネ常務取締役
公共的な仕事をしたい

谷口：建築学科に入学された学生時代の思い出から就職後の経緯について聞かせて下さい。

鈴木：最初に憧れたのは黒田ダムの記録映像です。中学から高校の頃に大戦ルートの破壊的なものを見て感動し、土木屋になりたいと思いました。工学院大学の学生時代はそんなに真面目ではありませんでしたが、希望通り国鉄の東京工事局に入りて頂いたので成績は良かったようだと思います。

谷口：日本国有鉄道に入社後、どのような部署で経験を積まれたのでしょうか。

鈴木：最初、総武線の地下駅の設計監理を担当しました。国鉄が学識者や経験豊富な有識者を集めて技術委員会を組んだときに、事務局として委員の先生方と一人づつ会い、資料作成・論点整理及び事務総合のまえ、スケジュール調整等々を担当しました。学園経理の激しかった時期で、僕も髪の毛を伸ばしていたので、東京の安田講堂の前の斎藤平蔵先生の研究室で「君は大丈夫か」と言われたの覚えています。あの時に決めたことは、後の地下鉄車両の構造基準や消防法等にかなり反映されました。地下空間に煙が充満した時、地下5階に滞留する旅客数千人をいかに地上に混乱なく安全に避難させるか、二段階としのシャッターを天井面に設けるため、非難時の群集歩行速度を考慮して設計の数値、幅、非常用照明の配置・性能、内装の不燃化等々の防災基準を設けました。早稲田大学の井上戸一先生はアメリカの潜水艦のデータを元で渡してくれて、炭酸ガスが充満した水中の中で人間がどのくらい耐えられるか等も参考にしました。また、営团地下鉄の方南町車庫で車両の燃焼実験を行い、車両の不燃化に向けた性能基準についても結論を得ました。

谷口：なるほど、工学院大学の環境設備系の先生はみな早稲田大学の井上戸一先生の流れをしています。卒業研究は構造の十代田研究室ですかね？

鈴木：そうですね。卒業研究では鉄筋コンクリートをやっていないので、防災基準は勉強しなければしました。当時、僕の養いが10万円をぼんやりと払う、先生方を訪問して教授頂くためにはタクシー代や本も必要から、そのために使いきらないと。真面目だったので防災関係の本をたくさん買い込んで勉強しました。

谷口：当時の10万円は当時の初任給の3～4倍、たいへんな金額ですね。

鈴木：ええ。その後主に新幹線や在来線の駅舎建設等の建設部門を長く経験し、

国鉄の民営化、トイレの美化

鈴木：1987年4月（昭和62年）の民営化の直後は暗い気持ちでした。当時国鉄は地方に多くの不採算路線を抱え込む等、膨大な借金があり、そのため労使関係も不恵なストが頻発するなど最悪の関係に陥り、自立経営が立ち行かなくなっ

た結果だったからです。

民営化によりJR東日本に名前が変わって最初の仕事は全駅のトイレの美化

す。それまで「国鉄のトイレは汚い、恐い、奥い」と言われていました。その原因を考えて、駅のトイレは公衆トイレと同様、公徳心を期待しても仕方がない、つまり「フルサプライズ」で考えた経験が大きかったです。鉄道をご利用頂くお客様のサービス施設として、清潔に使って頂くためのハードやソフトの視点が欠けていた訳です。この様に民営化の

象徴として取り組んだ「旅客トイレの美化」の中でも新橋駅にTOTOとタイアップして作った「パウダリー・デコフローマ」（8分休符という意味）の最新のトイレは、日本トイレ協会の「グッドトイレ

NICHE 2012 vol.35  71
10)に入賞し、「国鉄がここまで変わったか!」という声が広まった。

東京駅にステーションギャラリーを作る

民営化直後の1987年10月頃、東京駅長から「民営化を記念してJR東日本において施設を設けること」の提案があり、東京駅近くのプラットフォーム経営の臨時委員長に立って、赤レンガの東京駅舎内にギャラリーを作ることとなりました。私はハード面の推進担当として運営面を担当するサービス課の入部と倉庫美術館、大原美術館、広島美術館などを勉強して歩き、同じ鉄道駅を利用したリゾート型のオルセー美術館（1986・12開設）を比べるべくもありませんが「小さいけれども本格的な美術館」として1988年4月に無事オープンしました。松本としのJR美術館は、オープンすると一日2000人くらい来館しました。学会員が気をよくて、「ヶ月もあります」と第2回目の企画は、ビコソの絵画に所蔵作品の貸し出しを依頼し、その時代に、様々なビコソ作品にによる「ビコソ展」を5月から開催することとなりました。

谷口：すごい額だったのでしょうか。来館者数が見えなかったから企画できたのですね。

鈴木：はい。それと「赤レンガの躯体をそのまま表した第二展示室はビコソにふさわしい」と関係者一色の意見が一致し、実現しました。第二展示室は工事中、既存の天井を立て直すため、東京駅大空襲（昭和20年5月）でやられた生々しい風景が出てきます。展示で曲があった鉄骨、木製レンガが消し尽かった跡など、歴史の残像としてそのままの姿を展示室に残すこととし、飾り離れなきノオクリアラッサーを吹いて美術をしました。

谷口：その展示空間は東京駅の歴史をしのばせるきっかけになったわけですね。

鈴木：そうですね。民営化の象徴となる「トイレの文化」や「東京ステーションギャラリー」の仕事に運命して努力することとなりましたが、実際には、お金の確保したり、上司を説得したり、周りをまとめたりという経喫仕事も沢山ありました。

鉄道会社の関連事業とは

鈴木：1987年度のJR東日本の鉄道事業収入の割合は全体の約92%、関連事業は約8%でした。民営化にともない、自立した企業として安定的な経営基盤を確立するためには、多くの県民の経済内容（関連事業収入が50%超）がそうであるように経営体制を革新的に改革する必要がありました。例えば、新宿駅には1日何百万人もの人々が集まり、駅周辺は日本有数の繁華街として賑わっているものの、駅そのものは人々の通過点としての機能が有するし、JRの関連事業にとっても鉄道を利用する人々にとっても最高のポテンシャルを活用し切れていない状況がありました。

谷口：20年近く前。僕も（財）東京都町村自治事務会のシンクタンクに入っていて、東京に200近くある駅を対象に駅の広場や駅に何を求めるか調べ、「駅空間からのまちづくり」という本にまとめた体験があります。国鉄からＪＲに変わったのもちょうどその頃ですね。

ルミネ東京社において

谷口：御社は年間2700億円くらいの売り上げがあり、収益が80何億円、社員が約400人とのことですので、ＪＲ子会社の中でも優良企業なのでしょうか。

鈴木：そうですね。特にリマネーショッサ（2008・9）以前の10年間の業績は、関連事務所である住宅や商業施設の建造、飲食業など、多岐にわたります。個人的にも、住宅や商業施設の建造、飲食業など、多岐にわたります。ルミネ東京では、JR東日本東京工事事務所でホテルや商業施設を建設する部門の責任者でした。2000年4月1日からルミネ東京に対して11年が経ちます。スタート
はルミネ全体のハード部門の責任者（施設管理部長）でしたが、入社4年目から会社全体の中長期計画や経営戦略も担当（総合企画部長）する等、様々な仕事に携わってきました。この間にやった仕事の中で一番思い出に残るのは「企業理念“お客様の思いの残しを読み、期待の先をみず」と共に不変の行動指針6項目を掲げたことです。

有楽町ルミネについて

鈴木：世間の反響がこんなに大きいのかとびっくりしました。オープン直後、JR有楽町駅の乗降者数が一日当たり約3万人増え、オープン初日の開店前には5千人のお客様が並び、その後の数日間も整理入場を継続的に実施し、来館者数は最大7万5000人を数えました。

落ち着いた頃を見計らって入場をフリーパスにした延べ、10万人以上のお客様が入室、混乱を収拾するために大変な思いをしました。銀座と言えば我が国独特の繁華街です。ニューヨークやパリ、ロンドン、ミラノと一緒です。この地区

全体が世界的にも超有名ブランドが立ち並ぶテーマパークのようなもので、ルミネの参入は新たに高層顧客層をこの地区全体に呼び込む波及効果を生むなど、街の活性化にも大いに貢献させて頂いております。

学生へのメッセージ

谷口：多様な社会の位置づけで、環境を含め世の中に貢献していくにはどうすればいいでしょうか。後輩の卒業生、学生達へのメッセージをお願いします。

鈴木：私の原点は工学院大学で学んだ建築でした。古代ギリシャ建築に始まり、ライトやヨルムジュの近代建築を見て感動し、感性やものづくりの原點を培いました。息子の進路相談には「お父さんは建築を選んで後悔したことないように、毎日面白かった」と答えました。今はルミネの仕事と共に業界全体の環境問題にも目を突っ込んでいます。環境の一環で一層高い影響をこうむるのは小さい国、弱い動植物です。干ばつによる砂漠化では人間ばかりでなく動くことのできない植物にも

Mr. Suzuki has been Senior Managing Director of Lumine Co., Ltd. Since 2004, followed by his management task in the inauguration of Tokyo Station Gallery, renovation of the station toilets and the administrative work for the underground line and station construction in the JR East and the Japan National Railways (JNR) (predecessor of the six JR Groups). Luminous, a fashion-oriented department store group, a subsidiary of the JR East, has recorded sales increase in successive eleven terms mainly thanks to its excellent strategy to targeting the so-called F1 generation and lifestyle-conscious customer groups in their 30s.

When asked how the current students could contribute to the ever-changing and diversified society, Mr. Suzuki answered as follows; "We always have to be sensitive and sensitive to carefully sensing someone's plight. We are not under severe energy saving now but we must, for example, turn off the light when it is not necessary. Sometimes small sometimes causes a big difference." (I.B.Y.)
NICHE Passport is an initiative aimed at introducing a wide variety of activities of undergraduate and post-graduate students who had opportunities to have a closer look at masterpieces abroad thanks to the financial encouragement through Kogakuin University scholarship.

Let’s go on a tour of inspection abroad!

NICHE Passport

UNITED STATES
アメリカ都市社会と生活を見る旅
齋藤玲香  SAIITO Reika

UNITED STATES
米国のグリーンインフラストラクチャを巡る旅
花井健太  HANAI Kenta

p.78
NORTH EUROPE
北欧4カ国 一自然とともにある建築と
街中のデザイン・アートを巡る旅
田中美佳 TANAKA Mika
⇒ p.79

FRANCE
フランス 歴史都市を巡る旅
小林由理 KOBAYASHI Yuri
⇒ p.76

GERMANY
ドイツ 木組み家屋の街から学んだこと
松島香織 MATSUSHIMA Kaori
⇒ p.80

GERMANY
中世の宝箱が気付かせてくれたこと
杉本隆彦 SUGIMOTO Tatsuhiko
FRANCE

フランス 歴史都市を巡る旅
Plan Lumiere

リヨンには伝統的な習慣がある。毎年、市民がキャンドルを持ちながら市内を巡るのだ。この都市のアイデンティティー「光」を活かし、光の計画が策定され、歴史遺産の修景計画が行われた。都市計画として照明のマスタープランを位置づけ、行政・アーキテクト・民間企業が連携しライトアップを計画的に推進する仕組みが機能している。このような背景から、光の都市を確立していた。潜在的にある建物や景観を光というツールを活用し、新たな一面を引き出せる都市再生を行ったのだ。

In conclusion

徒歩圏内にすべてが詰まっている。歴史的景観の中に、トラムが走行するなど歴史な現代が上手く混在していた。旧市街は路地がはりめぐられおり、シクスエンシスが幾重だった。

フランス人は公共空間の使い方が上手である。多くの族性の人が広場や川べりでランチをしながら楽しむ。またフランス語の美術のまちといわれるように、ビストロが立ち並んでいた。通りにはテラスが並び、夜になったと皆ワインを飲みながら食事や会話を楽しむ。その空間は実に贅沢であった。日没後は、光の都市というだけあって、一味違うリヨンを感じることができた。フランスでは新規建設予算の1％を芸術予算としパブリックアートへの活用をしているように芸術・文化への意識が高いこと、またそれを国家として徹底している点が日本との相違点である。この経験を今後の研究活動に活かしたいと思う。最後に、海外渡航を支援して下さった方々に感謝いたします。ありがとうございました。

※光の計画とは Plan Lumiere のことである

Lyon, France — City of Illuminations

Lyon has been known as a city of illuminations and one of the favorite destinations for the tourists visiting France. The municipal government stipulates that all the illuminations must conform to the city's urban planning policy, under which the city office, architects and private enterprises have eagerly managed and developed a variety of illumination concepts. The positive use of artificial illumination shed lights, in the full sense of the words, from a new angle to the important tourism resources of the traditional architectures and landscapes.

In Lyon everything is within a walking distance. There were a number of restaurants and bistros where generations of people enjoyed the cheerful moment of eating. From my point of view, it was a very ‘rich’ way of spending time. On top of that, the city view changed dramatically after the sunset. The fantastic scenery explicitly told me that I was in the city of illuminations! Special thanks should be dedicated to those who supported me for the trip. (f.b.y.)

小林 由理
2007年 千葉県立富津高等学校卒業
2011年 美術大学建築都市デザイン学科卒業
2011年 日本大学工学部建築学専攻修士課程
Mail: vienna.classics@yahoo.co.jp

1 フルヴィエールの丘からリヨンを一望（夜）
2 世界遺産である旧市街におけるピストロ街
3 旧市街の通り
4 ベルセル広場からノートルダム・ド・フルヴィエール寺院を臨む
私は米国のグリーンインフラストラクチャ(GI)政策に関する基礎的な研究を、卒業研究を通して行ってきました。GIは低湿地などの働きを水文学的なアプローチで模倣するように管理された雨水管理アプローチであり、雨水の下水管への流出速度を減速し分散処理させるものです。米国では、これらのアプローチを従来のコンクリート主体のグレインフラの補完的、または代替的な手段として都市全体で雨水を総合的に管理しています。そこで今回、米国でGIを先導的に導入しているポートランド市とシアトル市の2都市を訪問し、現地のプロジェクトを視察することによってGIの理解を深めることを目的に渡航をしました。ポートランド市では、あらゆるエリアでその敷地の特性に応じた施設の設置をしていることが印象的でした。それによって様々な領域での雨水マネジメントの可能性を感じることことができました。シアトル市でのGIは低湿地を利用した施設が多く、ポートランド市と比較して土地に努め、より多くのプロジェクトを多く目にすることができました。また、地域と共同で行われた大規模なプロジェクトが印象的であり、公共空間の再発想をみることができます。米国でのこの視察を通じて日本ではまだ見られない施設や技術を見ることができ、両都市の雨の環境に対する先進的な取り組みを肌で感じることができました。この経験を活かし、今後日本でのGIの適用可能性について研究していきたいと思います。この度はこのような機会を与えて頂いたりありがとうございました。

Green infrastructure in Seattle and Portland, USA
The green infrastructure (GI) is a management of rainwater sewage through the hydrological application of what swamps do under the natural environment. One of the important functions of the swamp, in terms of hydrology, is to slow down the water flow that makes more dispersed water processing/treatment possible. I went to Portland and Seattle. What was impressive in Portland lay in the fact that various facilities were selectively used in accordance with the characteristics of the land. In Seattle, some GI projects are large-scale and collaboration between the public and private sectors. I would like to extend my gratitude for those giving me the opportunity. (f.b.y.)
North Europe
北欧4カ国——自然とともにある建築と
街中のデザイン・アートを巡る旅

それぞれの都市の魅力
コペンハーゲンはゆったりとして、みんな
な長期休暇を楽しんでいるような優雅な雰囲
気を持っていた。カラフルな小さな港「ニューハウゼン」、見る角度で印象が変わる「オペラ
ハウス」は水辺に反射して綺麗だった。私が
訪れた時期は、年に1度開催される「Design
Week」中で、街中にアーティストや学生の
作品が展示されていた。

オスロは山々と海に囲まれた中に存在する都
市で、今まで見未したことのない景色をもつ不思
議な都市であった。船のような外観をもつ「オ
ペラハウス」、中にいると、木材やガラスの
素材と、幾何学や球体など形状、そして白と
基調にした色が組み合わせて面白い空間がひ
ろがっていた。

ストックホルムは島々が連なってできた街
を、水辺空間の景色を楽しみながら橋を渡っ
て移動するのがとても気持ち良かった。他の
国よりも重厚で立派な近代建築が多く残って
いた。アスブルグの「森の墓地」は、真っ
すぐに伸びる石碑やその先にある礼拝堂が自
然の風景に見事に溶け込んでいて、静止で壮
大な場所だった。

ヘルシンキは1番「都会」な街で、広い車道
や大きなデパートが並んだ街並みは東京に近
いものがあった。『テンペリアウキオ教会』は、
外観は岩が積み重なってきた「かまくら」
で、中に入ると、岩の塊とその上にのせられ
たまるい壁根の隙間からたくさんの光が入り
込んできた。

アールトの作品は街の至る所で目にすることができた。アールトの『自邸』と『アトリエ』
では、彼の作品が生まれた場所を実際に目で
見て、自由に触れて、空間を体感でき、本当
に良い経験となった。

Visiting The Scandinavian Capitals
— Design Arts and Architecture Living
In Harmony with Nature

The capital of Denmark was quite colorful
due to the "Design Week". In Oslo, The Opera
House features a vessel-like exterior. When
stepping inside, the atmosphere was quite
unique thanks to the use of wood and glass
materials with geometrical design motives
and cheerful colors. In Stockholm, it was very
comfortable and refreshing to walk through
bridges while enjoying seeing the changing
scenes in the waterfront. In Helsinki, the great
works of Alvar Aalto were scattered around
the city. Among them, his "own residence"
and "atelier" were so impressive that I got an
additional motivation. (f.b.y.)

1 テンペリアウキオ教会・ヘルシンキ
2 Design Week・コペンハーゲン
3 森の墓地・ストックホルム
A Lesson Taught by German Cities with Half-timbered Houses

I have been interested in half-timbered houses in Germany especially because the German houses have withstood against the natural elements for longer periods of time than the Japanese counterpart. To find the answer, I visited Berlin, Goslar, Han Munden and Freiburg.

In terms of architecture, there were several commonalities in Goslar and Han Munden with the church at the center, traditional half-timbered houses and the burg surrounding the cities as a protection from the external danger. At the market in Freiburg, people enjoyed shopping and chatting with one another. Commuting time for the great majority of people is 30 minutes. The closer relationship between the city and its residents encourages the affection to the city where they live. When sipping coffee at a cafe in Grote Markt, the idea came up to me. (F.B.Y.)
伊東豊雄建築設計事務所を独立してから4年が経ちます。

学生時代の記憶を通ると、私が建築学科3年生の時にわたった伊東さんの特別講義のことを思い出します。代表作であるシルバーハートの設計プロセスを通じて、住まいを構成するあらゆる部位の意味を問い直し、再構築する手法について語られたことを記憶しています。例えば玄関とは何か、玄関扉とは何か、玄関扉の取手とは何か、というように徹底的に。当時は私にはその深い意味を汲み取る力はありませんでした。しかし何か、頭の中を直接嬉しい興奮するような刺激を受けた記憶だけは鮮明に残っています。今にして思えば、あの時の講義が自分の原点となっていたことに気付かされます。

所員としての日々

98年から所員となり、多くのプロジェクトに関わせていただきました。主な担当作品として、せんだいメディアテーク、Blurring Architecture 展、まつもと市民芸術館、仙台のバス停、毎日新聞の森市営斎場、新しいリアル展、Invitation Award のトリプフォーデザインなどが挙げられます。

所員としての日々は毎日が世界初という感覚に満ちていました。新人の頃は手際も悪く10日間も事務所に絡まったこともありましたが、どんなに困
難が続いても、自分の描く図面がやがて
全世界に発表され地球の裏側まで届くの
だと思うと自然に力が湧いて来ました。特に、初めて経験した現場となるせんだい
メディアアークは、実際に全てが世界
初の助成の連続でした。建築家が事務所
の事務でデザインを決める手法ではな
く、可能な限り多くの外部の専門家達を
集めて議論の場を拡げ、最初に大きな人
の頭をつくるとところから始めました。そ
の頭の中には常に社会化された言葉が自
由に飛び交い、そこから初めて具体的な
空間が浮かび上がるプロセスを経験しま
した。細部に至るまで全てが無数の議論
の頭から生まれた結果であり、時には
たった一つの室名だけでなく、その表記が本
当にメディアアークに相応しいのかどう
か議論になるほどの徹底ぶりでした。

このプロジェクトから学んだのは、図
面を描く仕事と同等かそれ以上に、多く
の専門家達の思考の頭の勢いを守り続け
ることが重要であるという事と、設計プ
ロセスそのものを社会化することが真に
関わる公共建築を生む原動力になると
いう事でした。

活気溢れる人の頭を重ねる空気は、
現場に限りず所内にも流れていました。
定期的に集まり、様々なテーマについて
語り合う場を設けていたこともその流れの
一つと言えます。具体的なテーマ設定や
参加メンバーはその時々で異なりましたが
、例えば「図面とは何か」「構造とは
何か」「透明性とは何か」というように、
建築の根本的な方を触れる内容につ
いて、伊東さんも含め何時間も費やし
ながら問題意識の共有化を繰り返してい
ました。

独立後の共同設計

2007年に事務所を独立したあとに、
北海道の洞爺湖を見下ろす週末住宅を伊
東さんと共同設計する機会に恵まれまし
た。事務所スタッフの一人としてではな
く、独立した建築家としての一歩の共
同作業はとても新鮮でした。

休日に野菜を栽培したり、友人達と食
事をしたりしながら過ごしたいという
クライアントの夢に応えるために、どの
ような造形原理が相応しいのかを追求し
ました。最終的に提案したのは、気流を
コントロールするユニットの柳のような形
状の壁面を用いた行き止まりのない空
間構成でした。

12 m角のコンクリートボックスの内
部は5枚の壁面によって形成され、カ
ラフルな飛び石のように点在するソファ
兼ベッドを囲い込んでいます。日中は
トップライトからの自然光に満たされた
光の筒となり、収穫した野菜を味わうダ
イニングや、湖の眺めを楽しむリビング
として機能し、夜には遮光カーテンをま
わして気の向くままどこでも眠れる自由

伊東さんと現場を歩く
な空間となっています。

建築設計を志す学生達へ

学生時代から事務所に在籍する10年間を通して私が学んできたことが、これから就職活動を始めようとする学生達にとって何かしら役に立てば幸いです。

参考までに、いわゆるアトリエ系事務所の求めめる人材イメージについて触れてもよろしいと思います。

これまでに多くの学生達のポートフォリオを見る機会がありました。最近はプレゼンテーションの最優先で、過去の作品を表面的に観察し、まとめ直すだけのものが増えているように感じています。

建築の問題が最終的に形の問題に集約されるということなく、概念上の建築で考えられない限り解けて形から生まれるのは出来ません。ですから本来はポートフォリオの中で、その形がどのような思考プロセスを経て生まれたのか、あるいは生まれるべきと考えているのかをも示すことが重要であると思われます。それが視点を欠いたものが多く見られました。

アトリエ系事務所では特に「（空間が生まれる瞬間の思考）」や「（頭の中の概念を図面化するための思考）」などのプロセスを重視しています。例えば「（空間が生まれる瞬間の思考）」とは、空間の造形原理解決することができ、他の全で説得力のある設計を持っていることがわかります。よってポートフォリオの中に、自分の考えたコンセプトを実現するために最も相応しい形（造形原理）が何なのかを表現すること、例えば四角いかのか、あるいは多面なのか曲面なのか、その根拠を説明することが絶対に必要となります。もしその根拠に触れずに個人的な趣味だけから生まれた形を提示した場合、それは落としいいであるかということが必要です。

とこたれ
1970年 東京都生まれ
1989年 茨城県立常陸高等学校卒業
1994年 伊東設計建築学科卒業／山下研究室
1997年 伊東設計建築学科修士
1998年-2006年 伊東設計建築設計事務所
2007年 横田恒男建築設計事務所設立
2009年 伊東設計建築学科非常勤講師
2010年 伊東設計建築デザイン学科客員研究員
e-mail：yokota@leole.com
http://www.leole.com
しまったら、それに対して相手をただ感謝を述べることしか出来ないので、評価自体が成り立ちません。批評が成立しない状態とは、お互いに議論を重ねることが出来ない状態を意味するわけではないでしょう、そのような学生の採用は厳しいでしょう。

自然界の造形原理

自然界の造形原理

一つのダイアグラムから
無数の造形原理が考えられる

ICHE
Letter

伊東事務所の設計プロセスにみられるような〈〈人の溪〉〉や〈〈所内ミーティング〉〉の様子などからも、貴重な時間を費やして根拠的な議論を重ね合える人材を求めていることが読み解けると思います。

そのような人の力を集めることによって初めて、現代人が心の奥底で根源的に求めている空間性について考察したり、それを新しい造形の原理と結び付けて提案したりすることが可能となるのだろうと思います。

このことは、私が伊東事務所で学んだ基本でもあります。

Working with Mr. Toyo Ito

I still remember very clearly the shock I got from Mr. Toyo Ito when I participated in his lecture in Kogakuin University during my junior days. Luckily enough, Mr. Ito hired me as an associate architect in his atelier in 1998. The most impressive experience was the Sendai Media Arc project because it was my first serious involvement in Mr. Ito's atelier and gave me a number of precious lessons. From the experience, I learned that 1) the promotion and maintenance of the intellectual swirl and 2) the socialization of the project to have a shared vision not only in our workshop but also with specialists in other professional fields were the locomotive of the successful creation of an excellent public architecture. Mr. Ito always encouraged us to speak out candidly and frankly to exchange ideas within the atelier.

I established the design office of my own in 2007 and had a pleasant opportunity to co-work with Mr. Ito for a weekend house project. If I can say anything to you, my juniors, I want to draw your attention to the works of your own. The exchange of the ideas generates positive swirls of opinions, from which a unique outcome will emerge.

(f.b.y.)
デザインを伝える

大学アドミニストレーション

これまで私は教員の傍ら、建築設計や、まちづくり、フィールドワークなど環境デザイン実務を通じ、他分野の専門家と数多く協働しました。分野・領域横断型の取り組み経験は、学長補佐としての業務に大いに役立っています。

本学には私の他に学部副主任担当の学長補佐1名がおり、学長、学長補佐2名、これに事務局長、次長を加えた5名で大学アドミニストレーション業務を進めています。所属する建築、環境デザイン学科の学生教育に加え、大学全般にわたる各専門分野の特徴やカリキュラム、卒業後の進路に関する情報を受験生、保護者、高校教員に伝える活動にも取り組んでいます。具体的な業務には、入試運営、オープンキャンパスや進学相談会などの学生募集イベント

しんかいしゅんいち
長岡造形大学 学長補佐・准教授
1966年 東京生まれ
1991年 工学院大学建築学科 卒業
1993年 東京大学大学院工学系研究科
建築学専攻修士課程 修了
1996年 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
博士後期課程 単位取得中
1997年 東京大学より博士（工学）の学位取得
2001年 長岡造形大学造形学部 助教授
2007年 長岡造形大学造形学部 准教授
2010年 長岡造形大学 学長補佐
Communicating the Design

At Kagakuin University, I studied under the late Professor Teiji Ito. After receiving a doctorate from University of Tokyo, currently I have taught at the Department of Architecture and Environmental Design, Nagaoka Institute of Design (NID) for about 15 years with the educational experience built up in two other universities. Inaugurated in 1994, the NID is the world-first university specializing in design studies. In my view, the three major items in architectural design of concept, idea and action plan are so integral to one another that none of them can exist without the others. (f.b.y.)
NICHE Letter

三姉妹の家

TDYリモデルスマイル作品コンテスト 审査員奨励賞作品

はじめに

私は、2009年に博士課程を満期退学して間もなく設計事務所を開設しました。大学では、初田研究室で都市史を研究し、建物と都市の接点について考えた機会も多く得ることができました。現在、谷口研究室の客員研究員として、講評会や合宿などに参加させてもらうことで、引き続き様々なことを学ばせていただいている。

平井 充

一級建築士事務所 Drawing notes

最高の仕事

独立して最初の仕事は木造住宅のリノベーションでした。それは、戦後もない頃に平屋で建てられ、その後、生活の変化に応じて増改築が進めてきました。そして、今回も家族のライフスタイルが大きく変化したため、それに合わせた住まい方を考えることになりました。

日本の住宅の平均寿命が26年といわれているな

A House for Three Sisters

My first work was to renovate an old wooden house of more than 60 years old, which was astonishing because the average life of Japanese residential houses is mere 26 years. Also surprising was the quality of the house. Though the reinforcement was required for the structural element, basic materials including roof tiles remained in reusable condition. One of the important objectives of the renovation was to let all the materials serve out their potential lives. As a result, the house still keeps its original shape while ensuring quality of life for the users. (f.b.y.)

新築当時

増改築（25年後）

平屋増築（45年後）

改築（59年後）

88 NICHE 2012 vol.35
かで、この住宅は60年近く住まれてきました。構造に補強を加えるところはありましたが、屋根瓦を含め基本的なマテリアルはまだ利用できることを判断できましたので、現状のボテンシャルを最大限に引き出せる、住宅ストックの有効活用の提案ができればと考えました。そのため、再利用できるものは可能な限り利用し、マテリアルの保有する命を全うさせようというのがこの計画の大きな方針となっています。

その結果、家のシルエットをそのまま継承することになり、街並の風景を残しつつ、新しい生活を仕掛けるような方法が生まれました。内部は、1階も2階も最大限に大きな空をつくりだしています。1階では、ワンルームに空間の間をつくることで多様な居場所を形成しています。プランの大きな変革によって、この家には三姉妹の寝室が残され、親父婦は別棟に寝室を移しています。南面の開口部を特徴付けているアーチは、コの字型の耐震壁によってできた奥行きを繋ぐことで、外へ向けられたアルコールを作り出しています。

外観は日常の延長であっても開口部から視野内には、ヴォリュームを割り貫いた洞窟のような空間が続いている、街並に不思議な変化をつくりだすことに成功しているのではないでしょうか。

おわりに

その他に、最近ではフィンランドに新しくつくる都市の実施コンペに提出しました。これは一次審査で上位に残っていますが、この原稿が出版される頃には結果がでているはずです。また、進行中の実施プロジェクトもあるので、そのうちみなさんにお知らせする場があると思います。

Sibbesborg コンペ提出案

ひらいみつる
1992年 北海道立札幌高等学校卒業
2004年 工学院大学建築学科2部 建築学科卒業 初田研究室
2006年 工学院大学大学院建築学専攻 建築学科修士第1期 初田研究室
2009年 工学院大学大学院建築学専攻 建築学科修士第2期 初田研究室
建築設計事務所、吉岡設計事務所（旧丸野県立設計事務所）を経て、東京工科専門学校で非常勤講師、京都市選（2004年～2011年）を行う傍ら、2009年に一級建築士事務所 Drawing notes を設立。現在、台東区研究室常務
研究員。
e-mail = drs_01@mac.com
倉田研究室
まちづくり学科

研究テーマ
倉田研究室の研究テーマは、大きな枠組みの中では都市計画・都市デザインに属します。その中でも都市デザインを中心に、建築、環境デザイン、都市開発、市民参加のまちづくりなどの研究を国際的な視野で行っています。現在学生は44名が所属しており、中心市街地の活性化手法、交通まちづくりの手法、その他にも都市景観形成に関する研究など幅広い研究をしています。「都市計画・都市デザイン」という分野には入っているものの、この様に様々な研究を学生が出しているのは倉田先生の知識、経験の広さ、深さがあってこそそのものです。

ゼミ活動
3年生はこのゼミ活動が初めての研究室活動になるので、都市デザインの基本を学ぶという趣旨で毎年西新宿地区のフィールドワークを行います。交通や建物用途、オープンスペース、環境などといったコンテックスを街から抽出し、街をどのように観察、分析していくかのプロセスを学んでいきます。修士1年生がサポート役としてその活動に入り、研究室内の交流にも役立っています。4年生と修士2年生は卒業論文や修士論文についてのゼミがメインで、同学生や先輩がどのような研究をしていくか参考にしながら切磋琢磨していきます。修士1年生は年ごとに多少変化していくのです。

合宿・イベント
研究室内では多くの活動、イベントが開かれます。夏には新しく3年生を迎え、合宿を行います。今までは長野県茅野市、静岡県掛川市、群馬県桐生市、栃木県勝沼市などを訪れ、歴史ある建築を見学したり、実際の街でフィールドワークを行い、

2011年夏合宿：山梨県榛名

西新宿にある公開空地

フィールドワークを行った中国鑫部の風景
ました。都市の魅力を発見し、その環境の抱える問題点や課題を理解するために、都市を自ら体験することが重要です。フィールドワーク、見学会を通じて、実際のまちづくりや都市づくりの現場を通じて都市の魅力を発見し、建築と都市との関係を理解するとともに、建築や都市の計画・設計手法を学ぶという都市デザインに必要な要素を研究室合宿を通じて経験する場です。もちろん、交流を深めるために夜は飲み会やピンゴ大会などのイベントもあります。

合宿以外でも、研究室対抗のソフトボール大会や、12月にはクリスマス会、1月には倉田先生の誕生日パーティー、3月には卒業パーティーなど、学ぶときには学び、遊ぶときには遊ぶ。倉田研究室は、様々な事が学べる研究室です。

Introduction to Professor
Kurata's Workshop
Department of Urban Design and Planning

The workshop led by Professor Naomichi Kurata deals with architectural and environmental design, urban development and grass-roots urban area planning and development from the international viewpoint. Thirty-four students in the workshop are busy with the programs including revitalization of the hollowed-out commercial centers, relationship between traffic and city planning and urban-scape design. The junior university students are mandated to be involved in urban area investigation and analysis. The seniors and the mastership second-grade students focus to their theses and design projects.

倉田直道
1947年、静岡県静岡市生まれ。早稲田大学建築学科卒、同大学院修了。カリフォルニア大学バークレー校大学院アーバンデザインプログラム修了。都市計画運営アトリエ、カリフォルニア大学都市地域展開研究所、HKS アーキエイジ（サンフランシスコ）などを経て、現在、工学院大学建築学術部教員、アーバン・ハウス都市研究研究所代表。
大学近況、研究室を訪ねて

鈴木研究室
建築学科

研究室の研究テーマはなんですか。具体的にはどのような活動を行っていますか？

鈴木研究室の研究テーマは、建築計画の分野に属します。その中でも、建築家具というテーマに焦点をあて、建築の複数の可変性や可動性、持続可能性などの研究を行っています。通常、建築とは不動産という言葉が示す通り、動かないものという考え方が一般的です。それに対して、建築の中に置かれる家具は可動性と機能性をもつ。この両者を一体的に考えることで、持ち運び可能な建築、あるいは建築のような空間性をあわせた家具という新しい視点が生まれます。これらを私たちは建築家具と呼びます。このように、都市内都市、建築ながら建築、プロダクトながらプロダクトといったカテゴライズを一旦解いて、それらを一体的に考えることで固定概念にとらわれない建築の新しい可能性を探っていきたいと考えています。

近年急速に社会が変化する中で、建築家にはより幅広い知識が求められます。テクノロジーの発展や情報化社会の進展、環境問題や外交問題、安全性に対する考え方の変化やコミュニケーションの変化等、こういった先の見えない社会では通り一辺倒ではない、柔軟で創造力に富んだ発想力が必要になってきます。そのため、プロダクトから建築、都市までを等価に扱いながら、建築に対する臨機応変で柔軟な考え方をもつことを大切にしています。

鈴木研究室の特徴として、まず1つ目に活動の多様さがあげられます。2月から3月にかけて山形の雪まつり参加、4月の東日本大震災のボランティア活動参加。5月のミラノ工科大学とのワークショップ、続けてミラノチームとの合同海外コンペティションへの応募。6月にはハウスメーカーと共同でスマートハウスの設計、7月からは産学連携プロジェクトの推進、8月には夏合宿と新3年生を中心に伝統工芸の職人と商品制作を行う伝統工芸リデザインプロジェクト始動。9月にはUIA 東京の会場設営。10月には新宿学生クリエイターズフェスタへの作品出展と修士1年を中心に日本インタシア学会での論文発表。11月には東京デザイナーズウィークへの作品出展。
それらが1年間の主な活動としてありました。2つ目の特色として、研究室の枠を超えた多くの繋がりがあります。ボランティアに参加した際は多くの協力団体や他の研究室生徒と共に活動し、ミラノ工科大学とのワークショップでは、谷口研究室、倉田研究室、木下研究室、山下でつらる研究室の生徒が参加しミラノ工科大学と組んだ国際コンペでは2等が1チームと佳作を2チームの合計3チームが賞に選ばれました。他にも、プロジェクト毎に企業や官公庁、メディア関係者など多くの協力を得て進めていきます。

学生にどんなことを期待していますか？
鈴木研究室での活動は多彩でどれも貴重な経験ばかりです。そして、これらの活動のほとんどがグループでの活動になります。そのため、自立性を持って学ぶ意欲がなくて誰かにまかせっきりのまま研究室での1年をおえてしまうことになりません。当研究室に来た学生には、自主性をもって何事にも果敢に挑戦する根気強さを持って欲しいです。社会に出れば、学生の頃のように好きなことだけをやるわけではない。一見華やかな仕事であってもそのほとんどが理想とはかけ離れた作業の連続でしょう。当研究室での活動は企業や職人などと進める実施プロジェクトが大半を占めます。当然相手は学生だからといって仕事に手を抜いたがらも仕事を許してしまいません。理想とは現実とのギャップに苦しみつつも大いでしょう。ですが、実作をつくる機会が多い分、作品が完成した時の感動には大きなものがあります。各々がそのうちの社会との距離感を図りながら自分のすすむ道を決めてくれればいいと思います。

Professor Suzuki's Workshop
One of the important subjects in our workshop is architectural planning. We attempt to find a breakthrough to the stereotype way of thinking by applying a unique concept of 'Architectural Furniture'. An architect should not only have creativity, commitment and technical knowledge but also she/he should be more flexible to adjust themselves to the changing environment and client's personal demands and social requirements. There is no easy way to reach the goal. But remember, the more you have struggled, the greater pleasure of completion you will feel. (f.b.y.)
阿部研究室
建築学科

大学近況、研究室を訪ねて

研究室の研究テーマはなんですか。
具体的にどのような研究を行っていますか？

阿部研究室では、「建物を長持ちさせるための研究」と「廃棄物・副産物を有効利用するための研究」をテーマにして、主として建築の構造材料であるコンクリートを対象として研究しております。

前者では、たとえばこの材料が凝結ガス、凍結、塩分といった環境に何十年耐えられるのかといった長期にわたる性状の予測に取り組んでおります。現在、社会的に住宅も長寿命化の方向に行きつつあり、そのための技術的な支障になると位置づけしております。

後者ですが、セメント、砂、石灰などのコンクリート材料は、わが国で消費している資源の半分近くを占める膨大な量になっており、一方、われわれや産業界が排出している廃棄物も膨大な量になっており、資源循環の観点から取り組んでおります。具体的には、火力発電、金属精錬などで生じる副産物を砂として用いる方策を検討しております。今回の震災廃棄物の問題もこの中で扱っております。

いくつかの研究、民間や公的な試験研究機関との連携の下で行われており、それに参加することは社会を知るよい機会となるでしょう。

研究室のイベントとしては、大学の行事で、ご自身で行った研究を発表する機会もございます。

学生にどんなことを期待していますか？

材料の研究室として学生に期待したいことは多くありますが、ここでは三つのことを述べてみます。一つ目は、建築は社会と非常に密接に結びつくているという意識を強く持ってほしいということです。特に材料に携わる研究室でわれわれが作った材料やその使い方を示す規定は、自分たちで使うということながらも、もしその材料が長く使うことができるとします。具体的な材料を通じて社会と結びついているということは、学生のうちにはほとんど意識できないと思いますが、使い方を間違えるときわめて大きな社会的問題、個人の資産価値や場合によっては生命の問題になることを十分認識していただければと思います。

二つ目は、材料の実験に興味を持ってほしいということです。実験を意識的に行えばその過程で多くのことを学ぶことができます。たとえば、コンクリートの試験体の破壊試験を行います。結果として出てくるのは圧縮強度という強さを表す数値だけです。そしてその数
Prof. Abe's laboratory introduction

In Abe's Laboratory, two research themes have been conducted for these years, the one is "Research for improving the durability of concrete building", and the other is "Research for effective usage of waste or by-product to aggregate for concrete". Some research subjects among them are carried out in cooperation with private or public research institutes, and to participate in it is a good opportunity for students to know the society.

The results of these researches are presented in several meetings, from Architectural Institute of Japan.

Many events, that is, Hachiouji science event and Suwa science event as the activities of university, are held and many students in Abe's labo participate in them. In addition, a two day's trip in summer, a mountain climbing to Takao in autumn, and some barbecues in Shofusha after a series of experiment are held.

The experiments in Abe's labo are very hard but it is expected that many things are obtained from them and the event activities.
びおプロダクト

半田雅俊　HANDA Masatoshi

建築家が手がける住宅は、世の中の住宅供給量のほんの一握りでしかない。建築家が設計する住宅は、10％以上の設計料をいただかないと断が合わないが、数百万円の設計料を払える施主は多くはない。良質なデザインと高い性能を求める顧客層に手の届く価格で供給できる建築家のデザインがシステム住宅を考えた。

「びおプロダクト」と名付けられたこのプロジェクトは、ある工務店グループに提供している住宅生産システムである。この住宅は、徹底したスケルトンインフィル工法である。周辺壁・屋根・基礎は、高い耐震性と断熱性能を持ち、室内には構造壁がない。間仕切りが可変なだけでなく、将来配管や配線も一新し、さらに断熱性能を上げることも考慮している。断熱性能向上により住宅の冬対策はかなり進んできた。これからの住宅の大切なのは、夏対策である。「無暖房」住宅は可能であるが、「無冷房」住宅は断熱性能だけでは実現できない。「びおプロダクト」では、効率の良い遮熱と排熱の方法にも取り組んでいる。世代を超えて利用してもらうための長い住宅を実現するには、施主の意見を重用視し過ぎても目的を達成しない。経験の少ない素人の世にも関わるのではなく専門家として将来を見据えた提案をしてゆく必要がある。

高性能・低価格・世代を超えて住める住まい

「びおプロダクト」は、高性能でありながらお手ごろ価格で提供する。その基証は標準化された設計で、水回りや階段などの部品を組み合わせてつくるから。従来の注文住宅は、敷地や家族構成に合わせて1軒ごとに回答を探すので、膨大な設計時間と施工人件費を消費している。本造住宅の建設コストは材料費より人件費の方が多い。設計と現場でかかる時間を合理化することによって質を向上させつつコストを下げる事は実現できる。

「びおプロダクト」は、
1. 高性能なBox(スケルトン)を選び
2. 室内構築（インフィル）を選び
3. 戸外生活を楽しむ外部の仕掛けを組み合わせて環境に合った住まいを実現する。

高性能で居心地の良い住まいを手頃な価格で提供するために、プロダクト化を図っている。

家族構成や設備は時代と共に変化する。「びおプロダクト」は、構造（スケルトン）は、そのまま間仕切りや設備（インフィル）をもとに取り替えることができ、世代の変化に対応できる環境を造り上げる住まいである。
1 びおBoxを選ぶ

びおプロダクトBOXには、
4つの大きさがあります。
1. 敷地の大きさ、
2. 居住者人数、
3. 予算などに合わせて、
選ぶことができます。

2 びおBoxの性能と特徴

○耐震等級は最高ランクの等級3
建築基準法の1.5倍の強度を確保
○省エネ等級4
（1ランク上の地域で4等級）
※Ⅳ地域の場合はQ値2.4以下

内部の間仕切壁を構造壁から開放
し、建設時の合理性と自由で可変性の
ある平面計画を実現。
吹き抜けのある住まい

都市部の住宅地では、冬は隣家の影で1階に日が差さないこともままあります。居間の上部に吹き抜けを設けることで陽当り、明るさ、戸外とのつながりを確保し、のびのびとした広がり感と気持ちよい空間をつくります。

平面を選ぶ

外回りを選ぶ
日射遮蔽
シミュレーションによる日影・陽射しの検討

夏
夏の日射遮蔽策を行い自然室温で快適に暮らせる環境を築ける。
東西面は格子や緑のカーテン等で横からの陽射しを遮る。
タープ等を張り日影を創る事で日中も戸外生活を楽しむ事が可能となる。

冬
南面の大きな開口部からは吹き抜けを通じて建物の奥まで冬の陽射しが張り込む。

Bio Product

"Bio Product", a collaborative work with a building contractor group, is aimed at offering high-performance residences at a competitive price for wider generations of people.

Based on so-called "Skeleton & Infill" method, the "Bio Product" project attempts to realize tough, comfortable and cost-efficient houses through;

1) The selection of high-performance "Box (skeleton)",
2) The selection of floor plan (infill), and
3) The combination between comfortable interior and cheerful outdoor lives.

The "Bio Product" ensures flexibility. For example, it is possible to completely alter the interior configuration and facilities while perfectly maintaining the basic structure. In so doing, the product offers changeability to cope with the change in generation. The sequence of the construction is as follows;

1) Selecting the "Box."
2) Ensuring the performance required for modern houses.
3 & 4) Selecting the interior configuration.
5) Selecting outer space design.
6) Shading for sizzling summer.

Ultimately, the "Bio Product" targets naturally-ventilated, non-air-conditioned atmosphere throughout the year. (f.b.y.)

はんたまさとし
1968年 静岡県 私立静岡学園高等学校卒業
1973年 工学院大学建築学科建築学コース卒業
建築家 NAVY建築会社を経て
1981年〜1983年 Frank Lloyd Wrightの建築学校クリアセン治学
1983年 半田建築設計事務所開設 現在に至る
e-mail = hands@mbd.nifty.com
「最初の中部建築賞」

私は15年前ゼネコン設計部を退社し、ささやかな設計事務所を立ち上げました。

周辺環境と建物の融合性をテーマに設計活動を行う中、数年後金額の軽井沢の別荘の仕事が舞い込みました。この別荘計画を踏み台に躍起したいものと、基本設計に2年ほどつぎ込み、出来上がった別荘が「落葉松山荘」（写真参照）でした。結果、新建築「住宅特集」やイタリアの建築雑誌「casaD」など外国のメディアにも多数掲載されました。第24回「INAXデザインコンクール」にも入賞し、第34回「中部建築賞」も受賞致しました。「落葉松山荘」では軽井沢の豊かな周辺環境をいかに建物に取り込むかをテーマに、開放的で風通しの良い、印象深い別荘が出来上がったと考えています。

「落葉松山荘」以降、特に軽井沢の別荘の設計依頼が増え、現在までに18件の別荘を手がける事になりました。そのいった状況のもと、今回の「Forest bath」の共同設計者である、名城大の生田京子准教授との作業も始まりました。この敷地の持ち主であり、発注者でもある彼女が建築家である事からかなり思い切った計画が可能であり、今まで経験していない新しい空間作りを模索しているうちに「Forest bath」が浮かび上がらせてきました。
「Forest bath」の計画について

この計画は「矩形に三角形平面をはめ込む」という操作に始まり、斜め方向へ空間が抜けていく開口を得る事になった、森の中の別荘です。

空間作りの目標は、何か特別なことをするというよりも、おもいおもいに森のなかに身をさらし、木や木洩れ日をぼんやりと読めて過ごすような夏の別荘にしたいと、ほかに考えていました。

敷地は平坦なため、屋地のように特定の眺望が開けることがなく、10 m以上に育った松が美しい環境にあり、その枝は低いところにはなく、6 mくらい上の枝が始まっており、その高さは水平方向を見る開口ではつかまえることができる状況にありました。

別荘計画の常として、2階リビングで木々を間近に見る構成は考えられますが、ここでは2階も松の縁の高さには到達できないと判断し、1階に全ての室を開る構成で、自然を豊かに受け入れる方法を検討する事になりました。

最終的には水平方向に視線を向けるのではなく、斜め上・斜め下に視線が向かう構成が良いのではないかと判断致しました。また、敷地周辺は、他の別荘との間隔が意外に近く、それらとの直接的な視線のやり取りをするだけ避ける……。その聞き合いの中、逆三角形の「下では閉じながら上に向かって開く」というかたちが選ばれました。

この逆三角形により、木々の枝振りが、上に向かって伸びやかにしていく様子を妨げることなく内側まで込めることが可能となりました。三角形に穿たれた中央の部屋には、高い位置から裏の陰が映り込み、それが時間と共に刻々と変化します。

自然の表情は、白いキャンバスの上に木陰・光といったかたちで映し出されし
れ、時と季節の移ろいを感じる事が出来ます。中庭において、自然との距離感は場所の取り方で調節され、奥行きと共にフィルターのかかったような空間体験を楽しむ事も可能です。竣工後の経過とともに、季節や日差し、時刻など環境の様々な表情によって、異なった居場所が見いだされることが期待しました。

「Forest bath」の実現にむけて

今回の設計においてもっとも重要なのは、コンセプトが空間の骨格そのもののことであった。無駄を省いたビュアな空間を作ることで、建築空間と自然を作り合わせることができる、新しい空間体験が生まれると考えました。

まず、ディテールは徹底的に消すことで空間構成を浮かび上がらせることに成功しています。特に開口部は自然と建物の関係を明確に浮かび上がらせるために重要なポイントでした。

コスト的には木造をしたいところでした。しかし、場所を切り取る壁・屋根は極力薄くしたい、余計な柱を空間に落としたい、お金もかけられない、建築事務所と幾度となく議論が行われ軽やかな空間を作るように適した鉄骨造することになりました。

純粋な空間を生み出すのは合理的な構造を目指すことが最も重要であり、意匠だけでなく構造的にも同じようにムダを省いていく作業が必要でした。

屋根面にしっかり水平剛性を持たせそれぞれの角度に振れた構造壁に力を伝えること、勾配の大きい屋根面の剛性を高めることで大開口も可能となりました。

H250 の梁で 10m の開口も柱を中間で落とすことなく、自然を切り取るような開口を実現させています。

「二度目の中部建築賞」

計画から3年。ようやく昨年の夏に竣工を迎えることが出来ました。実現には困難な問題が山積みで軽井沢町の景観条例に合致しなければならず、予算との整合を含め、構造方式や開口部の納まりなど、それらを解きほぐすのに瓷沼宏記の七転八倒の苦労を重ね、尽力したのは言うまでもありません。結果、再び新建築「住宅特集」に掲載され、第32回「INAXデザインコンクール」にて銅賞を獲得し、第43回「中部建築賞」も受賞致しました。

今後も建築に純粋に向き合い、新しい空間を模索していきたいと思います。
Forest Bath

Luckily enough my first work in Karuizawa, the most famous and luxurious summer resort in Japan, "Matsuyama Villa: A Villa of Falling Leaves" won "Chubu Architectural Award", which caused a pump-priming effect and our design office has been involved in 18 resort villa projects in the area since then.

"Forest Bath" bonded us with Ms. Kyoko Ikuta, Associate Professor of Meijo University. She is an architect and the owner of the land used for the project. The basic plan seems to be quite simple; a combination between a trapezoid and a triangle.

Our design approach was to deduct the subordinate element as many as possible, rather than adding the decorations and fringes in order to underline the purist spatial configuration.

The elaborate structural design/ engineering analysis paved the way for the simple, less-expensive yet strong steel beam structure, which in turn made it possible to eliminate the structural interior columns and thus ensure a 10-meter-wide non-obstructive opening to the triangular courtyard.

It was the second-time luck that the project received 'the 43rd Chubu Architectural Award'. (I.b.y.)
重なりがつくる空間

StudioGreenBlue
小島光晴＋小林亜 KOJIMA Mitsuharu + KOBAYASHI Wataru

明るさを引き延ばす

クライアントの要望は「家族の気配が分かるワンルーム的な空間」および「分譲地の特性である同時期に集まる若い世代家族との触れ合いやすい環境」であった。敷地は、8つに分譲された土地の中央に位置し、行き止まりの道路に接している。分譲地の行き止まりの道路は、各住戸の共有の広場として使われ、情報交換や子供たちの遊び場となる。しかし、このような広場的道路上に対して分譲地の家の付近は明るさした印象となることが多いように思う。そのため、私たちは明るい存在感のある家を設計することを考えた。それは街に聞き、同時に街を明る
くする事でもあった。まず、敷地が狭すぎる道路いっぱいに子供たちが遊べる広場をつくり、三輪車でも容易に入れられるようにした。そして、その広場を昼夜光に明るい印象とするために綺麗な大きな窓を設けた。次に、私たちは敷地を超えて、他の家族が集まる広場の道路まで、明るい雰囲気を引き延ばすことを考えた。しかし、この家を広場の道路とつながりを強めるには、「道路からの距離」も、「室内での距離」も、物理的な距離が近いと感じた。そこで、霧の中で感じる「距離」のように、距離感を引き延ばすことを考えた。それは、もとのイメージに別のイメージを重ね足していくこと、もとのイメージを柔らかく消し、新たに距離感をつくることである。具体的には、「もとのイメージ」を「ソファのあるリビング」だとすると、そこに「壁の配置」や「壁の高さ」、「壁の種類」、「床の高低差」を利用し、「もとのイメージ」に「それらのイメージ」を重ね足していくことである。そしてさらに奥にある個室は、有孔板を数枚重ね足し、全体的に「もとのイメージ」を消していくことで、より距離感をつくるようにした。距離感を考えるときに、「街との距離感」と「室内での距離感」には違いがあると感じ、キリの密度を変えている。

「街との距離感」では「粗」のキリとし、視線のつながりを強めながらも居場所をつくった。「室内での距離感」では「密」のキリとし、視線のつながりを弱めながらもワンルーム的な空間とし、温換環境や通風を考慮している。このように視覚を遮りながら明るさを伝えていくことで、分譲地での新しい距離感をつくり、8つの分譲地を含んだ敷地の少しソトまで、明るい存在感をもって住むことができる家となった。
重なりがつくる空間

重なった有孔板は水の分子が濃度をつくり出すように、室内に霧をつくり出す。幾重にも重なる有孔板を通る光は、見る角度によって複雑に変化し、キラキラと輝き、壁や床や天井に細密で柔らかい光の粒を落とす空間となる。

役割と開口率の異なる壁

この家には、「役割と開口率の異なる壁」がある。その壁を道路から個室までの連なりの中に重なるように配置し、明るさを伝えながら距離感をつくり出している。その壁は、「立つと近くになり、座ると遠くなる」、「あるところでは見え、あるところでは見えない」といったように、生活を思い浮かべながら相対する関係で決めている。熱を反射するアルミの壁、風を通す有孔板の壁、光を強く反射する白い壁、像を反射させる鏡、透過と投影を表面に重ねるガラス、意識的な壁をつくる床の仕上げや高低差。そして、有孔板は重なることで表情を変える壁になる。それは照度の差により、より複雑になる。これらの重なりによって、「見える…ぼんやり見える…まったく見えない」とシームレスに見え方が変わり、同時に距離感も更新されていく。
Space Creation by Layers

At the first meeting, the client family's requirements were very clear. They requested us to create a "studio-like" large space where each of the family members would sense the others' and a "communication platform with the neighbors."

The premise was one of the eight subdivision lots. In the most cases, a house in such an environment tends to be closed and isolated from the surrounding to mainly ensure privacy.

Our approach was opposite. As shown in the picture, the house features an open space to the access road. Kids play together there. To protect the privacy and, at the same time, to ensure the spatial connection to the outside, we came up with an interesting solution. The installation of the cross-drilled lining walls causes fog-like concealing effect. The density depends on the number of the walls in-between the indoor and out-door. The more the layered walls are, the more difficult to see outside. The "layer effect" becomes stronger when seated than standing up, which is enhanced by the positive use of aluminum wall, solid white wall and mirrors. From the inside, the "density" changes seamlessly from 'clearly visible to invisible via vaguously visible'. (f.b.y.)
道の駅尾花沢
花笠の里「ねまる」
（平成19年照明学会照明普及賞・優秀施設賞）
香川 浩 KAGAWA Hiroshi

東北地方を縦断する高規格道路（尾花沢新庄道路）と、並行する国道13号線の双方からの利用を考えた道の駅である。
建設地の山形県尾花沢市は「日本三雪」と称される豪雪地帯で、雪とともにある生活は容易ではない。一方、全国一のスイカの産地として知られる農業地域である。こうした変化の激しい風土が、この地域の個性といえる。

日常の風景として
本計画は、道の駅に求められる地域の顔として、「収穫期のバザールのような賑わい」と「雪中に佇む風景」をつくることを目指している。
大庇の下、PCa 材による約70mの列柱廊は、地場産品を販売するバザールとなり、さらに前面の駐車場も活用したイベント時には、舞台の背景となる。冬期間、建物外周は利用できないが、帯雪壁のフラット屋根に積もった雪が浮き上がったように見え、建物の背景にある鉄道線や、遠くに望む雪峰月山、葉山と一体となった風景をつくる。

オープンエンドな建築へ
この建築は、かつてこの地域に住んでいた、ローカル線の駅舎のようにも感じられるだろう。そのプラットフォーム上で、季節に応じた活動が盛んにされ、地域の顔となる。その風土によって、建築がふくらんだり溶けたりする生命力のようものが生まれる。このような、エンドを規定しないデザインを、これからもやってみたいと考えています。
木材の活用

営農地帯であり、大正期の木造建築群で知られる銀山温泉を有する尾花沢市のイメージとして、木質空間が求められた。一方、冬期の積雪にも配慮しながら構造・素材を選択し、「床と腰壁の木部〜壁の金属とコンクリート〜屋根を構成する木構造」の三層構成により建築の個性がつくられている。主要居室の床はすべてナラフローリング、腰壁は地場産の無垢杉板を用い、あたたかい質感の内部空間となっている。外部は耐候性、メンテナンス性を配慮しガルバリウム鋼板とした。屋根の木架構は大断面集成材と2x12材を利用した薄板構造で、夏期は穏やかで涼しげな風情を、冬期は積雪によってプロポーションが変化し力強い姿を示すことができる。
照明デザイン

建物全面の列柱廊を構成する PCa 柱にそれぞれアッパーライトを配置することでリズム感のあるファサード構成と白い軒天井を引き立て、木造屋根が浮き上がったような効果を狙った。内部空間はコードペンダントを主に用い、高めの天井（約 4.5m）に光体が浮遊しているような楽しさを演出した。また、駐車場部分の計画にあたって、管理者である国土交通省と協議し、建物自体を照明器具として捉えることで、駐車場内の照明柱の配置・数量を最小限として、合理的かつ分かりやすい照明計画とした。

Michi-no-Eki Obanazawa
Hanagasa-no-Sato "Nemaru"

(Received Good Lighting Award 2008 and Excellent Facility Award, The Illuminating Engineering institute of Japan)

Michi-no-Eki, literally translated as "Roadside Station", is located in Ohahazawa City, Yamagata Prefecture, known for heavy snowfall during the winter. The 70-meter-long colonnaded corridor serves not only as a bazaar where the local products are sold but also as a backdrop of entertainment events, which would be held the parking lots in front.

Michi-no-Eki features a three-layered structure comprised of "wood floors and window backs", "metal and concrete walls" and "large wooden roof". Each of the outer columns has upward-facing illuminations at the top, providing a photic rhythm at night when the gigantic roof looks like being lifted up. The pendant lamps hang from a relatively high ceiling (4.5m), with which the visitor may feel a plenty of light balls afloat.

About the structural engineering, the precast concrete (PCa) columns are like cantilevers supported at the bottom. The entire building was designed with the presumption of the maximum snowfall of two meters that results in 30N/cm² maximum unit load application.

(f.b.y.)
構造システム

建物の屋根架構は、二対の集成材（2本×120×550）により9.5mスパンを掛け渡し、このメインの大梁がコリドールまで連続して4mのキャンティレバーを支えている。この大屋根を支えるPCa柱を3m間隔に並べ、頂部から4本の木質系柱に切りかえる。PCaの柱は地上からの片持ちとして水平力に耐え平面計画に自由度を与えている。また、上部の木質系の柱は斜めに枝分かれをしているため鉛直荷重とともに水平力も伝達できる。壁は純粋に仕上げとして作られ、表層方法が自由となり、将来の改修もしやすくなる。施工時には敷地に余裕があるため、架構を構成するユニットを地組みにしてから建て方をすることにより効率化を図っている。

また、多雪地域として注意を払う必要があり、水平な屋根面に雪を積み上げる状況が想定される。垂直最深積雪量は2m、単位荷重30N/cmとして設計にあたった。

かかわひろし
1967年 東京生まれ
1986年 名古屋工業高等学校卒業
1991年 名古屋工業大学建築学科卒業
2002年 ダイハツ工業㈱
1994年 名古屋工業大学大学院修士課程修了
1994-1998年 中村総合計画事務所
1998-2002年 東北芸術工科大学
2002年 スタジオ香川

NICHÉ Gallery

NICHE 2012 vol.35 111
建築学科特別専任教授
金箱温春

かねばところしる
1971年茨城県立水戸第一高等学校卒業
1975年東京工業大学工学部建築学科卒業
1977年東京工業大学大学院工学研究科修士課程修了
1977年横山建築構造設計事務所入社
1992年金箱構造設計事務所設立
2008年東京工業大学特任教授
2011年（社）日本建築構造技術者協会会長

本年4月より特別専任教授として着任いたします。構造設計を35年間行ってきたおり、さまざまな建築家と魅力的な建築を作る機会を持ってきました。そのかたわら、いくつかの大学において構造計画の講義や設計製図の指導を行ってきています。工学院大学とは、2000年〜2004年に行勤務講師として構造計画の講義を行い、また、八王子キャンパスに建設中の、総合教育棟の構造設計を担当するなど深い関わりがあります。着任後は、構造設計の役割・魅力・考え方を、構造専攻の学生だけでなく、建築を目指す多くの学生の皆さんに伝えたいと考えます。今後も構造設計の実務を続けるながら教育に携わっていきますので、よろしくお願いします。

It is my honor to teach in Kogakuin University as special-appointment professor as from coming April. I have specialized in structural engineering in my professional career, during which I have worked with a number of great architects.

I commit myself to delivering what I have learned from my experiences to all the students not only for those interested in structural studies but also other areas.

建築デザイン学科特任助教
横田泰子

よこたたけこ
1996年 ACT 環境計画
1999年 上部幾建築都市設計事務所
2002年 山本・堤アーキテクツ
2009年 ヘルム
出身高校 奈良県立橿原平陵高等学校

2011年11月より建築学部建築デザイン学科の特任助教に就任しました横田泰子です。大学卒業後は設計事務所で働き、大学や病院など、いろいろな仕事に携わる機会に恵まれました。

私のポジションは9階の建築設計準備室を拠点として、設計室の管理や学生の皆さんとの日々の設計活動をサポートするために今回新設されました。長い間設計授業を支えていた今井さんの役割を引き継ぎつつ、さらに2012年度からは設計授業も担当することになります。

今までの経験を活かして設計や授業関係の情報を提供したり、24〜26階建築フロアとの連携を図り、新しい設計室のサポート体制をつくれていくつもりです。よろしくお願いします。

I joined the Department of Architectural Design as special-appointment professor in November 2011. I am so lucky to be involved in a wide variety of projects ranging from personal houses to university buildings and hospitals.

Basically I work at the anteroom for design workshop on the 9th floor, which was set up to support the student activities as well as ensure smoother management of the workshop.

Personally, I am excited for my teaching opportunity starting from the academic year of 2012, which begins in April.
しおたあきひろ
1974年 東京都立豊島高等学校卒業
1979年 東京大学農学部農業生物学科卒業
博士（農学）
1982年 ハーバード大学デザイン大学院
ランドスケープアーキテクチャードラゴン
修士課程修了
1982年 SWA Group (Boston, USA)
1988年 株式会社ウィークエンド代表取締役
2002年 東京大学農学部農業生物学専攻
非常勤講師
2003年-2010年 早稲田大学理工学部建築学科非常勤講師
2007年-2011年 Kenzo Estate Winery COO & President

外部環境と人間をつなぐ
この4月より、建築学部まちづくり学科の教授に就任することになりました下田明宏です。専門はランドスケープデザインです。これまで約30年間、日本を中心に中国、南東アジア、アメリカで、多くのランドスケープデザインを手がけ

て参りました。
大規模な捉え方が、建築本来の役割が、外部環境と人間を「隔てる」ものだとすると、ランドスケープは、外部環境と人間を「つなぐ」ものだということ

できます。従って、地域有機の自然や歴史、風土を生かしたランドスケープデザインこそ、国内外から認められる付加価値の高いランドスケープデザインであ

ると考えています。また、現代の日本には、東日本大震災被災地の復興を始めとし、地球温暖化への対応や生物多様性的保全など、都市計画やまちづくりの分野

で対応すべき問題が山積していますが、これらの問題の解決にも、ランドスケープデザインが果たすべき役割は大きいと


卒業生(校友会会員)の求職・転職をサポートします！
地域の特性を活かし、Heartly Network（心を込め手伝い）を広げてゆきます。

校友会では2007年から求職・転職を希望している卒業生に対してサポートする事業を開始し、建築士資格取得教育で40年以上の実績を持つ日建学院が母体の、

建設・土木・不動産系に特化した実績ある職業紹介専門会社「ニッケン・キャリア・ステーション」を提携しました。

活動ネットワークを広げるチャンスです。是非、この制度をご利用下さい！

■ 登録希望者は直接「ニッケン・キャリア・ステーション」にお申し込み下さい。

「ニッケン・キャリア・ステーション」への求職登録は電話でくばメールで直接連絡して下さい。窓口の担当者から今後の流れをご説明致します。東京・大阪・

岡山の拠点にて登録して頂きますが、その他の方にについても相談できます。

・ 登録から仕事の紹介まで全て無料です。
・ 個人情報などは厳守されます。

NICHE 2012 vol.35 | 113
2011年度
卒業設計・卒業論文・修士設計・博士論文題目

赤木研究室

部

部

部

修士課程

東研究室

修士課程

阿部研究室

学部名

学部名

学部名

学部名

学部名

学部名

学部名

学部名

学部名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名

学生名
大橋研究室

1部 建築

2部 建築

修士課程

小野里研究室

1部 建築

2部 建築

修士課程

木下研究室

1部 建築

2部 建築

修士課程

倉田研究室

1部 建築

修士課程

後藤研究室

1部 建築

修士課程

近藤研究室

1部 建築

修士課程

澤岡研究室

1部 建築

修士課程

鈴木研究室

1部 建築

谷口研究室

1部 建築

2部 建築

修士課程

田村研究室

1部 建築

修士課程

NICHIE 2012 vol.35 117
長瀬研究室
長瀬 学：研究科：医学・薬学系研究科

中島（島）研究室
中島 学：研究科：医学・薬学系研究科

中島（島）研究室
中島 学：研究科：医学・薬学系研究科

野澤研究室
野澤 学：研究科：医学・薬学系研究科

藤木研究室
藤木 学：研究科：医学・薬学系研究科

西森研究室
西森 学：研究科：医学・薬学系研究科

久田研究室
久田 学：研究科：医学・薬学系研究科
### 藤森研究室

<table>
<thead>
<tr>
<th>学部学科</th>
<th>氏名</th>
<th>研究領域</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>工学部</td>
<td>外部</td>
<td>導入研究</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 宮澤研究室

<table>
<thead>
<tr>
<th>学部学科</th>
<th>氏名</th>
<th>研究領域</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>工学部</td>
<td>外部</td>
<td>導入研究</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 村上研究室

<table>
<thead>
<tr>
<th>学部学科</th>
<th>氏名</th>
<th>研究領域</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>工学部</td>
<td>外部</td>
<td>導入研究</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 吉田研究室

<table>
<thead>
<tr>
<th>学部学科</th>
<th>氏名</th>
<th>研究領域</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>工学部</td>
<td>外部</td>
<td>導入研究</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 安原研究室

<table>
<thead>
<tr>
<th>学部学科</th>
<th>氏名</th>
<th>研究領域</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>工学部</td>
<td>外部</td>
<td>導入研究</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 山下研究室

<table>
<thead>
<tr>
<th>学部学科</th>
<th>氏名</th>
<th>研究領域</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>工学部</td>
<td>外部</td>
<td>導入研究</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 安原研究室

<table>
<thead>
<tr>
<th>学部学科</th>
<th>氏名</th>
<th>研究領域</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>工学部</td>
<td>外部</td>
<td>導入研究</td>
</tr>
</tbody>
</table>
転職力を上げる
あなたの転職を成功に導きます
確かなコンサルティングと親身なサポート

建設系職業紹介・人材派遣のエキスパート
http://nikkencs.co.jp
株式会社 ニッケン・キャリア・ステーション ☎ 0120-810-298 / info@nikkencs.co.jp

MUTOH
設計現場の即戦力となる人材育成には、優れた教材を使用したい。
そんな声に応えるのは、やっぱりMUTOHです。
あらゆる設計現場で、高い信頼性と
納入実績を誇るMUTOHの設計製図ツールは、
教育の現場でも活躍してくれます。

LINER BOARD
UM-09NK
場所を選ばず高い精度と操作性が得られる
コンパクトな平行定規、ライナーボード。
耐久性に優れ快適な操作性を提供する
シンクロベルト方式を採用した本格派。
A1サイズまでの作図に対応。図面への
固定は、付属のドラフティングプレートで
ワンタッチ。しかも軽量・コンパクトです。
簡単に持ち運びできますので、思いつい
tたらそこがワークスペース。アイデアを生
み出す頻発の片腕です。

株式会社 ムトー エンジニアリング 東京都世田谷区池尻3-1-3 ☎ 154-8560 TEL(03)6758-7130 FAX(03)6758-7139

NICHE 2012 vol.35
街に力を、
人に笑顔を。

さまざまな思いを乗せて
今日も列車は走る。
駅は人々を優しく迎え入れ、街へといざなう。

この国の未来のために、建築は何ができるのだろう。

街に力を、人に笑顔を。
私たちは建築の力を信じて
駅から広がる活力ある街づくりに取り組んでいます。

空間と環境の総合クリエイター
株式会社 ジェイアール東日本建築設計事務所
〒151-0053
東京都渋谷区代々木2-2-6 JRE新宿ビル
TEL 03-3771-3381

http://www.jred.co.jp
代表取締役社長 杉村 貞夫
（昭和65年卒業）
安全は空気のように大切です

毎日の生活のなかで、気づかないけれど大切なものが空気や水であるように、火災などの災害から住宅環境や都市環境を守るのが防災機器。
能美防災は、防災システムの研究開発から機器の生産、施工、メンテナンスサービスまで、一貫した責任体制で、安全な生活空間を構築しています。

NOHMI 能美防災株式会社
本社／〒102-8277 東京都千代田区九段南4-7-3 ☎(03)3265-0211
URL http://www.nohmi.co.jp/
自然と自然素材を活かした木の家づくり

深深軒は夏の日差しをカット
冬は暖をどまに差し込む

柱梁を見せる真壁

開閉式の床下換気口
冬は暖を寄せて床下の温度を上げる

株式会社 結設計室
代表取締役 山谷一

〒192-0041 東京都八王子市中野上町4-4-15
TEL:042-622-4715
FAX:042-622-4714
URL:http://www.yuisetukeisitu.com
編集後記

2011年3月初旬、NICHEのグラビアを含む入稿をして、後は卒業式に向け合う様子に納品手配も完了していたところ、突然地震が発生しました。携帯電話の通話記録に緊迫した様子が残っています。3月11日携帯15:49「岩手の宮古で車が沢山流されています。町の中、流れて流れている。仙台空港に亀裂発生。新幹線、メトロ運転見合わせ」15:53「電話が通じなくなっている」更には福島の原子力発電所の被災により、福島県では大変な混乱が生じました。年未で、12月17日朝日新聞朝刊にて野田佳彦首相が「原発事故収束を宣言」していますが、原発事故から9ヶ月後にとっても福島県の15万人が避難生活をしています。名称も「東日本大震災」と名付けられて、歴史に記録されます。

学識の特徴企画は、工学院大学主催の「立ち上げるための住まい」です。関西の名古屋市の長澤先生が述べられています。「災害から立ちあがるために、人は帰るべき住まいを必要とします。こうした復興支援、そして今後の仮設住宅、再興住宅への提案などを、新宿区のアトリウムを使ってダイナミックに展示いたします。」

一方、本学の「都心型超高层大学」の工事を着手以来、従来に四半世紀が過ぎ、直接関わった工学院大学の関係者、伊藤博士、高山英丈、北原、松本正義の各先生は既に他界されました。2010年11月第1回ホームカミングデーにて「超高层キャンパス・再開発計画」の講演を谷口信彦教授が行いました。当時、再開発計画の見直しで大混乱の状況にあって、若い谷口先生が試行錯誤しながら解決策を模索し健闘し、床面積の増床をはじめ、アトリウム・ファルコンタラブラなど、多数の空間改善と修正をしています。従来の建築用紙で、その唯一の生ぎ詰めに、工学院大学再開発の秘話をご覧たいと思います。

今年はレイアウトデザインと印刷の一連の業務を、（株）ATELIER OPAに依頼しました。原をパララータとしてみてことを感想は如何ですか？今年度も編集スタッフをはじめ多くの方々にご協力を賜りました。執筆いただいた卒業生、在校生。教職員の皆様、工学院出版されました各企業や、印刷デザイン会社のスタッフの方々、そして、数多くの関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。（文責：大場浩博）

NICHE 表紙デザインコンペ
作品タイトル「DREAM BOX」
受賞者 加藤直樹（谷口研究室）

工学院大学にはたくさんの夢が詰まっています。
色々なアイデアが詰まっています。
人の数だけの夢、アイデアがあり、
大学はそういったものを育てる場所である。
その夢が社会に出るとき、
社会へ向けて弹けるイメージでデザインしました。
合格者の半数以上は当学院の受講生！

平成23年度1級建築士 設計製図試験

当学院 教室開設都道府県
合格者占有率

当学院教室開設都道府県
合格者占有率

工学院大学

平成23年度 1級建築士合格者
卒業者30名中、35名が合格しました！

平成23年度 2級建築士 試験

2級建築士
新試験
完全対応
宣言

平成23年度 2級建築士 試験

当学院受講生
基準達成者合率
97.3%

平成23年度 宅建試験

当学院受講生
基準達成者合率
92.5%

平成23年度 宅建試験

当学院受講生
基準達成者合率
88.8%

1級建築施工管理技術検定

当学院受講生
基準達成者合率
87.6%

充実の支援サービス

各各種合計データ

建築士法に基づく管理建築士講習

建築士法に基づく1級・2級建築士定期講習

実績も確認し、当学院講座の品質が示されます。ぜひ、体験してください。

お申し込み・お問合せは、当学院までお気軽にお問い合わせください。

〒103-0031 東京都港区芝浦4-1-17 院内電話:03-5637-1511

総合資格学院

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学

工学院大学
NICHE

niche (nich), n. {Fr. niche, form L nidus a nest}
1. a recess or hollow in a wall usually intended for a statue, bust or vase
2. a place or position particularly suitable for the person or thing in it.
  -webster’s New Twentieth Century Dictionary-

校名の愛称「Tokyo Urban Tech」について
工学院大学ではグローバル化の一環に、校名の愛称「Tokyo Urban Tech」を
商標登録として申請。